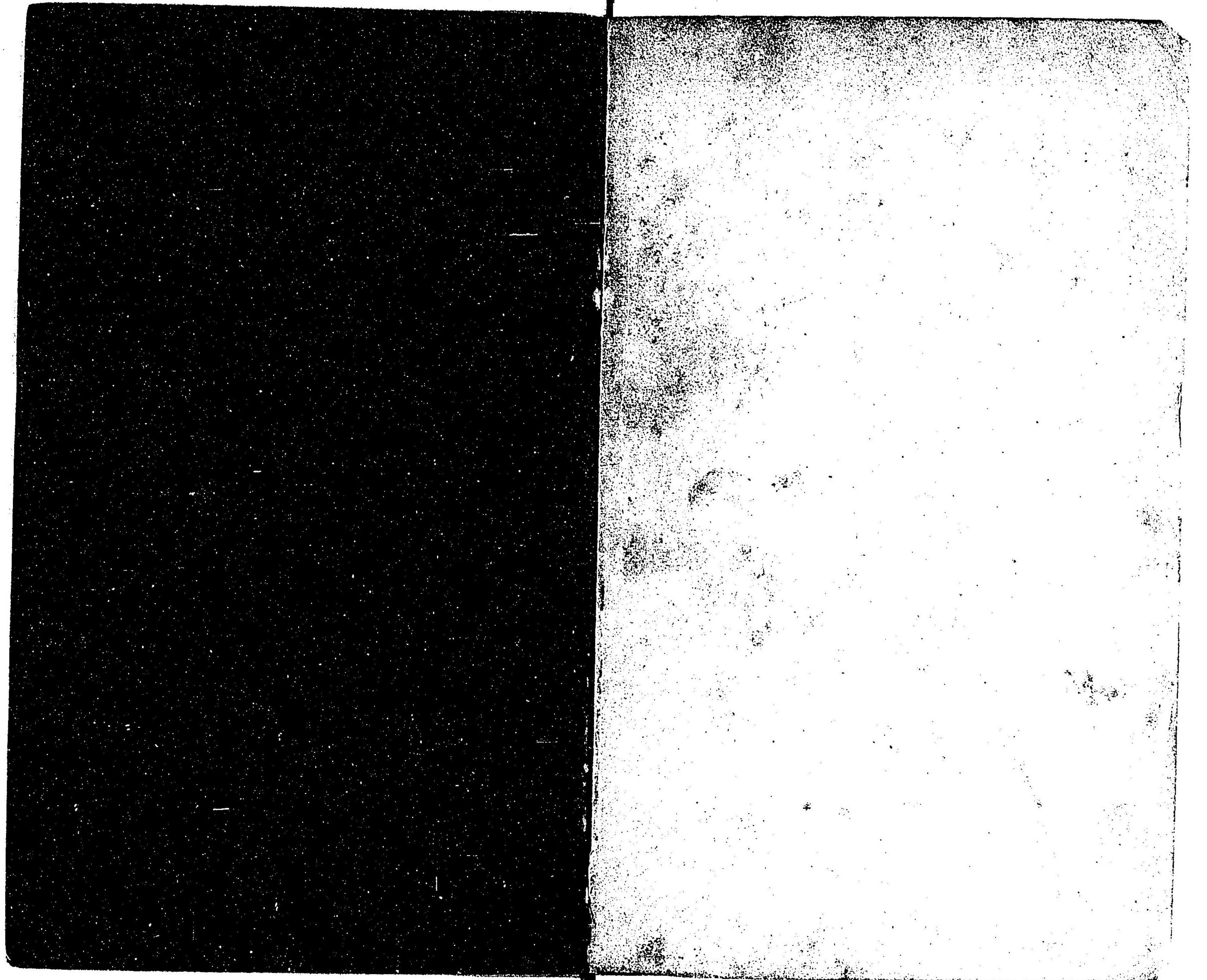




加藤由太郎
傳

加藤由太郎
傳
溝邊
演

溝邊
演



謝國宗
藏書

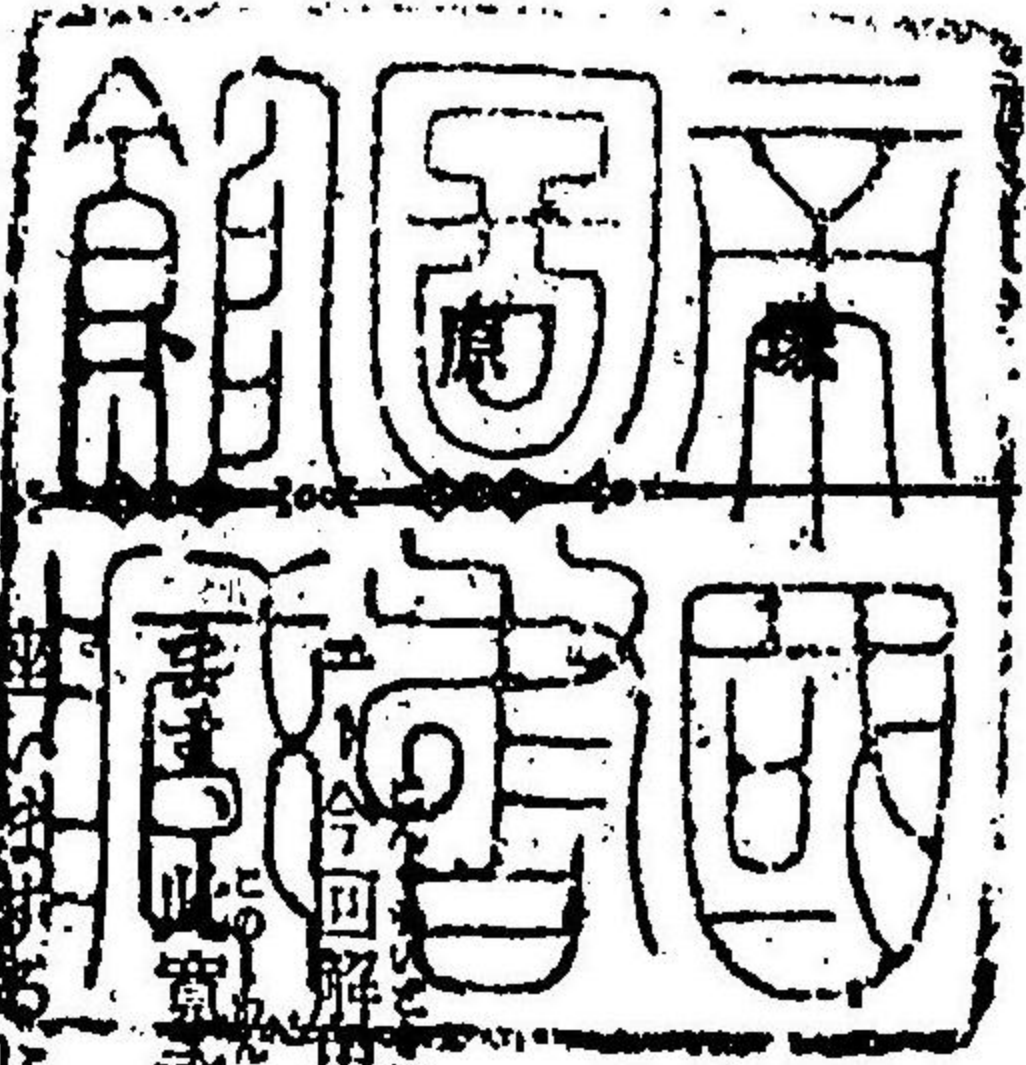




塚原卜傳譽の太刀風

寶井琴浚講演
加藤由太郎速記
吉田欽一速記

第一席



今、此書未度は誠に武藝が行なはれましたもの、なれども元龜天正の頃をいはれ、亂國で御
 由て武藝は野中の白水練と云ふので餘り人が好むものも有りません其中に上
 州群馬郡三の輪の住人上泉伊勢守藤原の秀綱と云ふ方は亂國の世の中に一人の弟子を御
 取り遊ばして其上泉伊勢守秀綱の門弟塚原小太郎十八歳の時師匠伊勢守秀綱と正月稽考
 始めの立合に僅た一ト打に尊師の肩口を突た爲に 秀綱一汝師に勝れり。と云はれた先づ世
 の中に弟子は師の半源に及ばすと云ふのに師に勝れると云ふのは此卜傳先生斗り後に眞影
 流を看破り卜傳流と稱け塚原卜傳と御成被爲たが是れ迄は小太郎と申しました此小太郎の

(一)

師匠上泉秀綱は武藝の祖と云ふ常陸國香取の住人吉野山城守家直入道鳥羽齋の御弟子であります、山城守の四天王と云ふ御弟子は杉本備前守政元、上泉伊勢守秀綱、師岡一派齋、塚原土佐守是を吉野の四天王と云ふ後に師岡一派齋は生國日向國佐土原在に引取りまして師岡一派流と云ふ流名を弘めました杉本備前守政元は師より暇を貰つて下總國鹿島の神社に三七二十一日の大願を誓ひ満願の當夜に義經傳授の鞍馬八流の巻を授り魔神香取の二神が生木を以て戦ひしを夢の内に授かり是を直神影流と申します是より杉本が上泉伊勢守秀綱にも其極意を授け夫れより代々直神影流は繼續して明治二十七年九月十一日六十五歳で下谷車阪町で死去致した師岡健吉の代まで續いて居りました其塚原土佐守と云ふ人は常陸國塚原の城主其高五万石佐竹右京大夫義繁の家老でありました御總領を帶刀次男を小太郎と云ふ右の小太郎勝義二十二歳に相成るまで粉骨を盡して尊師上泉伊勢守の許に修行致しました然るに天文元年則ち永録二年川中島に於て越後の上杉入道謙信と甲斐の武田入道信玄と戦ひが熾まり御自分は親しく御父の許にあり時移つて弘治元年の新玉の春を迎へる々にて尊師の許へ行ふと云ふ積りで身仕度を致して居ります然るに爰に出羽の國羽黒山大黒堂の別當の信濃九入道圓海と云ふ身の丈が六尺五分力量が五十人方あつたそうで此人

多くの弟子を集めて棒を擧げせまして其身は一丈二尺の金剛杖を使うに妙を得て居る故に圓海は弟子を従へ出羽の羽黒山を立出でまして諸方の導場を押して歩き圓海の生木に當つたる者は或ひは五体不具となり亦是は面部を破られ立合ても連もかなはざる故に諸方の導場で甲一誠に折角御尋ねに相成り難有い仕合せだが御坊に立合た處が到底及ぶものでは無い是れは甚だ失禮であるが權現へ御奉納を願度い。なぞと云つて或は五兩亦是七兩……當今の金と違つて永録年間の金子の位は高大なものであります是れを其圓海好いことに爲ては我飲料と爲て是を懷中に収めては歩み次第々々に増長り増長り圓海諸方を旋つて居りました然れども上州の三の輪へは恐れを爲して居るか上泉の導場へは一度も來ない中には實に何うも憎い奴だと思ふに由り 乙「御坊吾々の處へ斗り二度も三度も御出でが無くとも武藝の源上と評判の高い上泉の導場へ往たら宜からう此つニヤ少と御坊も及ばんと見へる。と中に忌々敷いから云ふ性來教慢無禮の奴だに由て 圓「伊勢守秀綱とて何程のことやあらん去れば乗込んで呉れやう。と云ふので十三人の弟子を連れて上州三の輪へ來つて見ると廣々たる處の導場玄關へ掛り 圓「頼まう……弟子「ドレ。と取次の弟子が玄關へ出ると身の丈は六尺五分布色の衣頭巾を頭上に戴き太刀を佩き負を背負ひ黒色の脚

袴八ツ目の草鞋宛も嚴然氣なる山伏連中 弟子「扱てこそ例の導場聚し来たな……エー何處から」
 「愚僧は出羽の國羽黒山大黒の別當信濃丸圓海と申す者御當家先生に御目通りの上
 一本御手合せを願度く心得ます何卒御取次下さいまし。暫く待して置て 弟「エー先生申上
 げます 秀「何事だ 弟「例の羽黒山の信濃丸入道圓海御手合せを致したいと罷り出でました
 伊勢守御聞遊ばして 秀「憎さも憎し坊主奴等引込んで一本の許に打負して遣らう。と思召
 たが 秀「イヤ然ふで無い勝た處で大人氣無い先方は山伏己れは武藝の司負れば伊勢守老餘
 を致したなぞと云はれるのが辛いは手仕かづ立合すに返した方が宜からう……風邪だと
 申して何れ全快次第御手合せを致さうと歸して仕舞へ 弟「畏まりました。と玄關へ出て來
 て 弟「エー折角の御尋ねで御座るが尊師御病氣に御座いますから全快次第御手合せを致
 すと云ふこと 圓「ハ、ハ、ア左様か然らば伊勢殿御全快の節亦伺うで御座らう宜しう。と言詞
 を殘して其場を立出で亦候五六日を経ると 圓「頼もしく 弟「ドレ……是れはハ、圓海
 老能く御見へで…… 圓「今日は先生御宅で御座るか 弟「未だ病氣全快を致しません誠に御
 氣の海様で 圓「ハ、ハ、ア左様か餘程長延くと見へる然らば亦伺うで御座らう。と立歸り四五
 日在方を經旋つて居りました亦候や五六日を経て來る悪いことは云ひ當てると云ふ伊勢守

秀綱先生大熱往來爲て今度は眞實に動くこと能はず高枕で臥つて御出でなさる 圓「頼もしく
 往來にて身動きも成らざる位 圓「エー先生御病氣御全快かな 弟「御意に御座いますして大熱
 弱と相成り僅かの病氣に身体の動かぬと云ふは、實に情け無きこと……圓海が參る度毎
 に御病氣かな。頼りに増まれ口を玄關で聞て居るのを何んな奴だと導場から立て來たのは
 四天王の一人神宮伊豆守が導場の引合せから覗いて居たが其一言が耳に這入り 伊「奇怪至
 極の瘦坊主導場へ引摺り込んで目に物見せて呉れやうと云ふので 伊「コソ、玄關に居る
 圓海に師は病氣で立合んが四天王八天狗の者共が居る門弟で宜しくば立合ふに山り是へ呼
 込め 弟「畏まりました……扱て圓海老尊師は御病氣だか四天王の八天狗が今日揃つて居る
 吾々で宜しくば御手合せを致さう。上泉の四天王は何處へ出しても一方の先生方斗り 圓「
 イヤ此奴等の腕を試せば伊勢守の腕が分る速かに御立合を致さう。と爰で皆々玄關敷盛に
 腰を掛けて草鞋を取て案内に連れ導場へ這入つたるが流石に圓海は今迄小さな尻ばくた導
 場を見て歩いた末上泉の導場へ這入つて見ると光々と爲て實に何うも目を驚かす斗り圓海
 を始め弟子共其處へメラリ居流れて居る内町率に其處へ御茶が出でます 伊豆「扱て始め

て御目に掛る拙者は上泉伊勢守秀綱が門弟神宮伊豆守 又「拙者は柳生又左衛門 文」拙者は
 正田文五郎 藏「拙者は丸目藏人で御座る。扱て四天王一々撥揆を致し 伊「願くば御坊御弟
 子と御手合せを願ふ 圓「委細心得ました。信濃丸圓海も下らない弟子を出して見苦しい負
 を爲度くない。と思ふに由り大黒堂の金山に目配を爲て 圓「其方罷出るが好い。と云はて
 金山は古今に好く棒の出来る男だに由り其處へ出でました扱て四天王は緘取りで立合ふと
 云ふので四人が抽籤を拵へて引く其一番に柳生又左衛門宗好此人が抽籤に當り木刀を提げ
 て其處へ出まするが此柳生又左衛門宗好と云ふ人は後に東照宮の御家來に相成て大目付を
 勤め三千石を頂戴して徳川家の爲に阪崎出羽守成政を切て一万石に出精を致し柳生但馬守
 と相成り徳川の御指南番其柳生又左衛門其處へ出まして 又「御手柔らかに……。大黒堂の
 金山棒を流々と振て 金「得物が長き故失禮御免。と一言又左衛門に詫ながら大上殿に棒を
 取直す柳生又左衛門下より青眼に付けて 又「何んぞ如斯取るにも足らざる腕で導揚暴し片
 腹痛い。とアリ〜〜と互ひに取詰て居たが大黒堂の金山打下す際無いに由り又左衛
 門 又「サア打込んで来ヨ。と右の半面に破れを見せたる處誘ひの隙とは思へども金山風を
 巻て打下して来るヒヨリと体を捻つて飛込み様に左りの肩口を僅た一本に突た金山險隈と

透進て 金「参つた……恐れ入りました。又左衛門ニヤリ〜〜笑ひ乍ら木刀を提げて下る二
 度目に比沙門堂の萬海が其處へ立出でる四天王の内から上州阪本の住人丸目藏人が出まし
 て此御方は丸目流と一派を後に御弘め被爲て外に一傳流の極意を得丸目流と一傳流の兩流
 を指南致された方、扱て丸目藏人其處へ出でまして比沙門堂の萬海と互に位取りを爲て居
 るかと思ふと忽ち飛込んで小手を腕かに比沙門堂萬海打たれ手も無く負けて退く第三番に
 辨天堂の龍山が出た時に四天王の上席神宮伊豆守木劍を提て其處に出でたるが辨天堂の龍
 山の如きなどが相手に成るべきもので無い是も手も無く唯一本の許に討たれ退いて仕舞つ
 た此時圓海扇を突て見て居たが實に皆物凄しい伎倆だに由て 圓「此上は圓海が御相手に相成
 らう。と着て居たる處の衣の袖を絞り上げ布を疊んで鉢巻を致し右手に一丈二尺の金剛杖
 を押取り通し 圓「得物が長き故失禮有るかも知れん誰方でも御相手に相成らう。向ふに見
 て居た八天狗の内宮原一傳齋を見て居たが 一「神宮氏此上は吾々も後學の爲圓海老に一
 本御手合せを願ふ 伊「然らば各々に任せやう。其處で四天王は側旁に扣へて腕前を見物を
 致して居る宮原一傳齋は八天狗の上席だに由り 一「何んの斯んな大入道驅幹斗り大きいと
 雖も何程の事やあらん。と出たと思ふと圓海の爲に僅た一本に肩口を打たれ續いて出たる

由井八郎此人も同じく肩口を打たれ三番に出た淺山三五郎此人も手も無く打たれ四番に出た戸塚源次是れも手も無く負ける出る者も出る者も圓海に二々打と合せる者がございません四天王は是を見て居たるが 四天王「憎さも憎し。と思ひましたから柳生又左衛門が出る此人も負けた其他神宮伊豆丸目藏人其外皆一様に負けを取り實に聞しに違はざる強い奴だと思つて呆れて居る 圓「エ、扱て各々モ一圓海の相手に成べき者はござらんか 伊「御坊連も吾々は及ばん恐れ入つた 圓「然らば御殿頂戴致す然し伊勢殿御病氣とあれば御枕許に於き御病氣御平癒の祈りを致して參らう。イヤ感心な男た人は悪く云ふが中々實氣があると思ひ乍ら 一同「何卒何分願ふ。と四天王が案内を爲て師匠伊勢守秀綱の御枕許へ座らせました信濃丸圓海癡顔を見て居ると伊勢守眼を閉てウツ／＼爲て御出でなさる臆て祈禱も終つて 圓「伊勢殿貴所は仕合せな御人……此圓海が尋ねて來た時に御病氣にあらすんば愚僧の生木に當つて尊公は五體不具となり但しは亦打所に山て落命を爲るかも知れん然るに尊公は御病氣が御仕合せなのだ是より羽黒主禪が尋ねて參れば何時でも構はず御病氣に御成んなさいイヤハツハ、ハ、ハ、ハ、と大口明て高笑ひを爲てノソリ／＼と出て行くのを伊勢守秀綱先生眼を開いて身を震はし 伊勢「餘りと云へば不埒極むまる圓海の一言身体自由なれば彼

を一刀の許に切て捨てべき奴なれど五体動かさるに由り如何とも詮方無い。と伊勢守秀綱涙を流して身を震はして御出でなさる四天王も如何にも氣の毒で堪りません 一同「飛んだ耻辱を師に當てた。と思ひ扱て右の次第を書面に致して常陸の國塚原の城へ是れを届けました然るに塚原の城に御父上の御機嫌を伺つて御出で被爲た小太郎勝義遠からずして三の輪へ參り尊師上泉伊勢守の機嫌を聞乍ら且は年來の友にも逢ひ武藝の様子も聞たいと云ふ心持で居る處へ若武士が 若「エ、若殿へ申上り 小「何んじや 若「只今上州より至急の御書面で御座ります 小「ハ、ア左様で有るか尊師久敷く面會を致さいる故懐しく思召され小太郎へ書面を下し置かれたと見へる。臆て小太郎御取上げ遊ばして名宛を見ると四天王の名宛だ 小「ハ、ア四人共に小太郎を懐しく心得書面を呉れたるか。と中押開いてしげ／＼見終りて元より疥癬の強へ小太郎満面朱を注ぎ 肥切り上がり身を震はせると羽黒山の方とをばしき方をハツタと睨て 小「己れ悪みても猶餘りある圓海師に耻辱を掛けたる不届者如何致して呉れるか覺悟致せ。と其手紙を手に握つたる儘奥へ御出で遊ばすと土佐の守殿嗣子帶刀殿と碁を圍んで御出でなさる 小「御慰み中御父上に對し小太郎御邪魔ながら少と申上げたへ義が御座り升 土「小太郎何んじや 小「願くば小太郎に永の御眼を仰せ附けられと

う御座ひ升 土「最早三の輪へ行かッしやるか 小「イエ三の輪は参りません是れ此御書面を御覽被下様……此書面に依れば是れが今生の御暇乞かと存じますと差し出たしたる書面を土佐の守殿取上げて見て居られたが 土「扱ては圓海坊に師が耻辱を與へられたりと見へる 小「御意に御座ります師の陰は七尺去つて影を踏ます然るに圓海師の面前に於て悪口を吐ひたる不屈者何程の事やあらん小太郎が年來覺ひたる腕を持って羽黒山に登山をして圓海を始めとして手障る奴は片つ端より切り立て刀は目釘の續く限り身體は骨のあらん限り羽黒山に屍を曝らす覺悟故何とぞ御暇を頂台仕り度ふ御座る。大概の親なら止めるが戰場萬馬往來をした土佐の守 土「小太郎流石に其方は土佐が伴勇敷も申したり勇敷き事であるや暇を遣わす見事羽黒山に最期を遂げよ汝の敵は此土佐が討て遣る程に美事最期を遂げる我れは一人の立合を以て彼れを討にあらす軍馬を起して羽黒山の者共を皆殺しに致して遣わす心置きなく乗込み羽黒山に於て最期を遂げ羽黒山を枕として月山と湯殿山へ足を踐み掛けて死ね。大名の言ひ草は大きいね然んな永ひ足が有るものじやア無い。扱て兄の帯刀に別れを告げて小太郎來國俊の大刀の目釘を取替へ小刀を淺黄の袋へ入れ他に枇杷の木劍を一本……枇杷の木劍は眞劍に類すると云ふ打處が悪いと僅々一本に敵を打殺す其代

り不淨を嫌う木だに由て人なら人を打た處だけは穢點に成りませす輕くつて折れる髪が無くつて古今の名木でクスな是れをも背中へ負ひ一文字の笠を面深に戴き常陸の國塚原を立て出羽の國羽黒山へ乗込んで來たが時は弘治の元年二月の七日唯今の時間で午前十一時其頃の四ツ半頃羽黒の麓へ掛つて來るスルと向ふの松ヶ枝の稍へ三尺斗りの猿猴を四ツ足を縛つて途中へフヲ下げ百性四五人廻りを取巻き 甲「竹槍で早く突ちまへ……其方から突け。小太郎は見て御出で被爲たが御自分は日吉山王を非常に信仰の方だに由り今竹槍で猿猴を突くと云ふのを御覽遊ばして 小「ヤ一不惑の至り……コレ待て……と聲を掛けたるので百性共が回顧ると侍だ田舎で侍を見た日にやア大變なもので且立派な侍で有るから百性一同大地へヘタ〜と座り頭を擦げ 甲「是れは御武家様でございませしたか 小「其方達は何科あつて此猿猴を槍玉に揚げやうと云ふのだ吾れは日吉山王の權現を信仰だに由て知らなければ夫れ迄だが見た上は詮方が無い命を取るは如何にも不惑だに由て何卒助けては呉れまいか 乙「折角の御思召でございませすが此番生は憎ひ奴でございませして私共田野へ参る留守を尾込み家へ這入りましてお鉢を明けて御飯を喰る御業を喰る追馳ると翌日來て蒲團をベリ〜に破り寢道具杯を小便だらけに爲て仕舞ひ或は釜なんぞを持って往て仕舞ひまして

何うも夫れは悪戯斗り致しまして忽論此奴斗りではございません仲間が澤山あると見へて五月蠅いやうに猿猴が来るんでございませぬ漸く落し穴ア方々へ拵へて置て遂々一正捕へましたが……小「イヤ夫れは誠に此野猿が悪いだから折角捕へたものを唯呉れとは云ぬん損は決して掛けないから此金で賣て呉れる。と小太郎金三兩を差出しました 甲「左様でございませぬア……何うだね皆んな未だ猿猴の賣買は爲たことは無へが御侍さんが三兩遣らうと仰しやるんだ何うだね皆んな 乙「御武家様がア、被仰るもんだから仰せに従ひ助けて遣らうか 甲「夫れでは旦那様折角の仰せでがすかす助けて遣わしませう 小「夫れは辱け無此方へ呉れ。と梢から下して四足を縛ッてある其繩ハグル〜と足をからめ 小「然らば乃公が求めれば乃公の自由に致すから。と猿猴の四足をば掴み肩に擔いで其儘ソク〜〜
 羽黒山を登つて行く百性は後姿を見一同「御年は若いけれども何うも之れへ御武家様だ大層な金満家と見へて猿猴を三兩で買て御座るが御若いには感心だ。と后を見送り褒めつ〜皆々我家を差て歸る小太郎は山の半腹まで登つて參り回顧れば最早人影も無し山の窪みに菅一文字の笠を敷きトツカリ腰を掛け猿の繩を解いて遣わす 小「此りや其方も生あれば能く聞けヨ其方は山中に住ひをして山中に食すべき物がある必ず万物の鹽長たる人

家を犯して食物を盗み喰ふなと云ふは何うも怪からんこと其方も人間に近い働きを爲すべき物以後心得違ひを爲ては成らんぞ……サ、早く參れ〜と右の手を上げ野猿の頭を撫て遣るに由りボロリ〜と涙を流して前足を合せまして……四足共に彼奴は何うも同なじこと……伏拜み〜回顧ては見、回顧ては見頭を下げて山奥を差て行く 小「イヤ〜心ならずも奇特な事を爲てけり。と小太郎一息吐て見送つて居る、情けは人の爲ならず此野猿に後に小太郎が命を救われまする小太郎再び笠を提げて登つて來るモ一羽黒山頂之間近に成ると山間に響き耳を賣いてボン〜と云ふ棒の音が聞へる聽て小太郎導擲へ着し玄關へマツクリ立上つて 小「頼む〜物モ…… 取次「ドーレ……何處から 小「エ、斯す拙者は常陸の國住人仁科與四郎と申する者信濃丸圓海入道に一本立合に參つたと宜し取次つしやい大きに御苦勞だ。取次の奴驚いた 取次「何んと云ふイケ粗暴な奴だらう……エ、龍山先生。辨天堂龍山が 龍「何んだ 取次「年の頃をい二十一二色の淺黒い背のヌマリと爲た侍打拵常陸の住人仁科與四郎と云ふ奴が大和尚と立合を爲たいと申込んで參りましたがイヤ其言葉使ひのイケ粗暴な奴で…… 辨天堂の龍山聞て 龍「夫れは狂人だ武藝の優心者だ師匠に云へば打殺されて仕舞う。と云ひ乍ら玄關へ出て來て 龍「コレは〜お若い

の我師の坊は異乱に渡らせられるからか前のやうな乱心者が来ると打殺されて仕舞う心得違ひを爲さないで早速と山を下つて行つしやい 小「扣へる……武藝の上で打殺さるゝは是れ藝道未熟だ己れが悪いので詮方が無い汝等の世話には成らん汝の師匠圓海に取次げば好いのだ取次げ。龍山怒つたの怒らないのでは無い 龍「何處まで亂心を爲て居やアがるんだらう 小「速かに取次げ 龍「マア此方へ上れ 小「チーヨ 龍「何處迄大風な奴だなア。案内に連れて一ト間へ通る龍山此由を圓海に告ると圓海胸を撫て笑ひ 圓「ハ、ハ、ハ、一同で導場へ通し廻つて遣んなさい 一同「點と面白し。と羽黒主現導場へ通す小太郎ビクとも爲す導場へ通りまして扣へて居ると圓海被布を着用して出來り 圓「始めて逢うが和郎は仁科與四郎と云わつしやるか拙者は圓海だ 小「貴様が圓海か一本立合う 圓「イヤ乃公の立合う前に弟子が立合う 小「チ、夫れで好い尻ボクヲ導場では必ず弟子と立合せて疲れた時分に師匠が出る夫れは當然の事だ……皆な一本宛殺へて遣るから出て來さつしやい。圓海の弟子は怒つたね此小河童野郎好し〜 一太刀の許に打据て呉れやうと弟子共は出ましたが相手にも成らん皆端から負けた今年二十二歳の塚原小太郎東國の大導場武藝の祖と云へる上泉伊勢守を十九歳の時一打に突たる古今無双の早業。出る奴も〜何うも夫りや頭をコツ〜打れ

凡そ三十人斗り滅茶々に負ちまつた辨天堂龍山が出ると同なじやうた比沙門堂滿海が出てても大黒堂の金山が出てても同なじやうに負けました 一同「何んて〜強い奴だらう。と呆れ返つて居ると圓海襦を掛け使ひ馴れたる金剛杖を取て 圓「サア愚僧が相手に成る然し若い圓海の金剛杖は眞劍に類するに由り次第に由て當り處が悪いと命を取るかも知れんから恐むな。小太郎カラ〜と打笑ひ 小「固より圓海我が所持の木劍も眞劍に類するに由り當り所が悪ければ汝の一命は無い妻子があれば今の内に暇を遣るから別れを告げ充分に遺言致して置け。圓海瀕に障つて詮方が無いから 圓「イヤ來い。と跡へ退つて件んの棒を流々と振直したるが大上段に取直しヨリ〜と身構へる日本無双の塚原小太郎勝義ヨリ〜と青眼に付けたが 小「何んだ是式きの瘦腕サア何處からでも打込んで來ヨ。と身構へて居る圓海振上げたが寸分の隙も無いから 圓「何んと云ふ強い奴だらう 小「圓海打てめ……イヤサ打てめへ今社本名を名乗て遣わす確かに聞け常陸の住人仁科與四郎とは眞ッ赤な偽り吾社は常陸の國塚原土佐守の伴小太郎源勝義尊師伊勢守秀綱の恥辱を雪ん爲當山に懸々登つたり覺悟を爲る。と呼わつたる故圓海も塚原小太郎なら最初立合やア爲ない今更詮方が無いから 圓「ハッ。と思ふ處へ飛込み來つた小太郎勝義先生一聲 小「エーイ……。と

叫んだと思ふと飛込み來つて金剛杖を打拂ひ手許へ繰込み 小「ヤッ……。」と叫んで打てば
圓海の頭アバツクリと破れて仕舞つたイヤ弟子が見て驚いたの何んのと云つて 一同「スワ
ヤ大變師匠の頭の繼目が割れた。人間の頭に繼目があるものじやア無い 一同「ッレ師匠の
敵の小太郎を逃すな……。」と一同討て掛る小太郎莞爾と打笑つて 小「固より覺悟の我々サ
ア掛らば掛れ者共。」と來國俊の大刀を引抜き羽黒の山上に立上る弘治の元年二月七日羽黒
山に塚原小太郎百三十人の負傷を拵へるの一件次回に申述べます……。

第二席

扱て辯じかけ置きました塚原小太郎勝義お信濃丸入道圓海の腦上を只一本に打ち殺して仕
舞うと大勢の山伏ども師の敵き小太郎を逃すなど得物々々をおつ取り打つて掛る小太郎勝
義嘲笑ひ我元より最後を覺悟して有れば何百人出來るとも何んぞ恐るべきやと側へに置い
たる來國俊の二尺二寸の大刀を抜き見せず押し馳け來る奴を「ヤッ」切り擲る誠や東國
に於て麒麟大天狗と言われたる塚原大刀先の早き事掛り來る者を彼所此所散亂爲す中にも
大黒堂の金山お袈裟掛に斬つて落され武將門香海の空竹割りに討つて落されるや差しも羽
黒山の堂勢山下の方に一同ドット斗りに追巻くられて下る勝義一息ホット付き血に染つた

る國俊の剣を握りたる儘「アッ」と踊り出して山下の方を見て居るに山底に小玉に響く螺の
音色耳を貫く斗り「ア」と云ふ時の聲を揚げて羽黒山の堂勢又ぞる得物々々を持つて押掛
け來る左乍ら何に負ふ山伏の一塊り潮の出たると云ふ斗りなり小太郎勝義大音を揚て 小「
ヤア」者共我が眼の動く内はやわか汝等の手に乗らんや今一討ち討つて呉れん。」と再び
向ふ山伏共に大刀を頭上に振り振り勢ひ破竹の如くに山下に降りられ此勢ひに乘じ又々右
手左手に斬り巻くる流石の山伏ども呆れはてて麓の方に崩れて逃げ行く半腹の巖角の間ひ
を流れる血しは恰も谷川の水の流るゝが如くなり小太郎勝義苦が笑ひを仕乍ら立つたりし
が凡そ手負と死人は百三十八人前代未聞の次第成り小太郎のそり〜と半腹迄立ち歸つて
左無きだに息が切れたるか四方を見舞わし巖の凹みの清水溜つて居たのを見て刀を右に提
げ其巖の小水を左りで汲み上げ一口飲んで二度目に口を漱ごうと仰向けに相成り口を漱い
で居ると 側の巖の凹みの所に逃げ損なつて潛んで居たのわ圓海の弟子辨天堂龍山此者鎖
り鎌を使ふ事に妙を得たる者小太郎を生取らうと思へども名にし負ふ日本無双の早業にし
て尋常に擒る暇が無い二三の同輩も同じように一同諸共に逃げ巖の凹みに潜んで有しが目
の前に小太郎水を飲んで居るのに目つかれば眞二つに被爲すに依り身を潜めて居ります

と水を飲んで仰向いた小太郎を見て是より外に掛る事爲しと分銅を取り直して巖の小蔭から一喝叫んでエイと彼の分銅を擲げたるにより今ま一文字に飛び降つて小太郎の首へぐるくど巻附たるにより小「シマツたり。と塚原先生左りの腕で捻ろうと思つて拷ぐるうと云ふ間に敵の爲にグイと引かれたので咽に食ひ込んだ事故山伏共わ占めたりと大勢木の影巖の小蔭より皆々棒を持つて踊り出双腕を拂うやら後背より打つて掛る流石の天下の豪傑塚原小太郎夫へ掬りの如くに縛り揚げられてしまいましたた扱大勢の山伏共わホツと一息着き 甲「龍山先生イヤ何うも御功名く聞しに増る塚原の腕前…… 乙「速かに師の敵さ故一寸試し五分試しにするが宜しい言ふと名々の者共 △「夫が宜い」と異口同音に申します龍山傍らより口を出し 龍「イヤ各々方も我々も一同の敵成れば一寸試し五分試しと仰るのわ御尤も乍らイヤく各々方の申分決して無理にわ御座らん尤も乍ら元來堂山にわ堂山の法として一夜を山吊に行ふが法だに依つて例の如くに死せん様に吊して置が言ひ 甲「イヤ御尤も然らば我々は是より此奴を彼の八ヶ峰の頂上に置き先づ明日の樂しみと致さんと大勢で塚原をば擽いで八ヶ峰と云ふ羽黒山の頂上其八ヶ峰の山上より木枝に繩を掛け夫れへ逆様に吊して置く尤も是わ羽黒山の山伏に不埒が有れば兩足を縛り兩の腕を縛つて八ヶ

峰の頂上より吊して置く云ふ御規定で一晚立つて生きて居れば夫れで先づ無罪成れ共まわく大概一晚木枝に吊されて息の有る者わ無い然れば小太郎此度八ヶ峰の頂上より谷合ひに逆様に吊して置く下は何しと逆か巻きて押し流れに急流矢を射る斗り時は弘治の元年二月七日の夜半春とわ雖も如月の夜半寂々寥々としたる羽黒の御山の木枝に縛れたる塚原小太郎勝義涙を流して我わ元より最後を覺悟致して父母に暇を告げ常山に乗り込み連れ勇ぎ能く死なんと思ひしに誤つて彼等敵の爲に斯く擽に相成るとわ淺ましき死を遂げることを塚原が家名の耻辱憐れ日吉權現恵ぐみを下せ賜ひて勇ぎ能く小太郎が生命を助け賜わん事を願ふと一心不亂に相成り祈願して居る内に次第々々に更け渡る時に巖角を次第々々と數十匹の野猿が集つて來たる逆巻き立つて押し流れる急流目の下に置き眞先に立つた三尺斗りの野猿坊又其跡からアロくくく來追ひて來る野猿坊すると一尺四五寸も有る野猿がヒタリと塚原の身體に飛び着き彼の繩へ攫まり木枝へ傳りてツルくくくと早い事俗に言ふ猿猴の木枝を渡ると云ふが其通りで御座います扱ても野猿わ一番立ちに上り跡足を木枝にヒタリと擽んで逆様に成つて塚原の縛つて有る繩に攫つて今や食ひ切らうと云ふ時今跡に有つた三尺斗りの野猿がボンと小太郎身體に飛び着き小手を誂しめたる繩を食ひ

切ら右の手を己れの肩に掛けて我が跡足を小太郎と同じく振ら下げて居る又ぞろ一匹三尺
 斗りの野猿が飛び着き同じ様に左の腕を背負つて振ら下る其内にて繩を一つ振れると小
 太郎の身體に「フンフン」と振れて往く又も益々其繩を劇しく振つて来るので谷川から
 向ふの巖に當らん斗りに劇しく振つて来る内に「フツ」と上の野猿が繩を食ひ切る當炭に小
 太郎を背負つて轉覆返ると思つてか向ふの巖の上に飛んだる事左ながら音もせず繩を切る
 當炭に木枝から繩と一緒にとりまつて巖角に飛び下りて來た其早い事目にも遮る斗りで
 御座います頃で數十匹の野猿「チャツ」〜と小太郎を擔ぎ巖角を傳ひ渡つて何所を當と
 云ふ事も無く背負て行く又々縁も無い所の道にかゝれば其所を「フン」〜と飛び越へ山
 道なれど二里も歩んだらうと思ふ内に其窟の中に下つて小太郎の繩を「フツ」〜食ひ切つて
 仕舞ひ首びの廻り或は腕なを「チヨイ」〜創の有るのを「ロ」〜と數十匹の野猿が舐め
 て身體を呉れるやら撫でるやらして守護して居る。然う斯うする内に夜ががらりと明け扱
 て御話更つて羽黒山の山伏共同労働昨日龍山の申す言葉に従つて小太郎勝義を木枝に振
 り下げ置いたが今日此所に持ち來り何んでも師匠の敵さ一討つゝ怨らまで置くべきやと
 勇み立つて八ヶ峰の頂上に来ると木枝に縛つて置いたる結び目から繩が切れて居から「甲」

イヤ扱わ何ちもか可笑いなわ然し此奴わ常山を血を持って暴したる事故魔神の爲に奪われ
 眞逆様に落ちたると見へるが我々今日わ一寸試し五分試しに爲さんと思ひしが斯く逆巻く
 急流に落ちなば夫れで諦めが宜いと云ひ合つて山に残つたる小太郎の懐中に有し所の金數
 も刀も分取りして仕舞ひ是れわ皆殺るされた者の夫れ〜の手當に仕様と詰り相談がさま
 る扱此方等わ塚原先生大勢の猿の爲守護されて看護を受けて居る夜明けと覺し頃漸くに
 心元に歸りましたから塚原小太郎先生兩眼を開いて見るに儼かに太陽の光りを遠く木の間
 から差して居る四方を見ると寂々としげ渡る所の窟ヒヨイと見るに數多の野猿がツツと列
 を爲して居る其中に御自分が昨日羽黒山に登らうと云ふ時に危難さ助け使せし野猿を見て
 思わす兩の手を揚げ「小」昨日汝を助け歸せし我が恩を忘れせず昨夜の我が難義を助けて呉
 れたるか。と兩眼から「ハッ」〜と涙を流し兩手を揚げて野猿の頭らを撫で「小」我必ず塚
 原の家に立ち戻つたら汝等の姿を畫に致して小太郎生涯の守り本尊とするぞや…：辱けな
 いぞ。と數度野猿の頭らを撫で御出被成所へ小猿共わ木の實芽の實を「ポリ」〜剝いてわ是
 れを小太郎先生の前へ出す所へ又がさ〜音がする何所から盗んで來たかお櫃を背負て來
 る或わ又何ちも鱈魚の類ひを盗んで來る…：盗まれた奴こそ才難です…：皆々小太郎へ是

れを御馳走に持つて来る小太郎先生此谷合ひの窟に身體の全く全快るのを樂しみにして御
 田で有りしが扱其月も越へて三月の始めと成りましたけれども湯へも這入らずに居る者で
 すから流石に五萬石の殿様見る影も無き有様で御座います時に或日の事二匹の大野猿小太
 郎の前に來たつて首べを下げ頻りに小太郎の手を掴へて指差して居る塚原先生是を御覽被
 成つて小「ハア」最早我が身體が十分に全快したから彼方等へ行けと云ふ事であるか。
 と首を振つてがてんくを被成つて是から窟の内を出ると矢張り二匹の野猿が手引きて速
 れて行くすると谷合ひに掛り小川を横ひて行く四五丁も來たと思つて居ると逆巻きたる急
 流に掛りました突然二匹の野猿手を探つたと思ふと向へ飛び是から草原に出てツルく二
 匹に連れられて参りりましたが充分日は暮れたる上に草が我が背丈に依り延びたるので
 ウくツウくたる原中ですすると二匹の大野猿が大地に首を摺り附け頻りに東の方を指
 差して居る。小「コレハ誠に辱け無いぞや何れ我世に出なば必ず汝等の像を畫き守り本尊に
 して支すぞ。と言ひたるや二匹の野猿涙を流がして塚原を振り歸りく元來し道に歸つて
 行く小太郎も涙を流し。小「畜生でも我が恩を思ひ一度助けたる野猿に又我助けを得る是は
 象頭山金比羅大権現の御利益の力に有んと地に俯して御禮を申上て居りました扱小太郎先

生野原に直立たが何所を當と云ふ事も無ければ段々と草原を除て御出に相成りますとチツ
 リく見へる燈火扱は人家有りと思へる辱け無い事と早足に相成り來ると人家と思ひさ
 や甚だ大破したる社る何神かは知らねども今夜ひは一夜此堂中に寝るまんと燈火の光りに
 額面の表を見ると木立明神として有る狐格子を開ひて中に這入り見ると唯れが納めたか赤
 飯が其所に御座ります所から小太郎先生甚だ空腹で御出被成所から失禮い無いが此御赤
 飯を頂戴仕様と手を掛けて御覽被成と何日に納めた者かボツく成つて居て喰べる事も
 何にも出來無いから。小「ア……是れは連も無駄だ。と言ひ乍ら左のみ廣く無いからシロ
 堂中を見廻して居りますと何者が納めたかフツン……武藝執心の者と見へ片側に木劍
 が二本額に納つて居るから。小「ハア」亂國の世界に武藝執心の者が納めて有るのだと感
 心を被成て堂の内に眠るまねとする内にドヤく人聲がするから光りを吹き消し隅の方へ
 小「さく成つて屈んで御出被成内に。甲「イヤ……ドツトシヨイ……まわく頭ら御目出澤
 う御座いました。頭「イヤ……大きに貴様達も御苦勞だ。と言ふのを塚原先生堂の内から密
 々と覗いて居られますと暴ら呉れたる奴十八九人。甲「扱是からも一仕事に掛ら無ければ
 あ成らねいじや無いか。頭「夫じや緩々出掛けやうせ。乙「是へ道具皆置て往きましたよ一人

が言ふと 一同「夫が宜い〜。と是から長持 鏡袋針箱 或は釣り蓑等様々の者をば堂の縁
 端に并べ立て長持の蓋を開いて中から取り出したるは袴羽織 甲「イヤ乃公達が往つて引劍
 いて遣つたが取られた奴は皆寒むからう 頭「寒むからうか暑からうか何う成らうと其んな
 遠慮が居る者かサア〜 出掛けらうい 乙「夫は宜いが此女は何うするのですなわ 頭「堂の
 中に入れて置けば唯方も来る事は無いや皆んな其所へ入れて置け。高手小手に縛り狼狽を
 掛けて居る女を堂の中に居れて置き 甲「サア〜 此奴を斯うやつて。と狐格子を閉め箱提
 灯を照燈て行く其頭と云ふ奴が被衣を着て駕籠に打ち乗り大勢の者に擔がれヤ〜 往く
 を小太郎は堂の隅で是れを見て御出被成つて居つたが 小「ハア〜 …… 何共不慙じや。と
 思ひますから助けて遣ふと密々と這出して来る彼の女は戒しめを切る積りかヤタン〜 ガ
 ラ〜 とするから其音がするのを案内に小太郎先生女を攫まへて 小「是女中私は賊では無
 いぞ仕細有つて彼様な身には致して居るが …… 實名は申されんが常陸浪人の仁科與四郎と
 云ふ者だ然しお前が今夜の難儀助けて遣すと袷褌を取り戒しめの繩を解き 小「今堂の中
 より一什様子は伺つて居つたが盜賊共に違ひ無いがお前は何所の者じや 女「有り難う存じ
 ます私は此藪木村の福富吉郎太夫の …… 十萬兩の身代の福富が作萬助の嫁成る者で御座

ります夫れに只今の賊は三好長慶の浪人大山六郎太夫と云ふ藪木山に住んで居る大盜賊で
 御座います今日私 が嫁入の送りに就て家來共が大勢参りますを何うして知つて居ります
 か此の先の所へ掛つて参りますと突然出まして私共が供の者着用の装束を剥きまして夫れ
 を賊が着用して只今福富方に参り十萬兩の財産を盗み取らうと云ふ量見で参つたのに相違
 御座いません是私 も藪木村へ連れて往かれ様と云ふ所を那方に助けて頂き誠に有り難う
 存じます。一什を聞いて塚原先生 小「成る程三好の家來に雇を知る奴無いかのう如何に
 乱國とは言ひ乍ら罪無き町人を苦しめ夫已ならず金銀を盗むとは悪くも奴私助けて遣
 るから案内をさつしやい 女「ハア賢まりました 小「まだじや〜と言ふて小太郎は無手で
 は往つても危いと思ふから如何せんと思へられしが最前見て置いた木刀を手探りに羽目の方
 へ頼つて置いて羽目を一揚げ揚げ漸く二本の木劍を取り堂より立ち出で其所の立木に向つ
 てボン〜と打ち當て見るに堅く致して赤檜の木刀 小「是有れば錆刀で打つより確かだ。
 と二本の木劍を腰に横たへ 小「サア …… 来サつしやい。と女の手を引ひて木立明神の所を
 去りて行く五萬石の塚原小太郎勝義永らくの間谷の窟に御出に成つた故垢染で直黒で頭髪
 はボサ〜として髪は萌へる衣服は垢に染れて丸で何うも乞食の様で御座います勝義先生

女に教へられて参ります夜更け成れどもチヲ〜光りが見へると彼所だと女が指示しますに
 依つて小「ヨシ〜承知したお前何所へでも勝手な心得て御座ろうから忍んで御座れ私
 片端から賊を絶した時は呼ぶから 女「承知致しました 小「成る丈目撃らん様に左つしやれ
 女中は前に炭小屋の有るので密々と夫れへ潜んで居ります塚原先生二本の木剣に勢力入れ
 まして玄關の式臺の所の箱段の此方に待ち構へて居られ出て来たら斬つて捨て様座敷へ這
 入つて殺すは安い事成れども塵を穢したく無いと思ふから今や来らばと 小「サア来ひと待
 つて御出被成と奥の方で 頭「サア〜手前遠何んだぞ……宜ひ加減に飲んだら歸ら無けれ
 ば不可いぞ 小分「小頭誠に有り難う御座います是から先へお暇頂きますからと……じや
 アお頭御免被下まし夫じやお先へ 頭「じやあ……何んだぞ手前遠も堂に有る品物を擔ひで
 往か無ければ……夫に女連れて往か無ければ…… 小分「宜しう御座い夫れじや小頭ら御免
 被成いお頭お先へ参りますからイヤ……ドツコトシヨイ〇と一人背負葛籠を背負ひ乍から
 小「ウーイ……ア一宜ひ心持ちに成つた〇とアヲリ〜仕乍ら葛籠背負て玄關へ参りて格
 子戸をガリと開け箱段へト〜と式臺へ下りて来る所を最前から目星を附て傍らに控
 へし塚原先生 塚「ヤアツと云ふと一生懸命に打ら掛つたる事故打つたる木刀尋常の人の討

つ木刀とは違ひ何しろ日本無双の先生塚原小太郎勝義思ひ込んで小賊の頭を真二つに致し
 ました先生木刀を傍へ擲げ死骸と荷物を片脇へ寄せ小泥棒の装束に差したる山刀を引き抜
 きて星の光りで試つ眺つ内挿頭 小「何んだ斯んな 鈍刀斯様な者で人を討て可き者では無
 い此鈍刀より木刀が遙かに増したと再び持つて居つて斯度来る奴を待つて居る 小分「ヤア
 お先へ御免蒙りますませイヤ……ドツコトシヨイ〇と長持を擔ひで二人の小泥棒が 甲「な
 ……兄弟已れどうも左りの肩が利かないから右と取替へて呉れ 乙「然うは不可いと云ふ
 事よ已は少つとも左りが利かないのだから 甲「夫じや八丁位ひづ〜往つては取替へやう
 乙「夫れも然うよ……何しろ宜いか氣を附けて〇と長持を擔ぎ玄關へ踵〜と出て来る
 と前の奴が 甲「ヤイ〜……待つて呉んなも少し今爰を開け勿れば〇と左りの手で裕
 子戸を開け箱段を下り式臺の所へ足を掛けたかと思ふとハツト言ふて一聲叫んで討つたや
 つに直に轉々を打つてキヤツドンと式臺の所へ後背に倒れる跡に擔ひで居た奴肩をがくり
 とされたから 乙「痛へなぬ困るじや無いか盗賊でもする奴が幾等酔つたて箱段から落る奴
 も無い者だア……白痴な奴た已は右は利ねいんだなぬ其所へ座つては不可やなど長持を
 其所へ置き手繁りに 乙「ヤイ〜何うしたのだと男の傍へ来て頭を撫で 乙「イヤ……此野

郎何んば飲んだからと云つて頭の鉢を破る程飲ま無くとも宜いじや無いか何うしたのだと
 振り向く途炭を見込んで取り直した木剣を以ボカリと遣るとキヤツト言つて打倒れたから
 木剣を擲り出し二人の死骸を片腕に引き寄せ邪摩に成らん様に長持を引ひて表に出して仕
 舞ひ又も勇氣を張つて来いと待つて居る其内に大山六郎大夫 大「夫じや皆んな一足先へ往
 け 小「夫れじや小頭と先へ往きます夫じや頭お先さへ往きます 大「御苦勞だなあ 小頭「夫
 れじやお先へ。と山口小源治手下を二三人連れ槍を小脇に搦込み熊の皮の胴腹を着し殿
 めしく悠々と玄關へ係つて来る塚原小太郎ウツと勇氣を附けて出て来たらと待つて居る 山
 貴様達大きに御苦勞だ又二三日すると休まして遣るから…… 小「有り難う御座います……
 小頭今度の仕事は大仕事斯んな大仕事は又有る者じや有りませんかと話を仕乍ら玄關へ一足
 履み出す山口小源治の腦天から双手を掛けてエイと討つたに小頭ハツサリ倒れる名人の打
 込む工合に持りは有ません只一打ちに山口小源治を殺して仕舞ひましたから死體の傍に来
 り大劍の束へ手を掛けキヨリと引き抜き軒を漏れる星に打ちかざし二三週勢力を掛けて見
 たが是は切れる是なら確かだと刀を振つて居る所へ小賊めらバタン／＼と遣つて居る音に
 小「オヤ／＼何だらう。と密つと覗くと髻がボウ／＼たる頭まボウ／＼たる色の眞黒の目

の光る奴が是は斬れる是は斬れると遣らかして居るから小賊驚いたの驚か無いのつて 小「
 ヤイ／＼油断するな表に泥棒が居ると逃げ出した塚原小太郎 小「遣らんど。と言い乍ら追
 ひ馳け様に振り掛つて右の肩口から只一打と一人二人を斬り倒す 小「さら頭ら大變な表に
 な泥棒が来た 頭「ヤイ／＼泥棒の所へ泥棒の来る謂はれが有る者か 小「夫れでも其りや恐
 ろしい強い泥棒がと言ふて居る間も無く塚原先生血に染つたる一刀を振り下げ一間へ飛び
 込み来たつたるが敷木村の大盗賊大山六郎を見るや小太郎大音揚げて 塚「我天に成り更つ
 て汝等を誅するに依つて覺悟をしると飛び込んで来る大山六郎太夫是を見て 太「エイと言
 ひ様前に置いたる皿を取りて擲附けたるをヒヨリと體を交はす又打付けるから體を交する
 と八方から抜き連抜き連斬つて来るを右左りに受流がして来る者は斬る逃げる奴は後背か
 ら袈裟掛に斬る大山六郎太夫太刀を取つて飛び出して来るから心得たりと二打三打切り結
 びて大山六郎を太刀を以左の肩口から乳の下まで血煙り立つて六郎太夫倒れるから小分共
 わ 小「夫れ頭が斬られた勝ない。と逃げ出すから追ひ詰め々々々庭の隅池の邊りの當り
 を斬り巻く頭敷を敷へて見ますと丁度十八人を斬り倒しましたから是にて賊共は居らん
 と再び座敷へ上つて参り次の間の唐紙を開けて見ますと福富吉郎太夫を始め萬之助も一家

一族柱に縛られて居ります。塚「ヤレ、氣の毒千萬。と小太郎づくり立ち上つたが福富様子を見て塚原先生を泥棒と間違ひて乃公が所へ又泥棒が這入つたが此一人の泥棒の強い事同類の中間を皆んな殺して仕舞つたが又何をするのだらうと心配ひをして居ります。塚原先生細をブツ、切つて呉れる。塚「扱福富とか乃公は賊ではないぞ常陸浪人の仁科與四郎と申す者が娘が前いが所へ参る様子夫を助けて今晚お前が所へ連れて来て今其所等へ隠れて居れと言ふて隠して置いたから唯方でも連れて来るが宜い。福富吉郎は屋敷内を嫁女くんと探して居りますと物置に隠れて居りましたから座敷へ連れて参ります。福「夫れは然うと嫁を送つて来た者は何うしたらう。塚原聞いて御出たか。塚「夫は道中の木枝へ縛られて居るから早く助けて遣るが宜いと言ふので是から此村の者を集めて提灯を着け大勢で出して遣るすると途中の杉の木に縛られて居りましたが是等の人々は衣類袴等を泥棒に持て行かれたに依りまして皆ふるく震へて居ります。迎ひに来た者は是を見て。△「ヤレ、氣の毒な是も災難で仕方が無いさあ。御座れと言ふので是から大勢の細解きて打連れて福富方へ参る福富方で今夜の始末を所の代官に届け致して仕舞ふ所の風で十八人の賊共は渡して仕舞ふ其所で福富方での一家一族塚原の前へ来り交々禮を云ふ。福「先生此度は

不思議の御縁で貴方様に危難を助られ何共御禮申様は御座いません何うぞ御殺々と御滞留を願ひますと云ふので小太郎も身體は垢に染れて居りますから。小「夫れでは兩三日御厄介と滞留して居りますと村中の噂取り。甲「コレ太郎作福富の家で賊打つ放した野郎は薬氣だ。乙「何んだ野郎成んで此野郎め。すると一日の事福富吉郎は千兩金を出して。福「是は心斗りの御禮で御座います。小「イヤ、私は國へ歸れば金は千でも二千でも有るのだから此様な金は入らんから然し思召だに依つて百兩頂戴仕まじし宜く無く共大小を持た無ければ……。福「宜しい御腰の者は御座いませんが是で宜しくばと出す。小「結構……。と此れから大小身の廻りを調べて敷木村發足致しますが弘治元年三月の九日の事此から塚原小太郎上州を差して御出に相成り丁度信州と上州の追分の掛茶屋に於て兄弟弟子の九目藏人に對面に及ぶ一段……

第 三 席

エ、偕て塚原小太郎勝義が敷木村の福富吉郎の家に於て三好の浪人大山六郎を始め十八人の大賊を討ち捨て衣服身の廻り等を整へ上州箕輪を差して御出達に相成りました。丁度信州と上州の追分迄出て御出遊ばし掛茶屋を見て。小「親爺許せいよ。爺「此は入らしやいませ

ぞモウ御疲れで御座いますよ小太郎先生表面の床机に腰を掛け 小「ナイノ親爺や腹に相成たなわ 爺」左様で御座います此からも道中を遊ばすには一番宜い時候でなんでもまあ来月一と月で御座いますなわ 小「サレヤさまづ三月より四月一つばい此がマア旅行を致す時候だて聴て親爺は土親へお茶を入れて 爺」召し上りますよよに 小「アイ親爺たいふん好い景色だな 爺」左様で御座いますも此處は隨一の景色であります。老人と塚原先生は頻りに話しをしておいでなさる所へ若武士五六人大道狭しと大手を振り我れこそ劍術を使はぬと言はぬ顔にふら下がり悠々と茶見世のかき口へ進み 武「爺や今立ち歸へつた 爺」是れはマア皆なさん大層お早ふお戻りになりました 武「ア、疲れた早速お茶を賣をふかな 爺」へエ畏りました若か武士がマロリノと向ふに居る武士年齢二十一二に相成る武士が床机に腰を掛けて居るのを五六人の武士横目でマロリノ見て居りましたが聴て塚原の傍へ行つて 武「失禮ながら夫れなる若い御武家様武術御修行で御座るかな塚原聞て小」左様に御座います武術修行を致し且つ又名所舊跡を一見致たさうと云ふ…… 武「ハア、左様か失禮だが若い御武家は何に流を御學びで御座る…… 小」神陰流を聊か學びます 武「神陰流夫れはどふも感心なもの我々も神陰流を學ぶが如何で御座る我等が師匠は大先

生なれば我が師匠へ御取り持ち致さう今からみしく勉強爲すつたら天晴れ天下の名士になるだらう物になりますせ…… 小「ドウも難有い幸福で……盲目蛇に驚かす日本無双の早業の大先生塚原小太郎を捕へて物になる物になると若武士が饅舌り込んで居るこの上にも物になり様はない先生は暫く經つと身の丈け五尺四五寸黒の着付けに立て縮小倉の馬乗り袴紺足袋に撚り鼻緒の草靴朱鞘の大小を嚴格に打ち込み近邊輝くばかり大道狭しと大手を振り五六人の若武士が左右を警護に及び天下の往來我々のみだと言はぬ顔にふらさがり茶見世を望むでマツソリノと進んで行く以前の若武士此れを見てばらノと茶見世の門へ立ち出す 士「ヤア、是れはノ各の方にも大分御早ふ……聴て真只中の武士被り物を取りマツ茶見世に這入て来たが床机の前を何げなしに見ると塚原先生はお茶を呑んで其生では御座らぬか。小太郎見ると御自分の兄弟弟子上泉伊勢の守秀綱先生の四天王の一人上州阪本の住人丸眼藏人 小「是れはノ何誰かと思つたら丸目氏かね…… 丸「ドーモ塚原先生遊つた所で御目通を致すものだ先づ一別以來御機謙能う…… 小「貴氏にも恙がなく小太郎も大慶に御座います。丸目藏人弟子に向へ 丸「是れノ其方共豫て申聞して置たる劍

道の達人塚原小太郎勝義先生其方共同座相成らぬぞ。さあ〜大勢の若武士は驚いたの驚かないの。是れが日本無双の早業と呼ばれたる塚原小太郎だと云ふので臆を潰して面目次第もないから大勢の若武士飛び下り大地へ面を押す計り誠にハヤ塚原先生とも心得ぬ我々共御不禮を申し上げ平に御勘辨を願はしう存じます。小太郎御笑ひなすつて小「イヤ〜手前も失禮を致しました。丸」偕て塚原先生手前導場まで御案内を致さう。小「御同道を願いたふ存じます。委細承知を致し是非共尊公にも御目に掛り種々申あげたい事があるから上州阪本の導場へ行つてからの事と致さうと云ふので丸目も悉く悦んで是れより塚原を同道を致し上州阪本の我々が導場へ立戻り偕て小太郎が弘治元年二月七日に出羽の國羽黒山に於て信濃丸入道圓海を始め大勢の者を斬て落し種々艱難を致したる物語致したる上丸目藏人は涙を流し丸「眞にや先生なればこそ斯くばかりの艱難を致し天運強く致して今日對面の出來るは是れ忠義の徳嗚かし尊氏は御悦び遊ばすであらふ。是れより丸目と塚原兩人同道を致し上州箕輪の上泉伊勢守秀綱の導場へ罷越しまして久々で塚原小太郎上泉伊勢守に面會を致し羽黒山の物語を致し御師匠も塚原の手を取り涙を流して禮を御述べ遊ばし色々の人に面會を遊ばし箕輪の導場に滞留つて御出遊ばした。或日丸目藏人は塚原を物陰に呼ん

で丸「偕小太郎先生當年は丸目が尊公に是非共御同道を願わんければならぬ事がありませ塚原聞いて小「ハイどう云ふ大至難……丸「去れば次第に依ると秀綱殿御身に係るべき大事余の義に御座らぬ上州赤城明神の源平旗取りの奉納仕合いが御座います。小「成程……丸「其源平旗取りの仕合に第一人から十人に勝つたる者は白旗をば下し置れ三年間續いて勝つた者には赤城の明神に日本隨一の看板を上げるのが赤城明神の仕合。然るに上州群馬郡間庭村の住人樋口十郎左衛門の子息十藏光義の爲めに二年の横け勝ちとされて今年是りに勝を得られる時は日本隨一の額面を赤城へ上げなければならぬして見ると上州一國に其奴の外に武藝者が無いように衆人に看做される時には尊師の外形に相成る。夫れで塚原先生御同道下し置かれ當年ある赤城の立合に十藏をお敗かし下し置れたい。塚原先生ニヤリ〜と笑つて聞いて居りましたが小「是れはどうも目醒しき十藏働きを致す併し彼れ某に優れば汝及ぶ所あるべきか併しながら後學の爲め塚原同道を致さう。丸目が大いに悦んで丸「先生御同道下されば何よりの結構。至急御伴を致さう。偕て赤城の祭禮の當日を待つて居ります弘治元年十月の十三日赤城山明神大祭禮でありますによつて上州阪本へ戻りました小太郎を同道致して丸目藏人と赤城明神へ出張を致しました諸國の見物人は……源平旗

以りの仕合を見物しやうと云ふので泊り掛けて諸國から皆来て居る就中數多の見物の中より武藝修行の者ども飛び入りに掛るのが此れが又一段の大勢なのに今年はこの位なる豪傑が出るかと云ふので見物意氣揚々として赤城山に登り丸目藏人も十二日に着致し明日を相待つて諸國より致して乗込んで参る武藝者天晴赤城の立合に名譽を残し源平の旗を貫ふと云ふので進んで参ります。先づ十三日の早天に大勢の見物がドン／＼と赤城明神の拜殿の前に近付いて来る東の方には幕を張りまして此中に門弟二百人ばかり従ひ控へて居るのが信州上田の住人青木十左衛門種一西の方に幕を張りまして此内に控へて居るのは上州阪本の住人丸目藏人南の方に幕を張り弟子の百五六十人を従へて居るのは出羽の國の住人諸岡一派齋國廣と云ふ先生北の方に丸に根柢の紋の付いたる幕を張り中に居るのは上州群馬郡間庭村の産樋口十郎兼光の後胤樋口十郎左衛門兼房先生御子息十藏光義三百人の弟子を率いて控へて居る暫くする中に神職は本格の装束を着けまして其所に立出で數多の見物を一段高へ處より見廻わすと丸で人間の頭で悉皆浪を造つたと思ふ計に尺寸の間もなし當年は又御天氣都合の好き故に數多の見物が出たは。臆て神職が神前に向へソツトをあげ振り歸りて大勢の見物を見遣り神職は一段高き處より聲を上げ 神一偕て一同の見物且又武家衆

人の人々に物申さう例年の如く當赤城祭禮に就き源平旗取りの奉納仕合第一人より十人に擧ち勝ちし者には白旗一流を給はり三年間續け勝ちを致したる者には誰れ彼れに容赦なく身分高下を論せず此處に日本隨一の額面を上げる者なり銘々其覺悟で粉骨碎身を致し立合いて然るべくと臆て神職は合圖の拍木をカチリ／＼と打鳴らすと耳元に當つて太鼓の音が聞へる螺を吹き立てる其勇ましひ事實に大した物であります。此時東の方の幕を絞り上げて青木十左衛門種一の人數の中より出ましたるのが身の丈け五尺三四寸色の淺黒い眼中鏡く年齢二十八九になる所の人木劍を持つて夫れへ立ち出て大音を上げたるが 武一斯く申す某は青木十左衛門種一が門弟山口五郎太と云ふ者イデヤ相手を欲しい。と呼ばはつた時に南の方に張つてある所の幕を絞り上げて諸岡一派齋國廣の門弟野島三四郎と云ふ此者は色白に致し年齢は二十三四小造りであります木刀を提げ夫れへ出て 三斯く申す某は諸岡一派齋國廣の門弟野島三四郎と申する者御手軟に願ひます。五郎太聞いて御互様に御手軟に願ひます。エイヤツト双方位へ取りを致し大勢の見物はワア：ワアと聲を擧げ野島三四郎を譽める者もあれば山口五郎太を譽る者もある。双方敗けるなくと見物ワア：ワア：ワア：と騒ぎ渡つて居る中に野島三四郎山口五郎太睨み合せて居たがヤツト云ふ聲が掛り双方

より飛び掛り二三本撃ち合せたと思ふと野島三四郎の爲めに山口五郎太左りの肩先きを強く撃たれ 五「参つた。臆て神職は野島三四郎に團扇を上げる數多の見物手を鳴し野島が勝つた剛らしい者だ野島が勝つたと云ふ又一人出て來たのを野島三四郎是れを賣める二番の續け勝をした。益々見物が愛嬌のある野島三四郎を譽めて居る丸に根笹の紋の付いたる幕を絞り上げ年齢三十五六に相成る身の丈け優れて色の淺黒く布を疊んで後る鉢巻を致し木劍を提げ袴の股立ちを取り上げ夫れへ進み出でましたが 武「エ、斯く申す某は樋口十郎左衛門の門弟村山惣藏と申する者御手軟に願ひたい。村山惣藏夫れへ出ると數多の見物上州では間庭を神の如く尊敬して居る百姓共 百「ヤア村山先生待つて居ました村山先生と大勢の者が聲を上げて居る。ヤツと云ふ位取りをしたが野島三四郎何で敵するものではないタツ一本に村山惣藏に憶れを取て夫れに引下る者も出る者も村山惣藏に三番の續け勝ちをされる村山惣藏鼻をヒクツカして近所を眺め最早村山惣藏に相手になる者があれば誰れ人なりとも相手は嫌らぬ間庭の住人村山惣藏だ相手は嫌わぬから誰れでも出て下されと大音を上げて呼はると數多の見物の中に村山惣藏の高言面憎しと思つたるか見物を押し分け這入つて來たるは身の丈け六尺計り色黒に致して兩眼鏡さ武士紺純子の小寶盛しの裾縁り版

つた野袴、黒龜絞の着物武者草靴を穿き如何にも立派なる武家臆て神職の前に進み斯く申す某は關東八州の探題北條相模守氏政が家來二階堂權四郎と申する者村山先生に一本御手合せが願わしく御座る臆て名乗りを上げて置き村山先生二階堂權四郎相手に相成る 神「御得物は何で御座います。と神官が聞く 權「我等は槍だに依つて槍を拜借したい。向ふに槍が掛けてありますに依つて其中の二間柄の槍を取つてリユウと蒲英のスエキを掛け中段に槍を取り直したるが其勇氣近邊を拂へヤツと云ふ聲を掛ける真中に進んで行きしが何しをう敵すべき筈は御座いません村山惣藏唯一突きに肩を突かれ二階堂權四郎槍を取つて禮をして後を引く復た〜夫らわ二階堂に掛れと大勢が入れ變はり立替り出るが二階堂の爲めに五人迄續け勝ちをされ數多の見物が見て居たが 見物「ヤイどうも實に二階堂は強い者だ小田原の武士にも斯う云ふどうも強い奴が居る小田原でも馬鹿には出來なへ邊辛「士計居ないから實に二階堂は強い、二階堂、二階堂と大勢の見物が騒みを造り譽め込ひで居る所へ見物の中から押し分け押し分け立出で來た一人は色白に致して是れも身の丈け稍六尺の栗柄の七子に花菱の紋の付いたる衣類。是れも裁付袴を穿き嚴然と大小を十字に横たへ神職の前にツカ〜と來つて 武「斯く申某は甲斐の國八花形の武田大僧正信玄が家來

原大隅と申する者二階堂先生に一本御手合せを願わしく存じます。神職是れを聞いて實にどふも當年は頗る榮傑の來る信玄公が家來原大隅天下に隠れもない榮傑だ。此大隅と云ふ方は後に川中島の戦争に越後の謙信の乗つた馬の太股を突き抜きて謙信を馬から落した程の榮傑。大隅の守となりましたがこの時はまた原大隅。彼方に掛つて居る所の長柄を取つてリユウ〜とスオキを掛け 原二階堂先生イヤ御手軟に〜。と聲を掛と暫く戦つて居る中に二階堂持てる槍を原大隅に巻き上げられたるが槍先の上つた所を突たるに腰の邊りを唯一突。二階堂後に下り 一恐れ入りました原氏の御腕前御美事で御座る…… 一難有仕合せ。と互に禮をして片側の床机で腰を掛けて居る。夫れ原に掛れと云ふので又出る入變り立變り大勢の武者者が出で來たが大隅の爲めに以上七人迄突き倒された實に見物大勢が感じてもう三人勝ちさへすれば是れで日本一の額面が上げられるらうと響込んで居る。丸に根柢の杖の付へたる幕を絞り上げてノッコリ出で來たるは樋口の嫡子十藏光義今年二十七歳。身の丈けはスラリと致し色白にして愛嬌溢るゝ計り數多の見物は是れを見るとワヤ〜と胸の聲を上げ間庭の小天狗間庭の小天狗と大勢の者は是れを響めて居る暫時の間は宛ら山の崩るゝ計りなり。原大隅は泰然と見て偕てこと目指す所の十藏が出でたりと。



原大隅と申する者

此山へ皆立合ひに来る連中は皆此樋口十藏を的にしてゐる十藏の出るまで待ち兼ねて居る。氣の短い奴い皆出ては負け出ては負けて仕舞ふ十藏原大隅に禮に及び臆て木刀を拵て青眼に付け大隅は望の敵だどリニウ〜とスエキたる槍を中段に取り暫く位取りをして居たがヤット聲が掛ると十藏光義大隅の槍の中央シタ、カに木刀を上げて撃つ二度目に槍で斬り込むと云ふと十藏殿體を變す原大隅守の肩先きをば撃れしによりヨロ〜とヨロメにて原大隅は參つた。原「ヤア御美事なものだど槍を引いて向の休息臺に掛り二階堂に向い。原「聞しに優る腕前我々如きの及ぶ所でない。と感心をして大隅は二階堂と樋口の腕前を譽めて居る。スワヤ十藏光義が出でたり掛れ〜と大勢が掛つて來たが出る奴も〜丸で小供の如くに撃ち負る。以上原大隅を始りとして九人迄勝れた益々見物は聞放つて賞め込むで居る。神職は八方を見廻して聲を上げ。神「最早間庭の嫡子光義殿當年にて三ヶ年の勝ち越し今一人掛り手あらば出られよ。最早掛り手あらずんば今日の勝負最早是れ迄なりと。高らかに呼ばはりたる所へ西の方の九目藏人の手からヒヨ〜と一人走り出て參る。武「神職に願ひまするが。神「ハア……。武「某は九目藏人の門弟仁科與四郎と申す常陸浪人で御座る間庭の若先生に一本御手合せを願いたい。神職が驚いたね去年自分の師匠九目藏人は

樋口十藏の爲めに美事に負けて居る。然るに師匠の負けたにも構はず立合ふと云ふ此位な量見かなければ武藝は發達をする氣問はなへ神職も必ず下手も上手も總へて止せと云ふ事はないから本人の望みに任せんければならぬより 神「委細承知いたしました。と云ふので仁科與四郎木刀を直し樋口十藏の前に進み 與「手前は常陸浪人仁科與四郎と申す者御手軟かに願います。十藏流し眼に仁科與四郎を見て居たが此國の師匠丸目藏人は去年某の爲めに憶れを取つて然るに今年弟子が師匠の耻辱を注がふとは感心 十「手軟かに抵抗して置て使はそう。聽て十藏殿木劍を取つて一振り振つたるがヤリ／＼取り詰めて見ると上手だ鴨の毛で突いた程の隙もない尋常の所業とは思はれない。流石の樋口十藏光義名人の段に足を掛けて居る人だから先方の腕前が分る上手から下手は能く見へる下から上は必ず見へぬ。去りながら十藏は先生だに依り向ふの腕が分るにより如何なれば此仁科與四郎と云ふ者の腕前は我れ及ぶ所でない恐しい者も出れば出る者と十藏も向ふの腕に恐れて居る數多の見物は始まりはワア／＼と云つて居たが寂として唾を飲んで居たが 見物「オヤ／＼／＼是れは間庭の小天狗の方が景氣が少し悪くなつて來た。向ふの仁科與四郎と云ふ爺じみた名前がどうも勢が宜いせ。相互に位いどりをして居た中に仁科與四郎一喝叫んで樋口を望

みヤアと云ふ聲と共に飛込んで來る。心得たりと十藏殿體を變し木刀を以て受取る奴を十分に受取るに依り仁科與四郎左りの腕を離して右の腕を片手撃ちに伸びる奴を兩の手で押へて兩の手を延ばした限り左りの手を離して右の手を出す間に茲に一尺の伸びが出る。十藏が身體をひねつて十分に受けた奴が其受けた小手をシタ、カに十藏が墜れた。思はず持つてる木刀をがらりと大地に落し「參つた……。數多の驚いた 見物「チャ……。ヤア小天狗が負けて仕舞つた小天狗負けたとワア／＼と聲を上げて居る十藏殿木刀をば左りに提げまして萩の内へ這入つて御出なさる。親人十郎左衛門床机の上に乗つて最前から勝負を見て御出なすつたが十藏が幕の中に這入るを見ると床机から下りて 十郎左「どう致した子息負けたらう其方が彼の仁科與四郎と云ふ者に負けても必らず恨む處はない。實に恐れ入つた早業だ。と頻りに十郎左衛門が賞めて居る。十藏には分らないから 十「彼れは何かな御父上仁科與四郎と云ふは彼れは何處の弟子だな丸目の弟子では御座るまい 十郎左「さればさ彼れは丸目藏人如きの及ぶ所でない常陸浪人仁科與四郎と云ふのは眞の偽り余が眼で見た所はまず上泉伊勢守秀綱先生の御弟子塚原小太郎勝義先生より他に先づあるまい。十藏が聞いて彼が塚原先生……。夫れぢやア無理はない。所が此十藏先生は右の腕が何となく

斯うぢうも麻痺れる其時は氣が乗つて居るから何共思召さないが勝負が終りましたして間庭村に歸つて居り、したか撃れたが拍子と云ふ者は妙なもので骨を強く撃たれたから半年計り十藏殿は右の手が思ふやうに往かぬから至つて十藏殿が親人の後を嗣いだ時に十郎左衛門に御話なすつて他流仕合と云ふ者はするものでない世の中の人とはどんな名人に出合て撃ち所が悪ければ命を取らるゝとも限らんに依り他流仕合いをするものでないと夫れから間庭に於ては決して他流仕合をしないのが法になり是れは間庭の天狗導場と云ふて餘り立合いの如き者がなかつたのが十藏殿から他流仕合いを封じて仕舞いました。夫れは儲て置き仁科與四郎が美事だにより見物が又感心して居る所へ大勢の見物をば押し分け、這入て來た一人の武士年の頃二十八九に致して色の淺黒い丈けのスタリとした如何にも人品の能い人でありませす。武エ、神職に願ひますが斯く申する某は東海道大津の驛に導場を開いて居る近江典膳と申するが山本無邊流の槍術指南をします者仁科先生に一本御手合せを願ひます。神職が見たが出る奴もくもどうも顔は若いが爺じみた名前。臆て帳面に止めまして二間柄仁科與四郎。此度出たのは近江典膳。恐しい爺じみた名前。臆て帳面に止めまして二間柄の槍を取つて近江典膳はリユウ、とスエキをかけ片脇に立掛けて置て臆て仕合に及び夫

れへすつと進み出で、近仁科先生斯く申す某は近江典膳で御座る東海道大津の驛に導場を開き山本無邊流を聊か指南を致す。御手帳に願ひます。與四郎丁寧に挨拶を致しエイヤツと云ふ聲諸共に木劍を青眼に取り近江典膳下段に鎗を取つてシリ、くと取り詰めて來たるが仁科與四郎ヒツマリと青眼に木劍と付けて彼の近江典膳の鎗先を見て居た。鎗と劍術の立合は鎗先を見ずとも相手のコナシを見て居ると云ふ法です少しの際もないに依つて暫く塚原先生敵の様子を見て居たが心の中で思へらく儲てこそ今鎗を取つて日本無双の名人と知られたのは西國に風風ありと世人が皆稱美なす龜井新十郎之則と云ふ名譽の者ありと聞いたが次第に依らば西國の風風龜井新十郎之則ではないかなと塚原が心中に心付いた尤もなるかな此近江典膳と云ふ若は假の名に致して本名は西國で風風と云われたる鎗の大名人龜井新十郎之則先生。毎年此赤城山の祭禮に樋口十藏の働きを感心なし且又塚原小太郎が此赤城の立合へ來るたるう塚原が來たらば一本立合ふと東國で麒麟大天狗と稱美されて居る塚原小太郎先生に出合いたい出合いたいと新十郎が當年で二年來て居る所が當年はもう塚原が出る出ないに抱わらず問庭の子息に日本國隨一の名を上げられては武術者の耻辱だと思ふから塚原の出る出ないに抱わらず十藏を負さふと新十郎先生來て數多の見物の

中で見て居る十藏が出て大勢を負した御自分が強いと思ふ中に仁科與四郎と名乗つて出て
 唯一本に十藏を撃つたに依り偕てこそ常陸浪人仁科與四郎と云ふは偽名ならん是れを塚原
 先生ならんと見たる故に新十郎が夫れへ出て来て龜井新十郎と名乗ふと思つたが向ふが塚
 原小太郎で名乗つて来れば御自分も龜井新十郎で出るが向ふが仁科與四郎と云ふ偽名だに
 據り御自分も近江典膳と偽名を名のつて出た双方共に名前は妙だが腕前は天下に麒麟鳳凰
 と云われたる者が相互いにヨリ／＼と詰め入つて居つたが如何なる破れを見たるか近
 江典膳仁科與四郎の腰の邊へ叫んで斬り出して来る鎗先きは穴があくかと思ふ計り。夫れ
 仁科が突かれたと思ふ内にヒラリ……と身を左に轉する其早き事飛鳥の如くであります近
 江典膳飛下つて斬り込んだ其早い事は電の如く二度目に胸板を望んだ。近江典膳の斬り出
 して来る所をヒラリと捲き溜りながら仁科與四郎木劍を直しヤツと云ふて撃つたる時鎗先
 きも三尺計りヒツチリ斬り落した直に飛込んで近江典膳の頭部を望で聲を上げて打込んで
 来る受る間もあればこそ頭は微塵に砕けたと見物はヒヤ／＼とする中に近江典膳がイエツ
 と一聲叫んだかと思ふと其身体が何處へ行つたか更に見へない數多の見物大いに驚き。見
 タ……今迄居つた近江典膳の身体が何處かへなくなつて仕舞つた彼の仁科與四郎と云ふ

奴が馬鹿に強いから魔がさして天狗が来た。塚原先生近邊を見廻し近江典膳の居なくなつ
 たのをば事もしないで落たる鎗の蒲英を取上げる。如何に勇氣が乗るとは云いながら木
 刀で鎗の先き三尺計りハツバと斬つて仕舞つた。神主も驚いた。何んで仁科與四郎と云ふ
 奴は強い奴だらうと思つて居る所へ九目藏人が出で来たから九目に尋ねると藏人が笑つて
 藏。されば仁科與四郎とは偽名で本名塚原小太郎勝義先生。神主がどうも道理で強い奴
 だ東國で麒麟と呼ばれた日本無双の早業の先生。見物に右の次第を云つて聞かせた。數多
 の見物驚いた。「何んだ天下に隠れない塚原先生だ道理で間庭の小天狗が敵わぬ筈だ向
 ふが麒麟大天狗と合併した上に小天狗が逆も敵わない尤も千万だ。と塚原の廻りを取り巻
 いて来る。夫れは偕て措て丸目藏人が近江典膳の身体が見へなくなつたのは不思議だ神主
 も驚いた全く魔がさしたと思ひ偕ても赤城明神の祭禮に譽を残して小太郎は源平の旗二流
 を神職から貰ひまして上州の箕輪表てに立ち歸つて上泉伊勢守に此の話に及び龜井新十郎
 の話をする。師匠が聞き。師「嗚呼残念であつたらう龜井に彼の術があつてはとてどもどうも
 及ばぬ。小太郎がどう云ふ次第だと聞くと。師「龜井新十郎の天狗生飛切と云ふ術がある。一
 是れがあつては逆も敵わぬ。と云ふ是から塚原先生伊勢守に暇を貰い播州花隈に乗込んで

第 四 席

戸澤山城守に從つて此天狗生飛切の術を學ぶと云ふ一件は次席に譲ります

前回辨じ上げました上州赤城山の奉納試合を済し笑輪の上泉秀綱の導場へ立戻り立合の次第をば尊師伊勢守へ委細を御話し致したる時に伊勢守笑を含んで御出で遊ばした段々話しが進んで龜井新十郎の話しを致したる時に伊勢守秀綱先生御出で遊ばしたが秀一應ぞ小太郎残念であつたらう尋常ならば其方が勝利を得べき所龜井に彼の術があつては迎も其方が勝つ處が無い此後亦候出逢ふと雖も危く相成れば彼の術を行ふて逃れる處を残念であらう。と仰せられました小太郎承つて 小「龜井新十郎に如何なる術が御座い升や。と伊勢守に尋ねると秀綱 秀「去れば龜井新十郎には天狗飛切と云ふ術がある凡と正面へ飛ぶ事十間後ろに飛ぶこと十間亦上に飛ぶこと十間身體掛引自由自在の術を心得て居る。塚原小太郎是れを聞てハヤ〜と涙を流し如何にも残念なり。と歎息を致しました師匠として弟子の可愛く無い者は無い伊勢守秀綱小太郎に御向ひ遊ばして 秀「扱て小太郎其方は此天狗飛切の術を學ばうと思へば今術に長じ播州花隈に當時住ひを爲る戸澤山城守の外に無し察する處龜井新十郎は戸澤山城守に學んで熟練致したるに相違無い其方に暇を得させるに由

り播州花隈表に罷越し戸澤山城守に面會に及び修業致して龜井新十郎に出逢ひ打負すやうに至急出立に及べ。と云ふ有難い御言葉に塚原小太郎勝義大いに悦び 小「誠に以て尊師の御情け難有くサラム至急出立に及びませう。と是にて旅の仕度を整へ御暇を頂戴致し大勢の朋輩にも別れを告げ是より上州群馬郡笑輪を出立致し偕て東海道へ出まして播州花隈へ登つて御出で被爲たが泊を重ね日に歩みドン〜大津の驛迄掛つて御出で被爲た時に立派やかなる導場があります思はつ笠の内から看板を見ると山本無邊流槍術指南所と云ふして下に近江典膳としてある塚原心中に 小「扱ては龜井先生爰に御導場を開いて御出でなされる去らば立寄り赤城山の無禮を御詫致さう。と門を這入り玄關へ掛つて 小「頼み申す物まう……。ド〜と聽て十七八の若侍夫れへ出て参り 侍「何れから…… 小「斯申す拙者は常陸浪人仁科與四郎と申する者近江典膳先生に御目通り願ひ一本御手合せを願度く罷り出ました先生に宜しく御取次を願はしふ御座います 侍「暫く御扣へ下さり。聽て若侍與へ通入り 侍「先生に申上げ升 典「何んだ 侍「唯今年齡二十二三に相成る色の淺黒い侍が参り先生に一本御手合せを願ひたいと斯様申して参りました此方へ通しませうか 典「待て……何うも兎角世の中には五月蠅武者修業があつて往かぬ一本立合に及び即座に打負けて甚だ

恐れ入り升が願くば一宿を願ひたいとか草鞋錢を頂きたいとか申し甚だしき奴は弟子に爲て呉れ杯と申す誠に面倒だ立合ぬ方が好い師匠は病氣だと申して二百文包んで歸すが好い侍「畏まりました。願て例の武者修業に遣らんと若侍二百文を紙に包んでお盆の上に乗せて玄關に持て参り侍扱て御修業者折角お出でに成りましたが相憎に師匠風邪でございまして立合を致すことが成兼ねます是れは甚だ些少では御座いまするがホンの草鞋錢に御持歸りを願ひます是を聞て塚原小太郎憤りましたな何爲る常陸國塚原の城主食録五万石塚原土佐守の次男小太郎勝義二百文計りの端な錢を貰いたい次第は無いとブツ／＼と怒つたがマ、短氣は損氣と思ひましたから小折角の御志しでありますが拙者は武術修業の者二百文や三百文の草鞋錢を頂きに罷越た次第では御座らん先生に御手合せを願へば夫れで好いので不禮なことを爲つしやるな。若侍塚原の見事に驚いて侍暫く御待下さい。泡喰て奥へ飛込んで来て侍先生大變です斯う／＼申しまして中々二百文請取りません典「フ、ン爲て見ると誠の修業だ然んならズツと此處へ通せ一ツ廻り物に致して遣らう侍夫れが宜しうございます。と亦出て来て侍「サ御修業者先生が御立合に成るそうだに山て此方へ御通りなさい小「夫れは辱け無い。と草鞋を脱り笠を片脇に置き案内に連れて導場へ

廻ると弟子が左右に大勢廻んで居る暫くあつて襖を左右に明けると櫛の上に着座を致して典勝が典「能く御尋ね被下た手前が當導場の長近江典勝でござる。云はれて小太郎顔を見ると全で他人御自分の御了見では差詰近江典勝と云ふ人は龜井新十郎之則であらうと樂みに致して態々導場へ通つたのだが顔を揚げて見ると這は如何に似ても似付かぬ赤の他人其年齢四十二三色黒く髪は撫下げに致して中々人品の好い男小「是は失策だ新十郎で無ければ遇ても益無きことならば立合は爲たく無いと思ひ小太郎が小「其元が近江典勝先生で御座るか勝「如何にも我等が典勝小「ハテナ……勝「何がハテナ……た何故に人の顔を見て不禮な言を云はつしやる。面倒臭いから出て行うと思ひ小「是れは甚だ御邪魔を致した何れ亦推参致さう。と立上るから典勝が勝「コソ若侍待ちなさい人の導場へ来て立合ふと云ふて我々に面會を致し訝限な顔を爲て立合ひも爲す歸つて行くとは無禮であらう立合に参つたのだから速かに立合ひなさい小「エ、飛んだ者に引掛つた。と思ひながらも仕方が無いから小「然らば御手合せを仕りませう。典勝ニツコリ笑つて典「ア、左様か然らば仕度召されヨ。と双方充分に仕度に及んで典勝は導場に掛けたる承塵の槍を挿取り其處へ立出でまして典「サア来さつしやい小「木劍を借用致したい竹刀でも苦しく無いから……

吐て居る是れは塚原小太郎が泡を喰つて馳出す時管の一文字の笠の應を拂ふ音がバツ／＼云つたものだらう天狗の羽の音と間違やアがつた 甲「先生夫れは好いが貴郎の頭の頂上が恐ろしく膨れ上りましたせ 典「然うだらう十二三本迄は繫れたのは確かに覺へて居るが夫れから先はサツパリ己れは知らない何十本打られたのだらう驚いた事もあるものだと話して居る處へ玄關の方で 男「頼もう／＼ 侍「ドーロ。聽て若侍 玄關へ出て見ると管一文字の笠を提げ 新「大きに取次御苦勞典勝在宅致して居るか唯今龜井新十郎立戻つたと申して呉れ 侍「是れは／＼大先生好う御戻りでございませした當家の先生も大先生の御咄さ斗り申して今日は御歸りがあるか明日は御戻りがあるかと申して御出で遊ばした無御悦びで御座いませう。と取次が奥へ行き 侍「先生龜井大先生が歸つて御出で被爲た。と聞て近江典勝驚いたの驚かないのでは無い 典「ア、悪い處へ龜井が歸つて来た……と云つて逢ない譯にも行かない。と極りが悪いが玄關へ出て来て 典「是れは／＼何うも先生能く御戻り遊ばしたサア御上り遊ばすやうに 新「上つても好いかい 典「好い處ではございませんサ何卒……是から奥へ通り久し振で逢た挨拶も済み 新「扱て是れから西國を指て修業に參らうと心得る 典「夫れは宜しうござい升が大先生當年は赤城へ入つしやいましたか 新「其奴がさ當

年赤城へも參つた 典「當年は塚原が出ましたか 新「去れば當年は塚原に出逢ふ出逢ざるは扱て置て間處の伴十藏に日本一の額面を上げられては武藝者の耻辱と心得樋口十藏を負さうと心得て赤城へ參つた處が樋口十藏光義相變らず強い者だ然るに九目藏人の手から常陸浪人仁科與四郎と名乗て出た若侍 が美事に樋口十藏を打込んだなさてこそ仁科與四郎とは偽名ならん其實塚原小太郎勝義で有らうと拙者も心得たに由り三ヶ年目にて我大願成就の術を以て夫へ立出で借て拙者も龜井新十郎と名乗て向かをふとは心得たが先方が塚原小太郎と名乗て出れば拙者も龜井で立合ひを致す併し先方が仁科與四郎と云ふ名前であるから吾濟も龜井では遅れを取つた時に耻辱だと思つたに由り不圖思ひ出した其方の名前た故に東海道大津に尋場を開いて居る近江典勝と早速に名前を改めて立合を致したが實にや聞しに勝る早業だ初手の槍は好かつたが二度目の槍は穂先を三尺斗り木刀で叩き折られお面と聲を掛けて飛込まれた時は此新十郎腦天が微塵に成るかと思ふ斗り併し師匠戸澤山城守に習ひ置いたる天狗飛切の術を以て免れたがな實に後世恐るべき天下の大名人だ。と云ふ話しを聞て近江典勝驚いたの驚かないのと云つて 典「夫れは何うも先生情け無いことを被爲ましたな 新「奈是…… 典「何うも私の名前を云つて下さらなかつたつて好いじやア御

座いませんか貫郎が私の名を名乗たもんだから其小太郎と云ふ者が來ました 新「エ、……來た……何う爲て來たらう……お前何んと云つた 囁「手前の導場へ尋ねて参り私に對面致したいと申し升から二百文の錢を持たし面倒臭い追ひ歸さうと思ふと其だ怒りましたから全くの武者者に違ひ無いと斯う存じましたから導場へ廻し升と拙者の顔を見て怪訝な顔を爲て居りまして何れ亦參つて立合ふと斯う云ふ挨拶で拙者も如何にも残念だと思ふに由り是非とも立合つしやいと迫つて立合ひました但其早いこと何うもソノ……私の頭をボカく殴りまして夫切り何處へか去つて仕升ひましたが夫れでは仁科與四郎と云ふのは偽名で本名塚原小太郎勝義と云ふ名人なんだらうと思ひます。新十郎聞て居たが 新「全く夫に相違あるまい塚原なら其方なぞの遠く及ぶ處で無い第一典膳其方の頭は滅法高く成て居るが何う爲て彫れ出したんだ拙者は十八歳の時に風を引て狭箱と云ふ風を引たが其時に兩方の咽喉が膨出したがな貴様のは頭のツツペンが彫れ出したが……何んと云ふ風なんだ 典「へエ 新「否、何んと云ふ風だヨ 典「大先生風を引たんで御座いませんで 新「何う致した 典「ソノ何んでケス塚原小太郎に續け打にボカく殴られたので如斯に彫れ上りましたんで 新「ハ……左様か……イヤ私は直ぐ出立を爲るから 新「未だお宜しいではありません

か明日に被爲ては如何でケス 新「イヤ然ふで無い塚原氏に面會し赤城の不禮を御詫を致さんければ成らんに由り暇を告げよう塚原氏は何方へ参つた 典「左様で……遂私はソノ何んなんで……塚原氏は何方へ御出で被爲た。弟子が 甲「大分御急ぎの御容子で京都の方へ御出で被爲ました 新「ア、左様か然らば典膳何れ亦尋ねて参るに由り機嫌克くさつしやれ。と急て草鞋を穿き暇を告げて戸口へ出で 新「定めて塚原は京都へ見物に参つたに相違あるまい京都中を尋ねれば面會は出来るだらう。と勇み立て新十郎京都へ乗り込んで三條通りに宿を取り塚原の在所を尋ねて居たが更に分りません。分らないのも道理で塚原小太郎は京都へは這入らず大津から直ぐに宇治川から伏見へ出で大阪を目差して出たに由り京都へは立寄らないに由て龜井新十郎には出逢ない、後に塚原小太郎は父の讐を討ち其名をト傳と改めたる時に太閤殿下の御邸内に於て龜井新十郎之則に面會を致す其時新十郎之則は太閤殿下より大和國隱取にて一万石を頂戴いたし鎗で三位を頂き龜井武藏守之則と名乗た願る先生。此時出逢ざるは双方本意無き事で御座いませたらうが止を得ざる場合。偕て此方は塚原先生大阪へ出まして河口へ宿を取り播州室の津へ一番船で渡らうと云ふので宿の主にも委細を頼んで御置き遊ばし然に斯ふ爲る内に東が白む船頭が大聲を揚げて室の津船

が出ますヨ……室の津船が出ますヨ。と大呼て居る旅泊屋の女が「サア〜皆さん早く御仕度を被爲ましヨ二番になるとズツと遅く成り升から早く御飯を召上れ……」と炎氣返つて居る味噌汁に録に蒸れない御飯を持って来て御盆を持って給仕を爲て呉れる。女「サア早く喰べて御出でなさいヨ遅く成ると二番船になる。そうなるヨ日が暮れますヨ早く御出でなさい……早く御喰べなさいヨ。と口續に女は饒舌て居る表では船頭が「室の津舟が出ますヨ……」と云ふ是れを聞て御飯を喰て居る猫客の連中杯は容易に物が喰へぬ。甲「マア〜待て呉れ何うも表では大呼る傍ではセツ、カれる喰ふことも何も出来ヤア爲ない氣の短かい客人は」乙「エ、面倒臭い喰なくつても構わない。女「お腹が減りますヨ」乙「減たつてお前の腹が減るんじやアあるめへし好いじやア無いか。杯と焦慮て一杯掻込んで宿屋を飛出シヨ〜」に船に乗て仕舞うサア出るかと思ふと待てども〜中々に出ない。甲「何う爲たんだい船頭さん出るのが出ないのか」船「未だ中出ませんヨ」乙「何んだ……出ない何時出るんだ」船「いつか一度は出ます」乙「筒棒奴人を白痴に爲て居やアがる然んなら惣然飯を喰て来ても好いんだ録々喰わぬから腹が減つて来あ……」船「船の中では辨當を賣りに来る餡餡ころ餅様様の物を賣りに来る腹が減るから買つて喰ふ幾ら喰つても何しても腹が満腹な

ればこそイヤ高いの-highくないの……旅籠屋に慣れない者は飯を餘計喰はない中には慣れて居る連中は宵の中に土瓶に水を一杯貰つて之れを床の間の隅へ忍ばして置き緩くり顔を洗つて御膳に向い。女「サア早く召上つて御出なさいヨ」客「ハイ……臆て汁の熱いのを御椀へ八分目計り貰い録に蒸れない飯へ床の間の隅に忍ばして置いた土瓶を取り出し其水を御飯の上へサアツと振ッ掛け夫れでザグ〜と喰べる蒸れない飯へ水を掛けると丁度喰べ心が宜いから土瓶の水のあり丈け先づ八九杯も喰べて仕舞ふお負けに土瓶の水が無くなる時分には御汁が丁度冷める其御汁で五六杯も喰べる丁度喰はない者と喰ふ者には旅籠屋の方では二天作損益なし塚原先生始めて斯様なことに出合つたんだから御自分も乗り遅れては成らぬと慌てふためき御飯も録に召上らずに船に乗つて仕舞い船が出るかと思ふと更に出ない併し工面の宜い方に依り鳥目の要ることは少しも驚きはしない借て程もなく船は河口を隔なれ播州室の津を望んで走り出す海上は静穏なること盛を敷いたる如く乗合は彼れ是れ四五十人國々の人が乗つて居ります種々様々の話を致し。甲「結構な静でげすな斯う云ふ時に私共は船は嫌いでありませすが斯う云ふのたていと話しもして往けるし物も喰ふがどうも高波の立つて来た日には堪らないのでげすな失禮ながら貴公は何んでげすな何方等の

御方でげす 乙「私は國は甲州で…… 甲「甲州は宜ふがすな甲州杯は葡萄酒の名物で又柿の名物でげすな結構でげす 乙「何に其様な物は名物じやア御座いませぬ吾等が國の殿様なんぞは日本に隨一の名將と呼ばれ日本の高名たらうと云はれた武田大僧で信玄公と云ふ御方が御出なさる先づ此御大將なんぞは日本一の御大將たらうと思ふのだ川中島の戰爭に越後の謙信坊主は吾等等の國の殿様に何うしても敵はないに依つて吾等々が國の殿様は日本一の名將だと甲州の人物頻りに我那の殿様を賞め込んで居る向ふに聞いて居た越後の人が目を丸くして其所へ進みいで 旅「若し〜最前から黙つて聞いて居れば何んだと甲州の武田信玄は日本一の名將だ巫山戯た事を言ふな越後の謙信坊主が驚いたとは何んだ己れは越後の國の蒲原郡の者だが我が國の殿様は義の爲めか天子の爲めか百姓の爲めでなければ戰爭は爲ないと云ふ日本無双の名將と云ふのは謙信公様だ強いと云ふことに至れば我が國の殿様より外にはあるめへ越後の者の義の強い証據は今以て頼みに來れば何處でも遠慮なく米搗に行つてやるぞ巫山戯たことを言ふを甲州の者之を聞いて甚だ忿り 甲「生意氣なことを言ふ奴だサア信玄公を捕へて弱いとは何んだ信玄が弱いか謙信が弱いか一番來い。と 乙「何を言やアがるんだと聽ての事に兩方から拳骨を固めて飛び出して二つ三つ越後の人と甲州の人

と聚ち合つた仕舞ひには無中に成つて櫻み合が始まる組んづ統れつ遣つて居る乗合つて居る大勢が止めて遣らうとは思はないで信玄負るな謙信負けるなど乗合の者が咬けて居る二人ながら一生懸命に組み合つて居る中に轉じて來てマツタリと甲州の者の足が延ると最前から片側にて二人の武士が一升も這入らうと云ふ瓢單から水呑へ注では飲み竹の皮の煮しめを列べ甘さうにグビ〜と飲んで居る頻りに話して居た其武士の瓢單を向ふへ蹴たに依り瓢單は微塵に碎ける中の酒は板子が皆飲んで仕舞い二人の武士は烈火の如く憤り越後の者と甲州の者の襟首をムンツと捕へて 兩武「是れやい最前から黙つて居れば宜い氣に成り我が國の領主〜を賞るは宜い然るに途方にも足らざる町人の分際と致し嘘偽を好み我等兩人が船中の命綱と云ふ此の酒を何故斯様なことに致した不埒な奴だ勘辨相成らん夫れへ直れ。兩人共に突やり於て大刀の柄に手を掛る信玄謙信涙を出したが、弱い信玄と謙信があるものだ 兩人「何うぞ御勘辨を願ひます何うぞ御勘辨を願ひます。と青く成つて信玄謙信誤つて居る大勢の見物が見て何うだい謝罪つてやらうではないか「何うして〜食物の遺根は恐ろしいからな此方等が謝罪に出ると余計な事を言ふたと御鉢が廻つては堪まらぬいやア……寄らず觸らず隅この方へ往つて居る方が一番宜いせ不實な奴つ計り揃つて居

る謝罪つて遣うと云ふ者が無い其中に一人見付けたから「彼處に居る彼の山伏を頼まうじやアないかそうよ」山伏が宜い。と山伏の側へ遣つて来て、「山伏さんお前一つ謝罪つて遣つて御呉れな」山「エ、此方等じやア要けないよ」御前なら屹度聞くから山伏聞いて「愚僧で御勘辨に成るか」成るとも……確かに成るよ御前なら成るから 山「左様か然らば愚僧が頼んで見やうと臆て山伏が夫へ進み 山「偕て御武家様何んども此兩人が至らざる所より斯様なる過失を致し御兩所へ何んども申譯が御座らぬ愚僧も出過ぎたるやうでありますが大勢の乗合に頼まれ止を得ず是へ罷り出でましたどうか御勘辨を願ひたいものだ。兩人の武士聞いて「兩御捨て置下さる様……御坊の御扱いたに依り許して遣はしたいが勘辨相成らぬから…… 山「御尤もにはありませんが愚僧も唯は嘆願は申しませぬ善いか悪いか存じませぬが伊丹を別れまする時には權現へ奉納を致して呉れと貰ひましたる酒唯今は是れで改めて各々方に獻じませうに依り夫れで何うか御勘辨に預り度う御座います。と山伏振り返つて弟子を呼び 山「是れ……其筈の中にある小さい方の瓢單を是れへ持つて參れ……臆て弟子が一升二三合も這入うと云ふ瓢單を持つて来て 弟「是れで御座いますか 山「夫れだくと水香を出して彼の山伏は一二杯呑んで居たか 山「オ、く思の外の美酒である是を獻じ

ませう 兩「夫れは誠にどうも御坊に對して兩人が何か難題を言ひ此酒を貰ひしに當る夫では御氣の毒 山「どう致しまして必ず愚僧が御詫を致したのでは御座らぬ御兩所が頭巾鉢掛に對し御許し下し置かれたのであるから決して構はぬ 山「是々もう一つ瓢單を持つて來るが宜いと又弟子に言ひ付けて大きな瓢單を出して水香にて是れも二三杯呑み 山「サアく乗合の衆や先づ兩人が御手討ちとて船玉明神を汚すと云ふのが目出度く濟んだに依り御前さん方も一杯處所で遣らつしやる様に。大勢の乗合が聞いて酒好きの連中は「ヤア堪らな……一杯づつ呑もうじやないか」オ、イ山伏の御弟子此處へ持つて來な。と下司張野郎は先へ手を出し「先づ最初一杯戴きます。臆て件の水香が彼方へ行き此方へ往き下戸も氣に連れて一杯呑む塚原先生は隅の所に腕を組んで御出なさる所へ山伏の弟子が 弟「御武家師匠の寸志一杯召上らぬか。塚原先生聞いて誠に思召は有難いが手前は船が嫌いのでイト、船に酔つて居ります故折角の御志は辱ふ御座いますか御断り申す山伏は是れを聞いて是れ……嫌がる御武家には差上げては成らぬぞと臆て此方等へ歸つて誠に目出度いと大勢が呑むさうかうするうちに二人の武家が黄色い水を吐いてバツリく倒れて仕舞ふ乗合の者もバツリく其處へ倒れる腕を組んで居たる彼の山伏 山「頭もう宜い 頭「さう

よな大願成就したと突つ立ち上つた件の山伏螺貝を採り直し沖を遙かに吹き鳴らすと遙か沖に響いたるか六挺の早艦を仕立て二艘の船がエツシヤツシ〜と直ちに乗り込むで来る般中に於て塚原小太郎勝義海賊を退する一件明日まで御預り……

第五席

エ、昨日辨じました船中の者共に阿片劑の麻疹この癩れ薬の入りたる酒を盡く飲まし前後生体なく乗命の者共打ち倒れ時刻は宜しと法螺貝を船に立つて美事に吹く六挺の早艦を掛け立て室の津船を取捲き細梯子を仕掛けて皆々打ち登り 小賊「頭首尾は…… 頭「上首尾は小賊共大に悦び 小賊「片端から素裸体にして仕舞へ 頭「待て〜町人共は前後も知らず併し揚板の下に年若かな武士此者一人麻疹等の癩れ薬を飲まぬ油断をするな。小賊は聞いて合點だ々々々。噫て塚原の左右からつか〜と進み 小賊「ヤイ小武士已等は西國に隠れのない海賊の大張本人百間太郎の手下共だ此節は海上が八釜敷いので頭が仕組んだ大仕事汝一人には阿片劑の麻疹等の癩れ薬に中らねへ覺悟を爲ると左右から兩手を取つて引立て身體こそ小さいが力量普通に通へたる塚原小太郎 小「何を爲る斯くこそあらんと存せし故酒は一滿も飲まず汝等如きヒヨロ〜盗賊は片端から息の根を止めて呉れる覺悟を爲よ

と左右より腕を取つて引立やうと云ふ小賊共を右手左手にヤツと一腰々を掛けズンデンド〜と抛げ出したり周圍に居る小賊共 小賊「エヲ思ひの外に手強い武士疊んで仕舞へと扱きつれ〜劔の電斬り込み来る刃の光 心得たりと塚原小太郎傍に置いたる平安城の一劔二尺二寸の柄に手を掛け抜く手も見せず一人の小賊を腰車二度目に掛るを腦頭より唐竹割三番目に掛るを袈裟掛け其他當る所に嫌いなくヤツク〜と斬り倒す手並に忍れて小賊共 小賊「ヤア敵はぬ〜思ひの外に羽音の荒い武士だ命有つての物種子だと残る奴等はハッ〜チリ〜と端艇に飛で乗り逃げて行く。最前より矢を床机に腰打掛け始終を見て居た海賊の大長本百間太郎腰に着いたる短銃を取るより早く塚原目掛けて砲聲高く切つて放つ小太郎砲聲と共に揚板の下にアツト叫んで空仰様にドット計りに打ち倒れる。百間太郎打笑み 百「危儼〜年は若いと思ひの外に手強い武士だと鉄砲をがらり抛げ出し腰に帯びたる大刀をギリと引抜き塚原の打倒れて居る傍へツカ〜と立寄り 頭「ヤイ已れが見分の體きを撃つ覺悟をしると馬乗りに跨り止めを撃たむと爲したる時小太郎ヤツト言ふ聲諸共に飛び起き様に横に拂へば百間太郎が身の胸より血煙立つて二ツと成りズンデンドウト倒れたり再び飛起て塚原小太郎近邊を見廻しから〜と打ち笑ひ汝等如きのヒヨロ〜鉄砲

塚原小太郎の身体に中る可きや身に彈丸を喰はぬ用心に謀計にて倒れたるも知らず淺間敷も小賊共。血刀を提げて小太郎は舳に上がり海上遙に延び上れば残りし好聲後をも見ず波間を打ち切り〜逃げて行く甲斐なき小賊共心ならずも能き功徳を爲たりと近邊を見廻したが船頭は見ゆす。塚「是れ船頭〜よと呼べと叫べ答なし又も船頭よと大音に呼はる所へ陰に答へるは舳の方だと思召し小太郎先生劍を提げて舳へ来て見ると兩人の船頭は楫に取付り震はて居る。塚「是れ〜安心致せ最早海賊共は予が残らず斬倒して仕舞つたに依り此方へ上れ〜。船頭兩人は震へながら。兩人「旦那でございませしたか御陰様で命は無事でございませ乗合の者は…。塚「乗合の者は一人も怪我は無い。兩人「夫は〜何うも有難う存じます。兩人の船頭楫を離れて船に上り見れば斯は如何に近邊八方死骸だらけ。塚「是れ〜船頭是れは室の津へ着致して届けて出れば仔細はないに依り安心致せ。兩人「有難う存じます。オヤ〜旦那様は左の肩を怪我を爲すつた今ドンと云ふ音がしましたか鉄砲でございませか。塚「左れば是れなる山伏に身装を變へたる奴は西國に隠れなき百間太郎と云ふ海賊の大張本人已れに鉄砲を撃つたが幸に肩を聊かかすられた。兩人「へ…マア御危険い所でございませしたか併しまゐ旦那様は御若いに似合はす恐ろしい御強き者でございませ

な。塚「ナニ左のみ吾輩が強いと云ふのではない大勢を頼みに致す小賊共故に皆な天の罰を受け斯様な死を遂げるのだサア〜船は其方共でなければ自由にならぬ。一働さ致して呉れと仰しやる血を拭ふて鞘に納め平然として小太郎は元の所に座つて居るソウコウする中に船は播州室の津の港を指して這入つて来る皆々一同室の津へ着く頃になると心我れに返つたるか大勢の乗合目を醒し近邊キヨロ〜見廻すに彼方にも死骸此方にも死骸。旅「イヤ是れは何うしたんだマア大變恐ろしい死骸が斯んなにある不思議なことじゃねへか。と騒ぎ立るを船頭が。船頭「ナイ〜御乗合の衆や御前方は幸福だせ彼の山伏はな西國に隠れなき百間太郎と云ふ大盜賊だ御前方は毒酒を呑されて殺されやうと云ふのを此御武士さんが助けて下さつた其換りに此御武士は左の肩に鉄砲の傷を少し御受けなすつたが御前さん方も命換りの御恩人御恩返しを爲なくてはなるまいせ。大勢の乗合の面々は膽を潰して小太郎の前へ這ひ出し。旅「誠に何うも旦那様有難う存じます御蔭様で着類も盗られず旅金も盗られず併し私共の爲に貴方が怪我を爲すつたが室の津へ上れば貴方の御傷は良い御醫師様を取つて私共一同で御世話を申しませうに依りそれで何うぞまゐ御勘辨を願ひます。塚原小太郎御笑なすつて。塚「イヤ〜其方達の世話にならうと云ふ拙者でもない醫師に掛り藥

を付ける程の手當は拙者所持致して居るイヤ其方共心配なく其方共も急ぐ旅路であるに依り遠慮なく出達致すやうに…… 旅「夫れぢやあ何うも御氣の毒様でございまする御恩返しも致し、てぬで 小「何に縁も由縁もなき其方達を吾等の乗合ふた船は縁があればこそ他人とは思ひぬから苦うない残らす立て」 旅「誠に何うも有難う存んじます併し今晚は一同舟に致しませう。小太郎聞いて 小「夫れも宜からう。然るに兩人の武士は夫れへ進み出で原因はと言へば我々兩人が酒を始めたのか第一悪るい併し拙者共兩人は瘦せても枯れても大小を差す身でありながら海賊の謀に陥り毒酒に中りたりとあれば實に主人に聞けても赤面の致り併し先刻御座を以つて我々も一命を全うして國へ歸れまするに依り拙者兩人は尊公の鉄砲の傷御全快までは町人共は差て措き命代りと心得及ばすながら御世話を致すでござらう。塚原聞いて 小「御尤なる御言葉でござるが各々方も王持つ御身とあれば御急ぎであるに依り御構ひなく御出達下さるやう兎も角も今晚は町 六の言葉に任せ一同合宿と致すで御座らう兩人聞いて 兩人「御尤も。是れから一同室の津の陸へ上り立派な旅人宿を船頭に案内をして貫ひ乗合の者一同是れへ泊り。偕て目出度と改めて一盞酌み交せ交はす其夜は臥して翌日皆々禮を述べて町人共は出達を致す左無き方に兩人の武家は大小に馳

して立ちもせず塚原の傍に付いて居る小太郎は氣の毒に思ひ 小「失禮ながら御兩所は主持つ身と仰せられたが御主君は何んど仰せらるゝ方でございます 武「御意にございます拙者は播州花隈の城主戸澤山城守の家來飯塚團平と申する者又た是れなるは同役吉川五郎治と申する者主用にて大阪まで参り花隈へ立ち歸ると云ふ途中の災難誠に主人に面會の出来るは貴所の御座其許様も御急ぎにあらすんば花隈へ御同道申上げたいものでござるが如何でございまするや。塚原小太郎思はず天にも昇る心持をなし此度上州を離れ播州を指して乗込み來たりしは此兩人の主人戸澤山城守を尋ねたいが爲めなるにより 小「偕て」御兩所は戸澤山城守殿御家來なるか誠に願うてもなき幸今は何をか隠し申さん拙者は常陸國塚原の城主塚原土佐守の次男小太郎と申する者此度御主君戸澤山城守殿に御目通の上塚原小太郎願の筋あつて推參致したる途中何か御縁のあると見へる希くは御同伴を致たき者。吉川飯塚塚原小太郎と聞いて次の間に下り平蜘蛛の如く平伏して 兩人「偕て」知らぬ事とは言ひながら最前からの不禮を致し候事は平に御容赦下さるやう日本無双の大先生東國で麒麟大天狗と其名を取り賜ひし塚原土佐守殿御子息小太郎勝義先生。實に面目次第もなき我々兩人主人も豫々先生の御噂のみを致して罷り居る賑や悦ぶことで御座らう然らば御供致

し花隈へ罷り越すでござらう。此處で以上三人連れで旅人宿を出達致し播州花隈へ乗越ひ
 で参り戸澤山城守に面會を致す。偕て塚原小太郎の事をば申上たるに戸澤山城守殿も盡く
 悦び至急塚原小太郎を御前へ御招に相成り戸澤の家來左右に星の如く居列んで豫て東國に
 麒麟大天狗と呼ばれたる日本無双の早業と其名を取りし塚原先生如何なる人物やと小太郎
 を目撃もせず見て居る。山城守殿塚原の様子を見るに未だ年若しと雖ども流石に五万石の
 土佐守の御次男飽く迄見識が高い。山はははは初て面會致したるが拙者戸澤山城守でござ
 る豫て當播州花隈表まで塚原の名前は轟きありしが吾れ存生の中に貴所に對面を致し天狗
 生飛切の術を傳達致さんと存じ心に懸け居りしが何にせへ海山遠く離れたる常陸塚原と播
 州花隈心に任せざりしが能うこそ御尋下され辱なし塚原頭を下げ。塚「初めて御目通りを致
 す拙者事塚原小太郎勝義と申する者實に戸澤公の御名雷の如くに承知致す然るにや此度我
 師上泉伊勢守秀綱より三ヶ年の暇を貰ひ當地へ乗込み何卒天狗生飛切の術を御傳達に與か
 らんと存じ推參致す途中御家來に面會を致し何より小太郎悦しう心得る。山城守殿御聞
 なされ偕てく此度は船中にて我家來兩人貴所の爲めに助命となる此御恩何時の時にや返
 すべき又尊公我が許へ天狗生飛切の術を學ばんと致せしは如何致して心付きたるや。塚原

聞いて塚「左候日に永録元年十月十三日上州赤城山明神源平旗取の奉納仕合ありしに西國
 に於て鳳凰と呼ばれたる龜井新十郎之則先生に出會ひ目醒しき勝負致せしが其時拙者龜井
 氏の手元に飛び込み一聲叫んで打ち込みしに不思議や龜井新十郎之則先生は呼聲と共に其
 體見へず如何にも訝かしく拙者上州箕輪へ立ち戻り師上泉秀綱に面會致し右立合の趣きを
 語りしに師なる秀綱申すには龜井新十郎天狗生飛切の術あり然らば此度は立ち合ふとも又
 た是れ龜井に右の術にて免れたる時は千度百度立合ふても及ばんに由つて今天狗生飛切の
 術と心得んとあらば花隈表戸澤山城守殿あり此れに赴き傳達受けよと師が命に依つて推參
 致して御座る。戸澤山城守小膝を打ち。戸「成程定めし貴所と龜井との撃合は天下に稀なる
 所の立合であつたでござらう儘ならば戸澤山城面前にて此立合を見たまものなり如何にも
 龜井新十郎事拙者が手許に於て習ひ修めし天狗生飛切の術御尤もた貴所我が手許にあり此
 天狗生飛切の術を覺へなば眞にや麒麟に翼を添たるが如し先づ御緩御逗留あれ。と最も丁
 寧なる扱ひ塚原先生涙を流して悦び播州花隈に足を止め毎日く山城守に従つて此天狗生
 飛切の術を覺へり素より天下に名高き塚原先生一を聞ひて十に當る程の人なれば其技術と
 覺込む事余人より早し三年の間に先づ此天狗生飛切の術を盡く熟練を致し戸澤殿も教へた

甲斐があり塚原も覺れた甲斐があり大層悦んで是れならば後には龜井に出會ふとも何條敗れを取る事やあるべきかと山城守殿日々小太郎を褒めて御出なさる。或夜の事小太郎殿睡み御出で遊ばす枕邊に小太郎と呼ぶ聲。塚原先生兩眼を開いて見るにア不思議や枕邊に御父土佐守並に御舎兄の帯刀血だらりの裝束にて黙然として座に着いて居る扱ては父上兄上忌はしき御姿にて拙者を御呼になるかと兩手を出して父上兄上を撫でやうとする愕然として目か醒める汗ビツシヨリ南柯の一夢。ハテ心得難しと余人にも言ふ話でもないに依り御自分一人謹み其晩は其儘臥せれば同じ夢又翌晩も同じ夢三晩繼續けて小太郎が一つ夢を見る如何にも心に懸るに依り戸澤山城守に右三夜繼續けて見たる夢の話を致す。山城守か聞いて「夫れは小太郎永く故郷を離れて居るが故父や兄の事を思ふ故身體の疲れで見える夢である併し最早尊公に致へる所少しもなし是れより常陸の塚原へ立ち戻らつしやい。小太郎頭を下け小誠に有難き其御言葉今暫く御手元に在りたく心得れど何がサア夢の一條氣に掛れば然らば仰に従ひ御暇頂戴致すでござる。扱も塚原先生戸澤山城守に暇を致し常陸國塚原を望んで播州花隈を出達致す。大勢の戸澤の家來連ては國境迄御送申さふと云ふので皆一同送る。皆然らば先生御機嫌能う。と右と左へ引き分れ是れより塚原先

生唯一人道を急ぎ常陸の塚原を指して御戻りに相成る相も變らず室の津より船に乗り大阪に着致し東海道を下つて御出なさる日に歩み夜に泊り相州足柄下郡箱根の關へ掛る。白の地に黒く三鱗の紋付ひたる幕を敷めしく張り新に建つたる關門は正しく北條の固めと見へたり塚原氏笠を左りに提げ關所の前に膝付き。塚「御關所に御届け申す斯く申す拙者は常陸國塚原の城主塚原土佐守次男塚原小太郎勝義。私用あつて播州花隈表に罷り越し唯今立ち戻ります。塚原の了見では亂國だに由つて嚴重に關門を構へたのであらうと思召し右の趣きを届ける居列んで居る武士聽て一人立つて奥へ這入る稍暫くあつて襖を開いて出て來たるは身の丈六尺餘り色黒年齢三十七八歳。重役「ア唯今下役より承りしが塚原小太郎勝義殿と仰せられしか。小太郎頭を下げ如何にも左様でござる。重役「全く塚原先生か。小「毛頭偽りは申しませぬ。重役「左様か。夫れと周圍に居る者へ目配せに及ぶと塚原の後より十七八人モツリ付くもあれば或者は棒を取つて取り詰める。塚原氏一足後へ下り體を固めて塚「何をさつしやる不禮を爲しやつると手は見せぬぞ塚原小太郎は身不肖なりと雖も身體さ者に雜器を以つて我れに對ふは誠の武士の掛くべき所の雜器でなし何にか故に我れに對して不禮を働く。件の大きな男聞いて。重役「借ては塚原氏は故郷の事を御存知ないか塚

原聞いて訝しく「故郷の事を御存知ないかとは何事ぞござる拙者一向に心得申さぬ重役
 「夫れは誠に我々が御不禮を致した。拙者事は北條相模守氏政が番頭遠山六太夫と申する者
 でござる實は尊公御父塚原土佐守殿主人常陸國茨城郡水戸の城主佐竹右京大夫義重死去の
 後に公達未だ御幼少なるを幸に尊公の御父土佐守殿は越後國頸城郡春日山の主人謙信を後
 楯と致し主家横領致さんと謀りしこと半途にして露顯致し常陸國笠間にて七万石の一族
 常陸の佐竹彈正左衛門重國殿の爲に擒に相成り常陸笠間の半内に在る由過日佐竹彈正重國
 殿より塚原土佐守の次男小太郎事播州花隈に在り若し歸郷の折召捕り常陸國笠間へ届け呉
 れよと彈正殿より頼みを受け新に建てし此關門の國の事を御存じなきは誠に御痛しき事。
 始終を聞いて塚原先生仰天を爲し「マ如何なればこそ斯る意外の珍事あれ身不肖なりと雖
 も父土佐守は佐竹重席の人何條主家を横領すべき理山あらんや兎も角も吾れ少しも分らね
 ば是れは一層の事細に掛り常陸笠間に赴き半中にて父土佐守に面會を致し始終を聞かば必
 らず分るであらうと思召し自ら大小を取つて玄關の敷台へ投げ出し「御尤もなる仰せな
 事各々方も御役目重し……イザ塚原小太郎御細を頂戴致すぞござる。と神妙に塚原先生細
 に掛り。小田原の城内へ塚原を届を致し半内に小太郎を打ち込んだ限り敢て調べやうとも

仕なければ又常陸笠間に遣らうでもない日々塚原先生半内にて何時吾を常陸の笠間へ遣は
 す心得である如何なればこそ有無の答もなきやと心落入らざるに依り晝となく夜となく故
 郷の事計り案じて居る天何んで悪人を其儘に「置べきや永録元年八月二十三日塚原先生小
 田原城を打ち破つて百三十八人の即死を拵へて茲に働きの一條明日申上ます

第六席

エ、箱根の新關に於て塚原小太郎を召捕つて小田原城の半内に入れ敢て常陸の笠間に送ら
 れ其實如何んと言ふに常陸國茨城郡水戸の城主佐竹左京大夫義重高八十三万石然るに左
 京大夫義重病死致して未だ公達が幼少なる故に御傳役として佐竹五人老衆梅津内記と云ふ
 老人が御傳役をして居る然るに御一族正席常陸國笠原に於て高七万石佐竹彈正左衛門重國
 己れ佐竹の御家を横領爲さんと云ふので一味徒黨の悪人を駆り集め八十三万石を横領して
 伴耶登丸に遣はさうと云ふ所存なれども常陸國塚原に於て其高五万石塚原土佐守の戦場萬
 馬往來して人も知つたる天下の大衆傑尋常の人にあらざるより此一人があつては目の上の
 瘤塚原土佐守を追ひ形付よう爾爲たる後は主家横領を爲さうと云ふので始終工夫に及んで
 塚原土佐守の偽誓を認め之を己れの家來に持たせ外の家來が落したのを我家來が途中で拾

以取つて傳正重國に之を見せし然るに佐竹彈正重國は傳役梅津内記が當時眼病を幸ひに内記に面會を致し 彈「傳御當家椿事出來薄氷を踏む計り。梅津内記が承り 椿事出來薄氷を踏むとは如何なる願動が出來たるや 彈「去れば是なる書面を御覽じら塚原土佐守の既に主人左京大夫義重死去の後主家を横領爲さうと云ふので越後春日山上杉謙信を頼まんとせしに然るに天命盡きたるにや途中に於て我家來之を拾ひ取り我一人見ては如何なる疑を受くるやも知れぬ依つて尊公へ是を御覽に入れる。梅津内記兩の手に取り上げたが眼病の悲さには判明と見へない。去り乍ら佐竹に於ても此察者あり 梅「夫は彈正殿仰せらるる所は一理あり併し土佐守に於ては忠臣無類のものど拙者承知致す尤も越後謙信は土佐守の一族なる事は天下に知らぬものはないが併し主家横領の企を致すべき土佐守に非ずと思ふ故に某是より土佐殿の御屋敷へ罷り荒立ないようになん其信疑を深つて參る某に御任せあるやう。佐竹彈正之を聞ひて梅津内記に塚原城へ趣かれては巳の思ふ所が丸で相違致すに依り 彈「是は御尤でござるが梅津氏自身に塚原へ御聞きならぬ方がお宜しからふ是は先づ手前に御任せなさい内々先づ探りを入れて參いらふ。梅津は大に喜んで 梅「是ならば事誠に穩便内々詮索が然るべく外に悪人あるに相違あるまい。扱彈正と梅津とは東西に分

れたが彈正屋敷に立戻り源藤五平次を呼び 彈「今日梅津を欺き箇様く申せしが次第に依ると梅津より土佐守へ内意を申し込かぬ素より渠は當家無双の豪傑生け置いては面倒なるにより汝無双なる土佐守を討て落し我爲めに忠義を盡せ。源藤五平次は鉄砲巧者の名人だに依り 源「委細承知仕つてござる土佐守如何なる豪傑にせよ愚臣が習ひ得たる砲術を持つて討取るヤハカ難き事あらん。是より源藤五平次佐竹彈正より内意を受け土佐守を附視うて居ると段々塚原土佐守は佐竹彈正の心を問者を入れて塚原城より笠間の様子を探るに彼れ主なき彼は一族正席を鼻に掛け日々悪に募り我儘に誇り主家の臣を我臣の如くに心得て町家の町人などは塵芥の如くに心得て彼等の横行甚だしき故に次第に依れば佐竹彈正虚に乗つて當佐竹の御家を横領なすかも知れぬ爾ある時には大事に望むに依り全く彈正の志を見て參らうと家來三十人ばかり連れ或日の事で塚原土佐守馬上豊に打股がり郎徒に鎗を擔して塚原城を立ち出で笠間を指して進んで行く是を見て佐竹彈正の問者直ぐに立歸り之を彈正に告ると時こそ來たれと佐竹彈正一百人の者共に小具足に身を固めさせて左右に伏せた。源藤五平次は手慣れたる鉄砲を引提げて松の梢に上り今や遅しと待ち構へて居る斯ることとは夢更知らず塚原土佐守は馬上に於て萬方に眼を配り天下に名たる豪傑

武藝は常陸國鹿取郡飯篠入道長威齋の門下に來り飯篠流の大名入道に矢彈の中を往來致して居る大察傑だに依り當り輝くばかり郎黨を隨がへ悠然と松細手に掛つて來るを源藤五平次遙に松の梢から見居たが土佐守は萬夫不當の勇士だ箇計りの勢ひに畏怖て切つて放つならば必ず手裏劍を以て討れる非去と言へば言へ斯かる察傑は遣り廻して後様に討たんと源藤五平次が茲處へ氣の付いたのが土佐守殿の運の極め眞の察傑にせよ後様に切つて放てば砲聲と共に土佐守程の人でも變つて仕舞ふ五平次が遣り廻して土佐守殿を七八間も向ふへ遣り廻して後様に引き金を引く途端に砲聲高く背から胸板へ焔硝の煙りと諸共に打ち抜けばアツと一聲叫んで馬上に堪らず眞逆様に落ちながら敵は佐竹彈正なるよと高朗に呼はつて落馬に及んだ此の砲聲と諸共に左右の松原へ伏して居る百余人小具足に身を固めたる者共得物くを引提げて土佐守の家來を毆殺と斬つて掛かるモノくシヤと土佐守の郎黨當るを幸ひ抜き連れく三十名計り一人も生きて歸るな殿の爲めに死ねやくと云ふので渦巻立つたる大勢を相手に斬り詰んで居るが盡くに強い此處へ來ると常に家來の養ひの宜い悪いが知れる忠臣無類の土佐守の家來誰か一人逃げると云ふ者はない大勢を相手に戦つて居ると時移りての戦ひにハツタくと塚原の家來討死を爲る中にも吉川長三郎大音を上

げて 吉川「如何に伴作殿御手前は此所に於て最期を遂げるは無益の事なり早やくと塚原城へ引還し若殿に斯かる大事を告げ候へ我々此所に殿を致す故に早やくと引き給へ之れを承はつて秋山伴作 秋「然らば長三郎我れはをしからざる命なれども一度若殿へ此段を告げ申さん然らば各々後刻長土に向つて對面致さんと傍に乗り放したる主人の乗料にヒラリと打ち跨る秋山伴作塚原城へ遁るな逃すなど大勢敵は掛つて來る奴を大劔を振り立て々當るを幸ひ斬り捲り塚原土佐守の郎黨秋山伴作汝等如きヒヨロく武士の手に乗らんやと馬蹄に掛けて蹴倒しく一方の血路を開いて後をも見ずに水上に一羽の鴨が浮びが如く宙を飛んで塚原城を指して見ぬすなりにける跡に履み止つたる吉川長三郎を始め塚原の家來三十余人一人も残らず笠間の松原に於いて最期を遂げたるは實に見事なる忠臣計り然るに秋山伴作は塚原城へ一散に立ち販り門前から馬より飛び下り門番が見ると御小性頭の秋山伴作血刀を掲げ血だらけに爲つて引還して來た大いに驚いて聞く間もなく伴作馬より飛下だつて一散に玄關に飛上り若殿は御在するか御注進く塚原帶刀遮しく其れへ出て「帶何事であるか早く語れと云ふに伴作涙を流して「残念なるや若殿今日笠間巡見に御出馬に相成つたる途中に於いて佐竹彈正是れくの伏勢を左右に置き卑怯にも飛道具を以つて

君を打ちし者源藤五平次より他には有る可らず某惜からざる命を長らへ此處まで立ち願
りしは即ち君の御大事を告げ申さん爲め早や疾く御用意あれはしくも物語るを聞いて塚
原帯刀己れ父の敵佐竹彈正ヤハカ其儘に置くべきや帯刀が鎧先の程を見せて呉れんすと罵
り立つたる所へ遮しく若か武士驅け來り恐れながら一大事の騒動なり 武「今佐竹彈正三
百余人を従へて此所に參るに由り御油斷あるな帯刀之れを承つて 帶「物々しき佐竹彈正な
り心なき者は直様引下れ心ある者は我と共に父の當の敵佐竹彈正を討て」と鎧を着ける暇
もなくナゲシに掛けたる十文字の鎧を捨てて襦袢卷の用意に及びサア來い來たれと玄關の
敷台に近侍を随へ塚原の家來憶病の奴等は我先にと一同に逃げ出す心あるべき忠義の者共
は履み止つて最期を遂げやうと云ふ者八十三人殘人は先づ我も〜と逃げて行く其中表門
より鉄砲を打掛け〜進んで來る内から貫抜を開いて拔連〜塚原の家來が打つて出でし
が向は甲冑に身を固め當方は素肌鎧を削つて戦つて居たるが何條大勢に無勢ハツタ〜と
討死なし心死を盡して込み入る所の敵を追捲つて居るのを見て 帶「如何に伴作最早我一命
も是れ迄なり 潔く今日當城に火を掛け炎中に最期を遂ぐべし去りながら汝に一大事の役
を申付る此所を速に汝退散して速に播州花隈表に罷越し弟小太郎に面會を致しなば父の

敵兄の敵速に佐竹彈正を討てよかしと帶刀が臨終の際に申したと是れなる劍を小太郎へ遺
して呉れ。と大和の住人國義の二尺二寸の劍を御渡しに相成る伴作は涙を流し 伴「尊命御
尤に候へども君の御危き御最期を余所に見て當城を退散致すも心元なく此役目は余人に
仰せ付られなば有難き仕合 帶「汝に非らずんば動らぬ死する計りが忠義に非らず小太郎に
面會致し竹佐彈正を討ち取り汝も共に一刀彈正に恨むが忠義であらう早や疾く敵の込み入
らざる中に退散せよ。今は是非に及ばざれば伴作も何時まで斯くてやあらん名殘は盡さね
ど御願申し上げ件の國義の劍をば我が背に確つかど結び付けたり敵次第に込み入つて來る
帶「否待伴作汝一人をむさ〜敵に討たするも覺束なし我跡に繼續いて來よと裏門の所よ
り込み入つて來る人數の真中へ流々と鎧を捨て塚原土佐守長子帶刀此處に控へたり卒で
鎧先を受け取れよと呼はり〜當るを幸ひ弓手馬手に斬り拂い早や疾く此處を出でよ去れ
ば最早今生の對面も是れ限りと伴作は襦袢卷立つたる敵を斬り捲り〜姿は見へずなりに
ける跡に踏み止つたる帶刀殿最早伴作を落せば弟小太郎に面會し告げるに相違なし心に殘
る所なし去や最期を遂げんと奥殿へ立戻りたるが母并に御自分の妻三枝を召して最早母人
御運も末なり 潔く御自殺あれ塚原の外形帶分共に殉死仕るべしと支度を選ばしたり流石

は五萬石の奥様なれば美々として終に御三寶をそれへ持つて御出でになる懐劍を直し然れば帶刀介錯を致せよと悪るべれず御最期に相成りましたが妻の三枝と御迎になり其方も涙く最期致せと帶刀殿の御連合三枝と仰せらるる御方は武藏國豊島郡小石川村の郷士島村五大夫と云ふのが三枝殿の實家でございます之れは後に塚原先生御出に相成り妖猫を退治するのが此家である。三枝殿御最期に相成り帶刀殿最期を始終見届けて郎等を呼び最早汝等此所にて火を掛けよ一點だに残す所なければ火を掛けよと郎等と呼ばるるに帶刀の傳役たる古田勘太夫涙を流したるが最早や君御最期あれば止むを得ず 古田「御舍弟此所に在るならば彈正が首級討つべきに今は是非に及ばざる所なり。と速に火を放けたるより塚原城炎々と燃ゆ上がる焔の中に物の見事に切腹を致す瀬山五郎介錯をして己れの大刀を取つて喉を貫き終に炎中に最期を遂げる塚原の臣等差違へく或は焔の中に飛込みく皆く最期を遂げたるがサシモ佐竹の家老塚原の家名茲に斷絶に及ぶ塚原城下の商人共涙を流し就中常陸の者共之れを聞いて佐竹彈正を悉くに罵る今に佐竹彈正天の憎しみを受けて若殿小太郎勝義君の播州花隈から御戻りに成れば彈正の命がないく」と云ふ評判然るに佐竹彈正重國は既に塚原父子を殺せしが怖ろしい奴は次男の小太郎今播州花隈に止つて居

る故に今にも引き選して來た時は大事であるから此者を途中に於いて討ち取るの外に策はないと我が従兄弟なるに依つて先づ關東八州の探題北條相摸守氏政氏康親子に塚原の事を頼んだるから北條に於ては箱根に關所を構へ其處へ塚原小太郎が通り掛り國の事を御存知ないから遠山六大夫の言ふに任して尋常に細に掛り小田原城に送られたり然らば小太郎小田原から常陸の笠間へ赴き牢内にて父に面會して様子を聞かふと云ふ積りで小太郎我れと細に掛つて小田原の城へ送られたから小太郎何時小田原から常陸の笠間へ送るのであらうと牢内にて國の事計り心配して御出なさる永録の元年秋の八月の十四日小田原城下の居酒屋へ蘇を纏ひ竹杖に携がり穢なき手拭にて顔を包み面桶を左の手に持ち一人の非人が何卒此面桶の中へ御膳を二人前に煮肴を露澤山掛けて御吳んなさい居酒屋の若衆は無宿の面を見て中々驕つか乞食だ飯二人前に煮肴一人前露澤山掛けて呉れど 若衆「御錢が有るかい此通り御錢はありますから。向ふに安座をかい飲んで居た二十五六の威勢の宜い中間中間「ナイ〜若衆無宿の錢だつて使へぬい氣遣はぬい無宿だつて心氣の宜い奴は節儉にして甘いものを食ふと思つて居るのだ遣りね〜此己れが錢を拂つて遣るから心配するな斯う乞食己れが拂つて遣るから構はね〜持つて行け〜若衆宜いから遣りね〜

若「遣ります 仲「露澤山掛けて遣ねへ馳て面桶へ飯を二人前入れ奏肴に露を掛けてナイ向方に居る役割が御前に遣ると云ふのだ面桶を持ち 非「大きに役割有難ふございます。と跋足を引きながら何うも役割大きに有難ふございます 仲「己れなんざあマア彼んな物を騙つて遣るのが功德に爲るのだ 若「其うですか何んでけすかへ今御前さんが御話を爲すつたのは本當ですか 仲「彼れは番頭さん本當よ番頭さん嘘なんぞ吐きや爲ねへ己ん所の且突なんぞはばんく〜憤つて居るのだ上杉や北條の家來に目の明いた奴は一疋も手一己ん所の且突は憤つて居る 番「へー何んでけすか日本無双の名人と云ふ塚原小太郎と云ふ方は半へ入れつた切りなんですかでは役割何んで半へ入れたのでせう 役「其れが子北條「取氏康と云ふは關東八州の探題と言つたつて役に立つ奴が無へ己れが主人福島左衛門様なんだは實に小田原の北條には勿体無い人だ。今に見さつしやい塚原先生を半へ抛り込んで乾し殺さふと云ふのだ夫れが今に出られやうものなら塚原の親戚の上杉の謙信が怒つたら強いから今に謙信坊主が憤つて越後の春日山から向つて來られた日には己らん所の且突は小田原の搦辛武士には働いて遣らねへと言つて居ら 番「成程役割の前ですが。左様ですかと大きな聲で中間が一杯機嫌で酒屋の番頭を相手に話をして居る。居酒屋の横半の所へ安座を掻いてハ

ク〜飯を食つて居た例の無宿の耳に 非「扱は頼みに思ふ若殿は播州花隈に御出ではなく此小田原の城内の牢中に苦み居るとは……如何致して牢内に御出なさるか次第に依れば是れも敵の謀計に落されたに相違あるまい能く〜塚原一家の者は運の拙なき事なり天も上覽あらば塚原一家に對し白日青天を得させ給へ情無き事だど面桶を明けて仕舞ひ何うも是れより花隈へ行く事能はず思案を致さねばなるまい。と突立上る此非人は常陸塚原城に萬軍を切り抜け播州花隈へ赴かふと云ふ塚原の忠臣秋山伴作自分と姿を更へて東海道まで落ち延びて來る此居酒屋に於いて小太郎の艱難を聞いて思案を爲て勇士も今は是迄なりと思ひ伊豆國眞鶴ヶ濱に當時護師の磯右衛門と爲つて網乗稼業を爲て居る是れは元塚原譜代の家來で秋山又兵衛と云ふ伴の熊吉を相手と老休めに網を編んで居る 磯「熊や秋の日足の短かいからモ一直さに暮れるが徐々止めて一杯飲まふか 熊「然うでけすなモ一徐々網透さも止めませう又明日の事としてヤレ〜草臥れた〜兩手を伸し親子の者網を片側に直す門に突つきり立つた一人の乞食 乞「熊や〜熊吉よ。我名を呼ぶに熊吉は振り返つたが 熊「何を言やがる此ヤクザ乞食大層も無い事を叩きやあがるな近邊を見て伴作捕を取つてツツクと立ち熊吉己れだ被れる所の藏ない手拭を取る熊吉誰れだと聞きながら近寄つて見れば

斯は如何に 熊「貴方は兄上ではござらぬか件作殿ではござらんか御父さん兄件作非人の姿に爲つて歸つて御出なすつた 磯「何に件作が飯つて来たイヤ件作其方は如何致して立飯つて来た如何に其方は若氣の至り奥女中でも不義をして大方塚原家を御暇にでも相成つたであらふ件作涙を流して 伴「親人は斯る邊土に御座れば風の便るべき暇も無ければ御存あるまい既に大殿も若殿も奥方も臣等一同最期を遂げ塚原の一家茲に断絶致してござる承つた秋山又兵衛仰天して 又「儲ては如何なればこそ塚原の御一族様皆御最期御家断絶とは是れ件作何う云ふ譯だ早く語れ 伴「實は佐竹彈正主家を横領なさんと云ふ企圖よりして大殿を笠間の松原に於いて討ち取り同日若殿城に火を掛け御最期然るを拙者一人逃れしは播州花隈へ罷り越し若殿小太郎勝義君に面會致し御父兄君の敵を討たせ參らせんと思ひしに豈計らんや頼みに思ふ小太郎は小田原の城中の牢中に在りと 承り身置茲に谷まれば親人に御相談に参りたり宜き智恵あらば件作に御教あれ。足摺を爲して秋山又藏 又「ヤア残念なり今では漁師磯右衛門と改名致し高が知れたる綱打稼業元は塚原が家來秋山又藏我今四五年も若ければ彈正を唯だ置くには非されど無念なり。と云ふ側に秋山熊吉スツクト許り立上り 熊「氣遣あるな兄上拙弟是より小田原城へ推參致し若殿を救ひ出さん事最と最

し 又「イヤ〜若し遣り損じなばそれまでなり今日に限りし事にもあらず件作も疲れてあらふ悠然として時刻を待つが宜い。是より件作の足を休めさる親子三人寝物語に其夜は臥して翌日に相成り又兵衛が取り出したる手文庫其中を探り 又「有つた〜何んでも取つて置けば無駄にはならない吾れが小田原の城内に少し計り遊んで居た時に牢屋番を爲て遣つた其時に小田原で牢の普請を致すに付き大工に己れが貰つて置いた繪圖は是れより外に牢の有るべき所小田原に無し搦手の方から往つて堀を越へ土手を切りなよめに左の方へ行けばモ一是より外に無い。熊吉件作是を聞いて居たが 兩人「成程是さへ有れば大丈夫時さへ来れば乗り込みませう」と斯くまでに兄弟の誠忠に天も感納ありしか小太郎の運の強さにや永録元年の秋八月の廿二日晝間よりの風雨を幸ひ秋山兄弟小田原城へ乗込み塚原小太郎の牢破り

第 七 席

エ、秋山兄弟は晝間よりの雨風の烈しきは是れぞ我々に天の興へと件作は竹杖に仕込んである大刀を竹を取つて仕舞ひ仕舞つて置いたる鏝を出して之れを箝め素より竹杖に仕込んで直接に仕込む譯でなく鏝だけ取つて刀柄だけ竹の中に仕込んである左もないと竹の油

で劔が錆び付いて仕舞ふ故に餘丈け取つて後で付ければ宜いやうに出来て居り右の大刀を打込み主人の隠敵をば引負つて簀笠に身を固め兄弟共に秋山又兵衛に別れを告げ 兩人「然らば此我々小田原城に討死致せばそれまで存命なれば再度御面調致さう秋山又兵衛笑つて曰く 又「汝等兄弟忠義の爲めに小田原城に死ぬ何んぞ此又兵衛が不幸と言はんや忠義を遣はれ盡せよ。」と目出度門出を祝して遣りまする兄弟勇立つて常に手馴れたる漁船に打ち乗り熊吉は腕を押し切り波の中を真鶴濱を出て相州小田原の擲手に近付く雨風烈しき八月廿二日の夜離れ有つて知る者なし船をモヤツテヒラリと飛び上り着たる簀笠を搜り捨て用意の甲斐繩を追取り土手へ上つて高垣に打掛け件の甲斐繩に捕り解の中に到つて土手を石傳ひ目先も知れぬ真暗闇忠義の一心に進んで来る中に土手へ付いてナ、メに斯う左りへ曲つて往くチラリと見ゆる燈火に兄上被處だ。來つて見ると新たに建つたと見ゆる番小屋がある戸の節穴から覗くと番兵五十人計り雨風が烈しいに由り斯る風雨なれば安心だと皆々前後も知らず寝て居る様子見上げると軒に鐘太鼓が釣るしてある斯様なものがあつては面倒だと熊吉早くも諸手を掛けて半鐘と太鼓を取り片側の谷へヤット一聲打ち込んで仕舞ひ雨戸に手を掛けガラリと開けた其物音に一人目を醒し何んだと起上つた途端を熊吉

右に固めた鉄槌の如き拳エ、と叫んで目と鼻を打つた一打に此熊吉は後ちに越後の誠信の荒小姓の一人に爲る秋山熊吉虎種力五十人力に對する奴五十人力の拳固で目と鼻の間を打たれギヤット言つて其處へ仰れる。又た起き上らうとする奴を面の真中を片端から拳固で止めを打つて五十人ながら一人も残らず生きた奴はない熊吉セ、ヲ笑ひ 熊「脆い奴だ。何んな奴でも五十人力に打擲されちやあ脆い者仕済ましたりと歩を盗んで進んで来る塚原小太郎は牢内にあつて何時我れを笠間へ送る事であらふや兄上は如何してや親人は如何してやと國の事計り案じて居る八月廿二日の雨風の烈しい時黙然として真暗闇ヒシヤ〜と誰れか来る様子だに依り牢柵の間より透して 小「誰れだ其處へ参りしは何者か 兩人「儲は若殿其處に御座ありしかや 小「吾れを若殿と申す其方は何者だ 兩人「ヤメ候秋山兄弟でござる 小「ウツ秋山兄弟とは伴作。熊吉か 兩人「如何にも伴作。熊吉でござる。聲を知邊に秋山兄弟窺ひ寄つたる半の周圍撫で廻して來た熊吉が牢の舌口に睨りて居る錠をば隻手を掛け何の之れしきとヤット一喝叫ぶと見れば件の錠はアツリと鉤くも捻じ切つて舌口を開けたるに依り小太郎其處へ出て 小「珍らしや兩人如何して兩人は是れへ來た 兩人「雨風の中へ兩手をつかへ先づは蒸なき御顔を拜顔秋山兄弟恐悦に存じ奉る今般兩人参りたるは

余の儀に有らず若殿は何も國の事を御存じ在らず。實は之れく斯様く故郷の大事深ながらに物語るを聞いて塚原小太郎天を睨んで突つ起ち上り小「儲こそ人面獸心の佐竹正我が父兄を殺し母を殺し義理ある姉を殺し塚原城を一夜の中に灰燼と爲し加之吾れと謀つて討たんとは卓怙とや言はん未練とや言はん吾れ斯く牢中を出する上は天を驅り地を潜る共目指す敵の彈正ヤハカ討たずに置くべきや能うこそ汝等此處に來つて辱なし伴作涙を拂つて立ち上り若殿に參らせ申さんと金剛丸國義の名刀を探り小太郎に渡らす塚原小太郎推戴き小「此刀を兄の遺物の名刀我が爲には六韜三略辱なし。と身支度をして之を腰に打ち込み。左あらば當城は早く出でんと主従三人物語を爲して居る所へ夜廻が岩洞提灯を空に向け潜んで來る中に用捨も無く大聲に岩洞を差向け乾つと見れば牢から小太郎が出て是から牢を打ち破つた上に小田原城を退散仕様と云ふ相談急に相圖の早拍子木カチカチ打ち鳴らし夜番「ヤア牢破りがあるぞ塚原小太郎が牢を破つて逃げるぞ油断を爲るな。と云ふ中に遠音の太鼓見るく中に雨風の烈しき其中に松明の光り赤空を焦する計り中にも番頭遠山六太夫大身の鎧を小脇に掻き込み塚原小太郎を牢から出しては小田原家の大事討ち取て仕舞へと云ふので彼是二百人計。塚原小太郎大口開いてカチカチと打ち笑ひ小「物

々しき所の小田原勢我れ牢内に有れば兎も角も牢中を出でたる上は百や二百の北條勢率で壓殺にして呉れん。と大刀の目抜を濡し穿立ち上り大音を上げて小「塚原小太郎勝義汝等の謀略に陥り數日の牢内に苦んだり今日の爲めに我當城を退散する上は汝等に小太郎の手練を置土産に致さん。と金剛丸の大刀の鞘を拂ふや小田原勢就掛つて來るを陥込みく塚原先生當るを幸ひ切り拂ふに秋山兄弟も大刀の鞘を拂ひ陥み込みながら大音を上げ兩人「塚原譜代の家來秋山伴同姓熊吉汝等一同に掛つて我々兄弟を討つて見よ。とヤツタくど切り捲る主従三人の手練の強きに辟易爲して一同に崩れたり六太夫大に怒り大身の鎧追拵つて塚原目掛けて付け入るを塚原體を轉じ塚「汝が爲めに數日苦んだり覺悟を爲せと手元短かに切つて落す六太夫跡へ下つて大刀の柄へ手を掛ける所を踏込んで腦漿から割り付ける六太夫の如き奴が塚原小太郎の相手に爲るべきものでない血煙立つて腦天から眞一二つに遠山六太夫討たれたれば雜兵共斯に叶はじと蜘蛛の子を散らす如くに散亂なす又々大勢榮り來る實にや小田原城内に死骸の山を爲す計り何時迄戦つたどて益なきこと塚原小太郎塚「秋山兄弟何時迄敵を追拂つても無益の事なり速に城内を立ち去るべし。兩人「我々其の爲めに土手迄船を用意して有れば是れにて速かに退散せん小「サ、熊吉我れに纏付され

○と熊吉を小太郎手を持つて背負つたと思ふとヤット一喝叫んで見上げる如き高嶺の外へ
 軽々と飛出たす小田原勢の者共此塚原の働きを見て 兵「何んと云ふ奴だ塚原小太郎まるで
 羽があるが如く飛び越したく恐しい早業だ。と驚くうちに又も飛び入り伴作を背負ひ
 ヤット一呼叫んで城の外へ飛び出す倍々驚き小田原勢塚原小太郎天狗のやうなるが恐しき
 早業なりと驚く是ぞ塚原先生三年の間艱難して習ひ得たる天狗生飛び切の術斯かる場合に
 臨んで役に立つ扱三人は用意の船に飛び乗りもやいを拂つて船を出し熊吉に手を掛け荒
 波をば切つて上總を指して漕ぎ出す小田原勢は戻せ返せとワア〜呼はつて居る熊吉船を
 押し乍ら大口開いてセ、ヲ笑ひ船中に於き大聲を上げ 熊「波の藻屑だ塚原主従が討ちたく
 ば是へ来いならば手柄に來い。と船を漕ぎ〜悪口をつきながら飛んで行く小田原勢一人
 もなし見す見す向へ行くのを見て居る丈是から秋山兄弟其船を漕ぎたてまして上總國姉ヶ
 崎へ落ちて来る上總國姉ヶ崎の海勝寺へ来て此御寺に伴作熊吉小太郎と着きましたるが○
 小「扱熊吉一旦眞鶴へ歸り親の又兵衛に安心をさせよ伴作は我手元に置くであらう 熊「然
 らば兄上我は眞鶴へ戻り若殿の御言葉に任せ父にも安心をさせるに依り今後若殿の御側を
 離れぬやうにさつしやるよう然らば御機嫌宜う。と熊吉は小太郎に別れ兄の伴作に別れる

是ぞ秋山熊吉が今世の別とこそ知られける扱小田原城中に於ては塚原主従に逃げられ残る
 は數多の死體ばかり即死が七十五六人負傷は數へる邊がない恐しい強い主従だと只呆れ返
 る計り此事をば北條家から常陸笠間の佐竹彈正の元へ告げて遣る八月の廿二日晝より烈し
 き風雨の夜に塚原小太郎小田原城の半を破り何處ともなく退散せり是はと驚く佐竹彈正震
 ひ上つて驚き入つた 彈「塚原小太郎が半を破つて出たとあれば我首忽ち有るまじ併し謀計
 を以て彼奴を討つに何條難き事あらんや。と奸智に長た佐竹彈正晝夜腕を拱き小太郎の有
 所を詮索するが更に別らんフト思ひ出し 彈「小太郎を釣り出すには塚原小太郎の叔父彌六
 郎と云ふものがある。此方は當時下總の國鹿島の神職藤田權守と言つて下總の鹿島の神職
 をして居る其叔父權守塚原彌六郎是を一番生捕つてやり塚原小太郎を釣り出してやらうと
 云ふ悪計を見出しソコ下總の鹿島の神前へ佐竹彈正參詣と云ふ前觸なんで右の前觸が下
 總鹿島へ届を出した。權守お聞き遊ばして佐竹彈正我兄士佐守を討取つて甥の帶刀を討ち
 取つたる惡徒なり何んぞ其儘に置くべきか若し參詣に來たりなば討ち取つて呉れんすと御
 自分の御家内及び二才に相成る所の御娘之を御呼び遊ばして 權「倍此度佐竹彈正當鹿島
 に參詣に相成る御身も豫て聞き及んだる兄士佐守非業の最期を遂げたに依つて兄の當の敵

を討たなければならぬ併し我誤つて敵の爲めに返り討にならぬとも限りなし依て御身は二度此所をば逃がれ何處へなりとも忍び彌六郎なき後は是なる娘を成長させ藤田の家名を立てるやうに計ひをさつしやるよう。御新造涙を流して武士たるべきものは異見をしたればとて用る氣遣ない 御新造「左様なれば成る丈け討ち洩さぬやうに遊ばせ。權守殿大に喜び土佐の家來山口源太夫を喚び出し 權「儲源太夫其方我家内を誘ひ奥州木連川勝巻の百姓の甚右衛門の許へ立退いて呉れるよう是は其方に預げる。二百金を山口源太夫に御渡に相成り 源「委細長まりました親父奴も腕前が出来ますれば御役に立たない乍らも助太刀もするべきで御座りまするがヨボく親父の事故已むを得ぬ御機嫌宜しう存じます。ソコで權守殿剛藏と云ふ中間を附け山口源太夫大事に供をさせて下總の鹿島を出立させました其他下女下男は仔細あつて一同に暇を遣はした是より權守殿サンモに廣き鹿島の拜殿に只一人イザヤ來れと云ふので相待ち居られた弓術の名人半弓を携へて當日に相成るを待つて居る。儲佐竹彈正重國普く大勢の家來に駕の廻りを守護さして鹿島の拜殿を差して進んで來る大燈籠の小陸より藤田權守キツト見て御出成さつたか儲こそ目指す彈正の乗り物御參なれど充分に引きたくりビユと切つて放つ羽音高く飛んで來る佐竹彈正の乗り物の中へ當つ

たと思ふと矢が向へ抜けた手對がないに依つて二の矢を切つて放つ又當つたが手對がない儲こそ彈正乗り物の中には居ないなど甫めて權守が氣が附いた案の定乗り物の中には居ず致して空廻を家來に廻りを取巻かして來たのであるから曲者御參なれど大勢のものどもオツ取り進んで來る權守今は是までなりと矢種のあらん限り佐竹彈正の家來の胸板腹面顔の嫌ひなくバツタくと射倒され最早や矢種は盡きたるに依り腰に在りたる所の二尺三寸の大刀を引抜き大燈籠の木陸より飛び出し大音を上げ兄の敵佐竹彈正重國。藤田權守塚原彌六郎是にあり覺悟をせよと討つて掛るソリヤ彌六郎を討ち取れと八方萬面から進んで來る奴を當るを幸ひ切り拂つた。何うも弓は上手だが劍術は左のみ強くないに依り掛細熊手に引き倒されソコへ高手小手に縛めらる佐竹彈正悉くに喜び常陸の笠間に之を引つ立て彌六郎の上下の齒を抜いてしまひ彌六郎を門前へ引出したが 彈「是汝んち當時下總鹿島の神職に出世致したるに何にが恨みあつて此佐竹彈正へ矢先を向ける汝が罪は宥し難し又汝が甥の小太郎住所何處にあるや彌六郎殿之を聞いて目を開き 彌「黙り居れ彈正汝我兄土佐守を討ち取り 加之塚原の家名を損す天下の人汝が悪なる事知らぬものあらず我汝を討ちて兄土佐守の仇を報せんと爲したるに運拙なくして生捕りとなる元々甥の小太郎の行衛

何條知るべき理由なし無禮な一言誓つて吐くな。とハツタと睨らんで其儘有無の答へもな
い佐竹彈正憎々しき汝が一言近日 磔 申し付ける是から彌六郎を牢へ入れ佐竹彈正何處ま
でも塚原を釣り出さうと云ふ計略に依り元祿元年十月廿日笠間の松原に於て塚原彌六郎を
磔 に行ふと云ふ觸れ出した之を聞けば必ず小太郎が出て来る出て来れば小太郎を召捕つ
て遣らうと云ふ積り此の評判が夫れから夫れへと高く相成つて来る。上總國姉ヶ崎に忍ん
で居た塚原先生之れを 承り南無三伯父君の大事何條怖るゝに足らんや斬り込んで御援け
申さんと秋山伴作と共に上總國姉ヶ崎を立ち出で、常陸の笠間に乗り込んで来たのが十月
の十九日の夜の亥刻の頃 でありませす。偕て笠間の人々は一同涙を流して 一同「ア、情な
いことを彌六郎様が明日は往生だ何の因果で塚原一家は此通り情ない目に御遇ひ成さるか
成る丈け商賈を爲るなど」涙を流して一同の者が誰有つて商賈を爲やうと云ふものもない
之れは人情だ。夜が明け渡れる偕三百人の兵を萬方へ伏せ置いて今日係りの役人高柳和泉
井に大野傳八郎馬上裕に打ち跨つて鬚ぼうぐと致し塚原彌六郎は瘦衰して引かれて御出
でなさる大勢の者一同涙を流し 一同「御悼はしい事だ彌六郎様の菩提の爲めに御仕置場迄
御見送りを爲し上げる。と云ふので我も」と見送りを爲る人の人情で快能く誰れも見物

に往かふと云ふものはない人情だに依つて見送を仕やうと云ふ。扱て仕置場へ乗込んで参
る矢來の許へ一同の者が取り付いて来たが「ア」と云ふ聲。馬から下ろして磔付柱へ塚
原彌六郎を括り付け御條録書を彌六郎に讀んで聞かせ兩人床机に掛つて大野傳八郎高柳和
泉それと云ふに乞喰は磔付柱をば突き立つて左右から鎗鎗をしよういて兩人の乞喰彌六郎の
面上に於いて「チャリン」と鎗を合し既に兩人が脇腹へ突き通さんと數多の見物圍の聲を
作り「ア」突かれるは彌六郎様の命がないは助けろや」と聲を上げて居るを耳にも更らに
聞入れず既に突かふと云ふ時見物の中より「ヤット一喝叫ぶと見れば鎗を持つたる乞喰は面
上をしたゝかに石に碎かれウント仰氣に倒れたり又も飛び来る磔は眞甲に中たつて是れも
倒れたり數多の見物大に驚き是れは不思議だ……不思議だど皆々不思議」と云ふ中に
側の竹柵を「メリ」と打毀わしヒラリと竹柵の中に飛び込んだるが 小「佐竹彈正の家來能
く聞け塚原小太郎是れに有り片端より来たれ」と呼ばればそれ出たぞ關東の麒麟大天狗
が出たぞ。數多の見物塚原の若殿が出た有難し」と呼ぶ秋山伴作同じく大刀を捻つて飛
込み片端から出で来たれと云ふ中に塚原小太郎逃がすな遣るなど小具足に身を固ためたる
三百餘人扱ては小太郎が討つて出たに相違ないと討ち取れど競ひ掛つて来る小太郎磔付柱

を小楯と爲し寄り来る所の大勢を斬り立つる。數多の見物小高山に上つて之れを見物して居る大勢の見物此働さを見て 見物「ドーマイ實に目覚しき働さ小太郎先生は御強い者だ見事の働だが何に爲る向ふは大勢此方は二人の主従援ける者が有るまい。」と見物なんどが皆小太郎に肩を入れて居る當るを幸ひ切り捲つて居る中に如何に緊傑の小太郎なれども飛道具で打て〜と言われれば驚いたが小太郎飛び來たる所をヤット飛び上がる其働さは猿猴の梢を傳たふ計り大勢を相手に切拂つて居たる秋山伴作不便や此伴作の身體に八方より射掛ける矢に中り二十六歳を一期として矢先に中り秋山伴作常陸笠間の松原に討死を爲したり數多の見物聲を上げて討ち取られた〜飛道具は身性だ〜と聲々に罵つて居る塚原小太郎秋山伴作の最期を見て 小「如何に人道に外れたる身性未練の佐竹彈正斯く有らんからには小太郎が眼黒さ中は汝等がテッコに乗るべきや討つ者あらは討つて見よ。」と小太郎疲れた氣色更になが礫付柱から下るす間が無いから身體が疲つて居る伯父を助けるに怒じ礫付柱から下るして怪我を爲せるでもないと思ふに依り當るを幸ひ切倒し〜如何に小太郎強しと雖へども新しき手を入れ更へて攻め込んで來る既に小太郎身體疲れて危き所へ東の方の竹柵の口をガラ〜と打つ砕ひたと思ふと黒の裝束に腰を掛け黒の頭巾で目計り出

し白の小袴を着けて寄付袴と云ふ鎧下の小袴其れをスッ短かに着き朱鞘栗千段の大刀を打ち込んで丈のステリとしたる男が飛び込み援け手も見せず弓手目手に突然五六人を切り拂つた恐ろしい奴が飛込んだと云ふ中に又々飛込んで來る續いて出るは〜西の方の竹柵を破壊して飛込んで來る北の竹柵を破壊して飛び込んで來る四方八方の竹柵を打ち砕き同じやうな裝束を爲て居る者凡そ先づ四十人計り何れも〜顔は見へない其奴等の強いこと八方四面から切り捲られ佐竹彈正の人数バツバツ〜と倒れる見物一同に手を擲いて 甲「ヤア有難いな何うも天から神がお下だ斯ふ云ふものでもなければならぬい全体塚原先生一人で危い所へ是れは屹度越後の春日山の謙信の家來が出來たに違ひない 乙「然ふだ〜屹度夫れに違へね 丙「向ふの方に丈のステリとして朱鞘の大刀を帶して居る人は己れの考では越後の春日山の鬼ヶ毛と言つて鬼小島彌太郎と云ふ人に相違ない 一同「然うだ夫れに違へぬい謙信の家來だ〜だ。」と大勢の見物勇んで居る遙かに大野傳八郎見て居たが憎さも憎し打ち取り呉れんと馬に打乗り 大「ヤイ汝等何奴なれば不埒を働く。大野傳八郎此處に有り覺悟〜せ。件んの体の小さい男カラ〜と打ち笑ひ 武士「口吟いた事を片腹痛し汝等如き鈍鎧死んだ犬の外には突くものなし生きた武士が突けるなら此處を突いて來い。

と胸を叩かれ氣を焦ら大野傳八郎 大「已れチンチクチンの分際として身体に過ぎたる其一
言。一喝さけんで突き出す鎧彼の男突かれたと思ひさやヒラリと體を轉じ二度目の鎧を突
き出さんと云ふ手元に飛込みヤット一聲叫んで大野傳八郎を高股から下腹掛けて切つて落
とすワット叫んで真逆様に落つるを伴の男腰をメリ／＼と陥み破り白痴め已れら知さ
ヒヨロ／＼武士に打たれるやうな老翁は爲ない。と冠つて居た頭巾を紐に手を掛けて半分
頭巾を取り一息付いた是なんんだと云ふに塚原先生の朋輩神泉伊豆守の四天王柳生又左衛
門宗義と云ふ大野傳八郎迎も敵ふ氣遣はない徳川家の御指南番柳生但馬守となつた柳生又
左衛門大音を上げて 柳「塚原先生今日上意に依り柳生又左衛門宗義是れにあり。塚原先生
之れを聞き 塚「倍ては我が朋輩ならんと思ひしに案の定之れへ乗り込んで来たのは上州群
馬の郡筈輪表に御座ある上泉伊勢守藤原秀綱先生大勢の弟子を率ひて此所に乘込み來り塚
原の危急を救ふ一條次第に申し上げます

第八席

エ、引抜きまして伺ひます扱目許頭巾に黒の裝束着用したる連中塚原の危き所へ乗り込
み佐竹彈正の兵を斬り捲つて必死の戦を致したる此連中は上州筈輪の神泉藤原秀綱伊豆守

九目藏人匹田文五郎柳生又左衛門宮原一天齋淺山三五郎戸塚源次山井八郎を始めとして上
泉が四天王八天狗其他腕の秀でたる連中計り三十九人就中上泉伊勢守秀綱殿大音を上げて
上「何時まで斯く計り數多の敵を斬り倒すと雖も無益の事なるにより誰かある彌六郎の磔
柱を早く引抜け。と呼はるに大刀の血を拭つて鞘に納め我ありと由井八郎一文字に駈來つ
て右の柱へ手を掛け矢聲と共に彼の磔柱を引抜きスハヤ其の柱をやるなど云ふので八方
から掛つてくるをヤイ腕立するなど由井八郎例の磔柱を横投りにヒツ叩き付けるに其大力
に辟易して十七八人ブツ倒れる就中磔柱へ括くられて居る塚原彌六郎氣絶をしてしまつた
尤も人を括つたる磔柱を横投りに人間をヒツ叩く其方は前代未聞伊勢守之を見て 上「コソ
／＼八郎無放な眞似を致すな彌六郎の身體が危険は早く脊負へ／＼と云ふ。言に依り括く
り付けてある布を解いて由井八郎已れが帯にして居たる一丈餘の布を解いて塚原彌六郎
を我が脊に十文字に括くり付け最早や彌六郎だに取れば何んのかはと再び手を掛け大
刀を引抜て渦巻き立つたる佐竹彈正の人数へ割つて入る流石の佐竹彈正の人数斬りまくら
れ近寄るものもなくスハヤ引上よと云ふので伊勢守の守殿一群は塚原を眞只中に圍んで
／＼引上げ岸の近間に繋がれて置たる小船に打乗るに船頭は臈を押し立て／＼沖を遙に漕

き出してしまひ沖に繋いである所の大船へ皆みな打ち乗り借彌六郎の介抱を致し例の小船を大船に附けて上總を立ち退き上州箕輪を指して馳しり出す十月二十日の月は皎々として山の端を洩れて出て塚原小太郎例の刀を杖に「絶へて久しき尊顔を拜し塚原小太郎恐惶至極に存じ奉る且つ又今日は危き所を救ひ下だし置かれ何日の時にや此御恩を忘却致すべしか方々にも美誠の志如何にも厚く御禮を申し上げる。皆々一同聲を揃へ小太郎先生先は大慶く伊勢守殿大勢に杯を遣はし」「そなたも今日の働き過分の至り。皆々一同船中に萬歳を祝し箕輪を指して引き返へす扱佐竹彈正の同勢無勢に打ち破られ已むを得ずして残るは死骸計り如何にも残念だが彈正重國は何者が小太郎を助けに來たりしや何うも分らぬよもや越後の春日山の上杉謙信の助勢でもあるまい事に依ると上州箕輪の上泉の連中ではないかと内々間者を入れて探る案の如く箕輪の上泉伊勢守秀綱の連中だして見れば伊勢守の道場に彌六郎を隠蔽つてあるに相違あるまい至急談判に及んで彌六郎を受取らうと佐竹彈正は常陸の笠間にあるに依つて關東八州の探題北條氏政に之を頼む依つて北條氏政配下の武士を高井戸の代官藤井源蕃に之を申し傳へるソコ藤井源蕃は我下役の村山大學に申し附け能くよく詮索の上彌六郎を受取るように致せ村山大學藤井源蕃至急代官を出で

探つて居る此方は伊勢守先生我が道場へ彌六郎を置いては次第に依ると奸智に扱れたる佐竹彈正我が元へ來る時は理を以て非に落ちる故に四天王重席神宮伊豆守に之を預ける神宮伊豆守は武州八王子にあつて先づ工面はよし此人の家なれば大丈夫だに依り神宮伊豆に御預けになる神宮悉く喜んで借塚原叔父甥を我家に引取ります時に塚原小太郎先生元來叔父は柔弱だに依り敵佐竹彈正稍ともすれば叔父を討たん叔父を討たんとする謀如何にも小太郎の爲めには叔父が足手纏ひで堪まらぬに依り一層の事叔父の身の上安体には計らい敵彈正重國を捕らまへた其時に叔父に一太刀恨ませよう云ふ心得だに依り「小借神宮伊豆にあれば我は是より越後春日山に罷り越し越三入道謙信公へ叔父の身の上相頼み拙者越後より立ち戻るまで何卒叔父の身の上を御頼み申す」神宮伊豆眼の黒さうちは叔父上彌六郎殿に鶴の毛で突いた程の怪我もさせぬ御安心あつて越後表へ御出立が宜かる。とソコデ小太郎も安心して越後の春日山へ乗り込んで來る。茲に關東の管領上杉憲政の後胤彈正左衛門上杉爲景の嫡子御幼名虎千代君と申し上げる京極二年寅の年寅の日の寅の刻の誕生日本無双の大薬傑上杉輝虎入道謙信十四歳の時怪しの術を使ふ矢取但馬と云ふものを一矢に射て落し其後越中の志島甚兵衛を滅ばし會津黒田を討つて御父爲景の仇を討ひ始めて謙信

十八歳の時に村上義清に頼まれ信州上田村に於て我朝の孔明と言はれたる武田大僧正信玄を敵手に合戦を起し今信玄と合戦最中にして越後春日山にあり越後越中越前飛騨四ヶ國信濃上野三分一を隨へ天晴れ天下に其名を轟かしたる賢將惜しいかな此御方四十二歳に致して落命を致しました憐れ謙信御年六十位まで御存命なれば天下は越後の謙信のものになる去り乍らかゝる名將短命に致して世を去るは實に慨はしき至り

今日もまた命の中にくらしけり明日をやさかん入相の鐘

是が越後謙信の辭世。去れば謙信此時川中島の合戦をしはぐ止めて在らせられる然るに謙信足利義輝公に頼まれ京都へ上洛が支へて居る依つて御自分合戦所ではないに依り只専ら御用意をして御出で成さる所へ塚原小太郎春日山へ乗り込んで参る謙信公の親類平賀志摩の守と云ふのが御父土佐の守の御一族であります其他鬼小島彌太郎黒鉄上野之介今吉玄蕃之介今吉小二郎赤法師西法印是等謙信の荒小性皆塚原の一族なり平賀志摩守の所へ乗り込んで参り久々にて對面に及ぶ。小一偕此度父土佐守佐竹彈正の爲めに笠間の松原に於て最期を遂げ兄弟刀塚原城に火を掛け焰中の生害致し目指す敵の佐竹彈正常陸笠間にありと雖も未だ時來らず之を討つべき時節之無きが故稍々ともすれば彈正叔父彌六郎を附け眼ふ

如何にも我爲めに足手纏ひ其くは謙信公の御勢を以て叔父彌六郎を御隠蔽下されば有り難き仕合せ。平賀志摩守聞いて「憎むべきは佐竹彈正去り乍ら貴所も未だ時來らざるは已むを得ざる所早速拙者御君に申上げ彌六郎を隠蔽ふよう取り計らうで御座らう。是より小太郎を我屋敷に止めて平賀志摩守謙信公の前に罷出。平「恐れながら志摩申し上げ奉ります。謙「何事である。平「去れば塚々君に申し上げ置候拙者の一族君の爲めにも一族たる塚原土佐守笠間松原に於て敢なき最期を遂げ長子帶刀當日城に火を掛け焰中に最期を遂げたれば塚原家名既に斷絶致し次男小太郎勝義今般拙者許まで参り叔父彌六郎箇様くの大願あるに依つて彌六郎の身の上を君に願ひ奉らんと罷り越し候君高大なる恩命を以て彌六郎を隠蔽置き下さることをば御承引下さらば忝けない。謙信公聞いて「最易き事なり憎むべきは佐竹彈正重國謙信今信玄を敵手となし軍馬を起す左なくんば常陸笠間に攻め込み一戦に飛び込み小太郎に敵を討すべきなれど何にが扱我朝の孔明と呼ばれたる信玄を向へ廻はして大事の合戦然れば國の兵端は易々動し難し望に任せ彌六郎を隠蔽ふであらう至急小太郎を呼び出せ。平賀志摩守甚だ喜び御前を下り頼て塚原小太郎を同道を致し謙信公の御前に入る何日の間にか謙信公の御前には御一族正席是は謙信の姉婿長尾越前守政景本

庄越前守景隆天春近江守景時姉崎和泉守景家飛騨修理の介義方北條薩摩守鳥山周防守弟
因幡守若尾軍太左衛門中條越前守吉井中務尉亦長伊呂部式部之少輔綱政是等謙信の八十
八將と云ふ夫に荒小性八十八人左右に綺羅星の如くに居流れて居るさしに廣き春日山の
殿中星の如く當まばゆき計りなり流石は五万石の若殿塚原小太郎お怖す憶せず御前に進み
形を崩さぬ日本無双の大豪傑 謙「して塚原小太郎なるか始めて遇ふぞよ余が謙信なり……
此度不幸にして汝が父土佐守最後の由余も疾より承知致す去り乍ら未だ時來らざるは是非
もなきことなり汝が頼に依り叔父彌六郎如何にも謙信隠蔽得させるであらう。何とも言は
ず 謙「杯を取らす。塚原小太郎頭を中ば搦げ 小「實に有り難き御言葉夫にて小太郎も最
早や安堵致す敵彈正重國の油断を見透し彼を捕へん事最易し難有き御杯 拜領仕る。と茲
處で一族等皆々挨拶を致す 小「爾れば御追頂戴致し叔父彌六郎を同道致し再び參上仕る
。と起たうした時に謙信 謙「如何に小太郎是なる劍は余が幼少より所持の劍汝に遺す間此
劍にて佐竹彈正を討つて取れ。と傍らに置いた備前兼定の名刀劍先き二尺二寸五分有り難
く小太郎拜領致し御前を下がる謙信遙かる小太郎の下城を見て赤法師西法印に向ひ 謙「西
法印其方塚原小太郎の後より組んで見上早や組んで見い。赤法師西法印は越後に於て底坂

力殊に身の丈は六尺四寸 赤「瘦こけた小太郎を已れが力で組み附いたら兩の手をモイでし
まふだらう併し君命は背し難い 畏り候。と嫌ながら西法印起ち上り十徳の袖を絞り上げ
後より塚原小太郎御前を下る所をヤツと叫んでムソツと組む塚原突然に赤法師西法印に組
み附かれ優然と西法印を引すり乍ら下城をする赤法師西法印ウンと力を入れやるまいと一
つ腰を占めたるに更に更に同せず悠然として小太郎向も西法印を軽るぐぐと引すつて行く謙信
の御前に控へし人々呆れ歸つて如何なれば赤法師西法印程の剛力を安々引すつて行く塚原
小太郎いかなれば怪力かな恐るしき力かなと人々案に相違をして片唾を呑んで見て居る是
れ塚原小太郎が力で西法印を引くに非ず武藝の實を以て西法印を釣つて行く西法印が力を
入れば入れる程軽く身體を釣り出されて仕まう謙信遙かに見て打笑ひ給ひしが…… 謙「西
法印は常には古今の剛力ながら小太郎の爲めに脆くも引かれるは今に見上西法印は投げら
れるは。と言つて見送つて御居出なさるうちに小太郎御前を稍下つたるにより拜領の劍を
傍へにポンと投げエイと一聲叫んで降臨むと見れば西法印がハット呼吸の抜けたる所を腕
首を取つてエイと引いたに依り西法印が滑めるを襟首に手が掛かるとヤツと叫んで投げた
るにヤンモ剛力無双の赤法師三間許りモンドリ打つて投げられる。振り向もせず小太郎は

拜領の御剣を提げて悠然と下城を致す御前の人々只一同に聲を揚げ暫時鳴りも止まず謙信
 聲を上げ賜ひ謙「コリヤ西法印如何致した、西法印呆れ返つて西「ヤ何うもエライ目に出
 逢ひました拙者敷度の戦場を踏めど斯計りの目に出逢つたことがない如何なれば一族小太
 郎は斯かる世に生れたるか恐れ入つてござる。御前の人々塚原の腕前に感んずる謙信鬼小
 島彌太郎と黒鉄上野之介に向ひ謙「コリヤ其方兩人塚原彌六郎を迎ひ旁々至急上州まで同
 道を致すやうに。鬼小島黒鉄の兩人有り難く心得 兩人「不肖の我々兩人に仰せ付らる段一
 族の眷一族の面目……兩人御前を下り是より旅行の用意を致して倍小太郎と諸共に三勇士
 馬に跨り武州八王子を指して乗り出す

講談兩道に分れて武州八王子の代官藤井源蕃下役村山大學と始終彌六郎の在所を尋ね居る
 に全く上州箕輪には居らず武州八王子の神宮伊豆守の許に有ると聞き天の與へる所なり謙
 に召し捕ふと云ふので村山大學組下の家來を七八十人程隨へ八王子の名主仙右衛門を呼び
 出し村「神宮伊豆の許へ案内を致せ。と云ふので神宮伊豆の許へ仙右衛門が案内者で乗り
 込で来る門構へで實に美々しき家頓て村山大學大勢を門外に控へさせ已れ只一人ツカレ
 大道狹しと這入つて來た玄關に掛り村「頼申ふ物申ふ。Vレ……神宮伊豆の家來の荒太

郎と云ふ奴が荒「何處から……玄關へ出乍ら門の外を見ると得物……を持つて大勢控へ
 て居る様子皆は彼奴等來たな荒「何處から村「御取次御苦勞斯く申する拙者は武州高井戸
 の代官藤井源蕃の下役村山大學と申すなり神宮伊豆殿に御面會が致したい荒「暫く御待ら
 なさい……旦那神「何んだ荒「武州高井戸の代官藤井源蕃の下役村山大學と云ふものが
 貴方に逢ひたいと其れも宜うござりますが何うも大勢を引張つて來ましたよ御油斷はなり
 ませぬ伊豆から〜と笑ひ高が知れたる村山大學如きヒロロ〜野郎二三百人で取り詰め
 て來るとも取るに足らぬは。神宮伊豆滑皮の襪を袖に入れ使ひ慣れたる木剣を提げ黒袖の
 五所紋に白小倉の馬乗袴ノツサ〜と玄關を指して出て來た唐紙の敷居へ彼の木刀を隠し
 置き玄關の前戸を開いて敷臺へ兩足を投げ出し箱段へドツカと腰を掛け神宮が村山大
 學と云ふのはお前か拙者が神宮伊豆守だ何んの用があつて遣ひに來た。村山大學大風な奴
 だコイツは何うも何んと云ふ禮義を知らぬ奴だらう。神宮伊豆守の慮見では到底喧嘩にな
 るのだに依り丁寧と言つても粗末と言つても喧嘩になると殊更に丁寧でないから村「神宮
 か神宮伊豆殿か神「如何にも已れが神宮伊豆だ村「已れとは何んだ早速ながら神宮に申す
 が神宮の家に下總鹿島の神職藤田權守事塚原彌六郎が隠居つてあるであらうな何うだ……

神宮伊豆聞いて 神「如何にも拙者方に塚原彌六郎養生を致して居る其れがどうした 村」
 うしたと云ふは失禮だ去ぬる頃佐竹彈正重國に矢先を向けたる不埒もの今般佐竹彈正殿よ
 り相州北條へ頼みに預り依つて八王子の代官藤井源蕃に下知あるに依り拙者受取に向つた
 サア速に塚原彌六郎を我々に御渡しなされ……伊豆聞いて 神「成程然れば各々は上州笑
 輪の上泉伊勢守殿の下知書を持參致して居るか 村「イヤ下知書は持參致さぬ 神「下知書を
 持參致さずば渡せぬ此神宮伊豆は尊師上泉伊勢守秀綱より憐れに預れと師の命重きが故に師
 より致して渡せと云ふ下知書あらば兎も角も他人が我が家に来つて受取らんとは奇怪千万
 イツカナ〜渡すことは相成らぬ……大學之を聞いて 村「渡すことが相成らぬ……ならば
 我々一同役目だに依り踏ん込んで召捕る。神宮伊豆大口開いて頃の外れる計りカラ〜ツ
 と嘲笑ひ 神「代官の村山大學汝大勢を頼みに踏ん込んで召捕るとは身不肖なれども尊師上
 泉伊勢守に學んだ真劍の術汝が我々關に一足たりとも掛けて見よ。目に物見せんと例の
 木劍にリウ〜とシヨキを掛ける村山大學大音を揚げ 村「ヤイ者共踏ん込んで彌六郎を召
 捕れ……と下知の下より大勢の家來心得たりと得物を提げ門内にワツと一同に込み入るに
 心得たりと神宮伊豆守例の木劍をかつ捻つて大勢の真中に飛び込み右手左手ハツタ〜と

叩き倒す手並の程に恐れをなす此時神宮伊豆の家來荒太郎富藏仙助横手の切戸を開いて日
 頃黍飯の二升づも食つて如何な日でも教はつた劍術此時役に立てんと六尺棒三尺棒得物
 〳を提げて躍り出し片つ端から無二無三に打つて掛る高の知れたる村山大學の下役と
 も必死を加へた神宮伊豆守の主従にハツタ〜と追捲られ命カラ〜門前まで一同追ひ出
 される。荒太郎富藏仙助大な口を開いて笑ひ出し様ア見や〜がれ 荒富仙「旦那御目出度う
 ござりました 神「ヤ〜中々貸様達も間がな隙がな熱心で稽古をしたに依り何うも思の外強
 くなつたな〜 荒富仙「有り難うございます日頃どうも旦那様に學んだ武藝が斯ふ言ふ時に
 役に立ちます有り難う存じます宜い氣味だ追ひ歸してやつた 神「是れ荒太郎や 荒「ハイ神
 名主の仙右衛門殿を一寸呼んで来て呉れ。頼て仙右衛門を呼びに往く仙右衛門は大勢が追
 歸されたのを聞いてホク〜喜び 仙「ヘエ先生何御用で 神「早速乍ら貴所に御願みかござ
 る一旦は村山大學を追ひ歸したが再び彼等が向つて来るに相違ない依つて一度我々は笑輪
 へ引き上げるに依りどうか拙者の荷物を尊公の藏へでも御預り下され且つ又道具は封印を
 附けて往きますから 仙「宜う御座います御大切な御道具は私が御預り申します。先生や
 家來が片附け藏へ入れて目盛りをするものは目盛りをし片附けて居るハツタ〜最中玄關口

に △頼申うもの申う 荒ソリヤもう仕返しに来やがつた。と荒太郎が玄關へ出ると深い
 笠を被り玄關の所で笠を取り 客「是は〜荒太郎取次御苦勞神宮殿に宜しく申して呉れど
 言はれて荒太郎が見ると匹田文五郎又た八天狗の戸塚源次淺山三五郎以上三人なれば 荒
 是は〜皆さん能く御出下さりました先づ此方へ〜と案内に隨ひ三人共一間に通り 三
 人「諸神宮氏師匠伊勢守秀綱仰しやるには塚原彌六郎を神宮伊豆に任かして置いたが一人
 では心元ない其方共參つて側に在れと云ふ尊師が命に依つて我々罷り越したので御座る。
 神宮伊豆聞いて 神「夫は〜何うも御一同誠に恐れ入つた今一足逃箇様〜で追つ拂つて
 遣はした。三人聞いて聲を固め 三人「イヤ残念千萬今一足早くんば片つ端から打ち滑して
 呉れたもの併し荷物を片附け如何なる然ば此度は藤井源蕃が大勢で向つて来るであらう
 と存する當地にては少々防ぐことも出来ぬから笑輪表へ引き取らふと云ふので…… 三人「
 御尤も我々も同道致さう。是から妻子を乗り物に入れ塚原彌六郎を乗り物に入れ家來が駕
 を擔ぎ四人の豪傑が駕の廻りを取り捲き武州八王子を出て上州笑輪を指して進む。此方は
 藤井源蕃憎むべき所の神宮伊豆事に由ると彼等は上州笑輪を望んで逃げるかも知れんと三
 百人を六手に分ち六手は青梅口秩父口半王口江戸口八王子口所澤口是へ手配を致し何所へ



掛つて来ても構はないやうに一手が五十人づゝに別れて居るサア来いと六街道へ手配を致し就中藤井源蕃淺山傳八郎は青梅口を固めて居る此青梅口へ神宮伊豆の連中が掛り青梅口に於て鏑を削る戦ひ次第に申し上げます

第 九 席

斯る手配りのあることは少しも知らず乗物を急がせ青梅口へと一同に掛つて来る遙か向に小具足に身を固め鎧長刀を閃かし藤井源蕃の同勢満圓になつて固めて居る四人の人々是を見て扱は最早や手配を致したと見わたり何ん條何程の事やあらんと身構へを致し進んで来るに藤井源蕃陣頭に馬を乗り出し「ヤイ」其所へ来りしは神宮伊豆一家のものと覺わたり武州高井戸の代官藤井源蕃是にあり速かに塚原彌六郎を此方へ差出せ尋常に出せば一命を助ける然からざれば汝等一命無し如何に」と呼びたるに淺山三五郎カラ「と打ち笑い「ホザイたりな藤井源蕃我々目が黒きうちには争で汝等に塚原彌六郎を渡さんや望む所の敵手なりイデヤ来れ」と大刀を引き抜いたりスハヤもの共打ち取れと源蕃が下知四方八方から掛つて来るを援連れ「神宮伊豆戸塚源次福田文五郎淺山に尋いて斬り込んだり藤井源蕃が五十人計り何んの者かは八方に斬り捲るうちに虚空遙かに一發の發煙をうち

上つたりと思へば俄に聞へる遠寄せの太鼓の聲は山谷に響き五ヶ所より青梅口に集る四人の人々此体を見て備は藤井源蕃八方に伏勢を置きたり此上は目釘の續ぐ丈骨の折れん限り根絶しをして呉れんと切つ先鋭く斬り込み来る其時に神宮伊豆大勢に當つて居る然りと雖も源蕃の同勢は三百人もあるに依り早く彌六郎を生捕んと乗り物を微塵に搥ぎ中より彌六郎を引き出し素より身体悪しき彌六郎既に危き所に見へたるに淺山三五郎取つて引き返せるに早七八人にて彌六郎を括くらんとするに「ヤー身性なり己れら淺山三五郎是にあり」と踏み込み來つて左手右手に斬り捲る此淺山三五郎は後に伊賀國に導場を開き淺山一天流と云ふ一派を廣め又匹田文五郎は匹田流と云ふ一派を廣める皆々腕に覺の聲傑ビクとも爲さず淺山三五郎は己れの足の間へ彌六郎を隠蔽近寄る奴をハツタ〜と斬つて居るワ〜と云ふ國の聲然るに越後春日山を離れ夜を日に次いで八王子に引返へして來る塚原小太郎鬼小島彌太郎黒鉄上野之介青梅口へ掛つて來ると聞の聲耳を貫く計り此聞の聲は何んであらふと鬼小島彌太郎馬をユタリ〜と先へ乗り出し進み管一文字の笠を取つて手を掛け立ち上つて見れば「鬼」イヤ〜目覺ましき叩き合ひ成程息はしいね片方は大勢小具足に身を固め相手は僅か素肌者の強さ〜見事なものだ。と鬼小島優然と馬を

乗り出したが「鬼」アイヤ白晝に望んで斬る劍撃の沙汰に及ぶは何事ぞや次第如何に。と大音に呼ばれば神宮伊豆聲を放つて旅人には如何にも氣の毒に候へ共我は上泉伊勢守秀綱の門弟なり塚原彌六郎を箕輪に送らんとす途中に於て北條勢に追つ取り巻かれたり去り乍ら各々暫時御用捨下さる様片つ端より切り盡し其後各々を易々と通し申さん。大層な大言だ四人で三百人を塵殺にして其後に御前方を通すと云ふのだから鬼小島彌太郎之を聞き「儲こそ彌六郎殿の一大事如何にも承知致した義を見てせざるは勇なきなり鬼小島彌太郎御助力申す。と言より早く管一文字の笠に手を掛けヤツと笠を取つたるに紐を解く間がないが笠は飛んだが笠當は残つた馬の太腹草切る計り一鞭アホツて藤井源蕃の三百余人の中へ乗り込むと見へたるが馬蹄に掛けてハツタ〜と踏み倒す戦場萬馬往來なしたる越後無双の鬼小島彌太郎装こそ小さいが戦場を往來の時に三十二貫の鉄の棒を振り込ひ凡そ日本に三十二貫の鉄の棒をふつたものは三人よりなし一人は此鬼小島勝忠今一人は薩摩の家來新納武藏守忠元遠くは和田の三男朝比奈三郎奥州栗谷川にて分捕りに及んだる三十二貫の鐵挺棒之を振つて朝比奈三郎三十三歳の時に當つて合戦鎌倉大手南門の壯門を打破る之は朝比奈門破りと末世末代言ひ傳へる然らば鬼小島彌太郎の目から見れば三百計りの人數

只頼りの目には心得て居る鶏を割くに何んぞ牛刀を用ひんや斯んなものを殺すは太刀の汚れた其馬をアホッて蹴倒し〜割り込んで行く塚原小太郎黒金上野之介の兩人は遠く別れて居るから此事を知らず出で来り塚原小太郎馬上よりキツと見れば我が朋輩の浅山戸塚匹田神宮の四人なり 小一偕てこそ叔父上の一大事なり黒金殿御助力あれ。と小太郎は備前兼正の一刀を引き抜き馬を煽つて駆け抜ければ黒金上野之介も同じく馬を煽つて乗込んだが此黒金上野之介も越後上杉の荒小性の一人無論萬夫不當の勇士だに依り同じく馬を煽つて蹴倒し〜踏ん込んだり期んな野放生も無い途方も無い強い奴が加勢に踏み込んで来たのだに依り蜘蛛の子を散らすが如くに追ひ倒されたり浅山傳八郎遙に見て悪さも悪くさ奴かな目に物見せて呉れんと穂先一尺二寸二間餘の鎧を捻つて馬を煽り彌太郎の正面へ来り 淺「コリヤヤイ己れ最前から味方の人敷を逼る馬楯に掛けて踏み倒す何奴なるか傳八郎の鎧を受けよ。とリウ〜とシエクに鬼小島彌太郎ニツコと笑ひ 鬼「是れ己等如き蒼蠅を相手に爲るに武士の精神を手で惱めるは勿体なし馬の足が相應の奴原だ名前を開きたければ言つて聞かせる冥途の土産に言つて聞かせる吾こそは關東の管領 越三入道 上杉謙信が黒鬼の一人鬼小島彌太郎とは吾れの事だ名前を聞いた計りで震へるだらう何うだ野郎……

淺「野郎とは何んだ己れ如きチンチクリンな奴が鬼小島彌太郎の名前を聞いて驚ろけとは不埒な奴なり何んで驚くべきや。尤も鬼小島彌太郎と云ふ方は身の丈五尺が二分詰つた方だ余人が喋れば鬼小島彌太郎は六尺裕の男に喋れる其鬼小島は甚だ小兵であつて故に敵が侮る傳八郎も全くの鬼小島とは思わんに依り一聲叫んで突つ掛つて来る所をヤツト聲を掛けて鬼小島彌太郎駒を左へ切り開くに鎧は空に流れて二の鎧を突かんとする間に馬を煽つて飛び込み様手綱を締めてマエバに掛けるを前足を上げて傳八郎の乗つた馬の鼻面を彌太郎の馬の蹄で掻き上げた淺山の乗つた馬が高嘶きを爲て總立に爲るを何かは以つて溜るべき傳八郎は眞逆様に落馬した起しも立てず鬼小島馬を煽つて前足を上げたと思へば淺山を蹄に掛けて踏み殺したる其働きは實にや鬼をば附けたりな衆人瞻を冷す計り是れが爲めに散々に藤井源蕃の全勢八方へ逃げ去つたり大將源蕃汗馬に鞭を打ち首を抱へて跡をも見ずに駆け出す後を見送り鬼小島彌太郎 鬼「意氣地の無い奴だ。ヒラリと馬より下つて神宮伊豆戸塚源次淺山三五郎匹田文吾等に對て 鬼「甚だ御無禮を致し御用捨下さるやう斯く申する某は越後の臣鬼小島彌太郎と申する者計らざりさや塚原先生と御同道を致す途中に於いて折能くも出遇ふたり未だ御面談は致さぬが尊師上泉先生に宜しく。四人の者共鬼小

島が働きを見て實に高名の彌太郎強い者だと甚だ威服致し四人も均しく挨拶を致す。借て小太郎は馬から下りて四人に厚く禮を述べ最早此所にて面會を致せし上は叔父君は我々受取り越後春日山に赴きます各々方四人は御面謁あつて尊師伊豆守殿へ右の次第を宜しく御通達を願ひます。四人の人も委細心得てござる。然らば是れにて御別れ申さう時に彌太郎が四人に對ひ彌「何んども各々御無禮ではござるが是れなる馬は各々方に献じます我々仔細あつて春日山へ戻りません乗り古したる駒なれども各々方に献じませう四人も誠に志を無にするでも無い。彌太郎が何か了見あるに依つて馬を呉れたのであらうとそこで四人は三匹の馬を貰ひ上州箕輪を指して行く跡は彌六郎と小太郎上野彌太郎の四人是れから春日山へ急ぐ旅でも無いに依り商人の姿に成つてブテ〜膝栗毛と遣らかさう。それも結好たど云ふので銘々大刀は藁づとに括るんで仕舞ひ是れから短かいの計り誰れが見ても四人ながら商人菅の三途笠を被り吞氣の速中だに由つて急ぐ旅でもないから氣に向けば五里も七里も歩るゝ氣に向かなければ二里で泊まる誠に氣散じの旅。夜を日に次いで春日山を指して来る信州下諏訪まで掛つた。日が夕陽に傾かふと云ふ頃「鬼」何うだい上野此近邊は人家が無いが近所へ行つて百姓家でも寺でも有所勝負借りて来ないか 上「アハ拙者行つ

て来やうのと上野はド〜下の諏訪の原中を急いで四方を見る中向に一軒の寺が見ゆる是れぞ幸ひと足早に來る門等が甚だ腐つて居る如何にも破寺玄關へ掛つて見るに木口等も余程古い 上「古い寺だな本堂杯も大破して居る此處でも野宿するより増した坊主の一匹や二匹は居るだらふ御願ひ申します〜 若僧「ド〜出て來た僧は十七八色の淺黒い目のギョロリとした若僧其れへ出まして 若僧「何處から御出でございます 上「私は旅商人でございませすが雪降で難澁を致ます四人きりでございませすが一夜の御宿を願ひたいものであります如何なるものでありませう 若僧「ハ、ア左様でございませうか夫れは御困りでございませう一寸住寺に伺つて見ませう……暫く有つて例の若僧出て來て 若僧「夫れは御困りでありませうから御宿致たせと云ふ事ヤア〜皆さんを御同伴なさるやう 上「夫れは〜有難う存じます唯今仲間を連れて参りますから……聽て其寺を出て歸つて來た 上「彌太郎有つたよ 彌「有つたか上野百姓家か 上「百姓家ぢわない大破した寺がある 彌「寺でも構はんよ 上「油断の出來ぬ寺取次に出た坊主の面魂が變だせ。と彌太郎聞いて 彌「盜賊坊主たらふが海賊坊主たらふが然んな事は構はない盜棒なら盜棒の様に泊つてグメ〜言へば叫び殺して仕舞ふ春日山へ歸る旅金に爲るから其方が宜からふ盜り溜めた金を取つてやる方

が「上」夫れも然うた結構く、呑氣の奴の鉢合せで盜賊如きに驚く者ではないから四人連れで例の御寺へ這入つて来た。若僧「サア皆さん御洗足を……足を洗つて案内に連れて来る本堂は大破して居るが座敷は奇麗だ。住持「何も誠に進げるものもございませぬ御風呂などはございませぬから……四人「何う致しまして風呂の御厄介に迄為りましては済みませぬ。聽て例の若僧御膳をそれへ持つて参る精進物の御馳走御懐中から用意の珊瑚珠を取出し器の蓋を取つて駭して見たが大丈夫だ。珊瑚は毒に變せば目の前に碎れて仕舞ふ毒を見るには珊瑚が一番。其用意をして居る。彌「サア大丈夫召上れ。と皆々御膳を食べて枕に就き。皆々「何れ明日御禮を致さふ枕に付いて仕舞つた。奥の一間に。住持「何う爲た旅商人は皆んな寝たか。若僧「頭領皆んな寝た。頭「久し振りで大勢を、今に皆んな歸つて来るならん有難てい。大安座を褥の上に掻きスツクリ太つた下の諏訪の原の一軒寺最勝寺の住職香海坊主今に乾兒が歸つて来ると待つて居る所へ程なく青坊主共「歸つて来た。小賊「頭領今歸つて来ました。香「ヨ。權九郎か御苦勞く何うした。權「何に此節は何うも盜賊も開まで遣り切れねへ丁度今仕事も無しするから野郎共を連れて歸らふと思ふ所へ頭領甘い仕事引掛つたよ下の諏訪の原中で乳香子を抱いた女に稍々六十に垂んくた親爺

三十五六に成らふと云ふ野郎懐中が暖かさふだと草叢へ忍んで様子を見て居ると世の中には頭領の前だが酷い奴が有るものだ盜賊が驚く程の酷い奴が有るせ其老爺が癪を起したのを婦人さんが可哀想だと云ふので薬を出して中間に是れを飲まして遣れと言つたら承知爲たと云ふので中間が老爺の口を開け薬を注ぎ込む真似をして突然口の中へ小刀を突つ込みやがつたたらふじあ無いかそれから「ヨ。老爺をダンヘラを引き抜いて土手腹をえぐり突然懐中へ手を入れ紙入を取り己が懐中へ隠し込み其女に對つてサア山口源太夫を斯ふして仕舞へば此方の者は是れから己れの言ふ事を聞けと言つて其婦人を強淫を爲やうとしやがつた酷へ奴だと思ふから己れはズドン一發討つた奴が其野郎の胸板を打ち抜いて夫れから飛び出して私は此近邊の獵師でございませぬが家來の死んだのは仕方がない諦め爲ない此先きに最勝寺と云ふ寺があるから今夜丈の御宿を私が頼んで上げやうと深切かかしに連れて来て今一番奥の座敷へ置いて来ましたよ。ア二百兩の金も明日の朝モ一皆んな親分御前さんの物だ。香海之を聞き。香「宜い時には宜いものだ家へも四羽の鴨が掛つて居らむ權「何んだい。香「先づ生の商人だらふ懐中の暖つたかさうな奴計りモ一ソロく寝た時分。權九郎御前達も締めて仕舞つて呉れ四羽の鴨を締めたら少くなくも六七百兩あるたらふせ。

權「此奴は宜い強突な仕事じやあねいか己等も運が宜くなるも斯ふ云ふものだ已れが手練の鉄砲さへあれば造作はない。と香海の一番の手下の權九郎が言へば「併し皆人切庵丁を持つて居るから油断を爲るな。權「承知した。と權九郎は簀子を掛けて欄間に上がりシマツタ爲ればズドンと一發だと構へて居る四方へ別れて寢て居る床の間の前に黒金上野障子の根形に鬼小島彌太郎唐紙の根形に塚原小太郎彌六郎を真中に皆々燈を消して目を開けて寢て居ると塚原小太郎の鼻にフット匂つたり小太郎仰いて見ると火細が見へる如何なる緊傑でも飛道具には敵はぬから小柄を引き抜きヤット一喝叫んで打つたるに權九郎の左の目を討つたるよりワット云ふ聲諸共に真逆様に落つこつた小賊共は權九郎の落つこつたとは氣も付かず夫れ占めると抜き連れ〜飛び込んで来る奴を得たりや〜と飛び起き様當るを幸ひバツタ〜と切り倒す中にも香海鎗を追つ取り覺悟と爲ると飛び出す途端に鬼小島彌太郎「何を丁巨細な乞食坊主覺悟を爲よ。と飛び掛かりニツに爲れと切り付ける付入つて香海坊主の利腕ハッシと捻じ上げたが右に固めた拳は左ながら鉄槌の如くヤット香海の頭を健かに打てば目玉が飛び出し腦は碎けて死しにける此鬼小島彌太郎の大力を以つて宙にぶら下げニツリ〜 鬼「思ひの外脆い坊主だ。頗る所の彌太郎に張り付けられたら

何んな岩壁でも崩けて仕舞ふそこで此寺は火を付けて焼ひて仕舞ひ其上例の盗り溜めた金を持つて往つて途中で貧棒人に施して呉れん此寺を殘して置くど又盜棒の巢を置くやうなものだ焼いて仕舞へど奥の一間に皆々乗り込んで来る一番奥の座敷へ來ると行燈の前にシヨンボリと小供を抱いて座つて居る女黒金上野キツト見て「是りや〜貴様は賊の香海坊主の妻か何者だ。と聲を掛けたるに振り返へる。小太郎後に附いて進み來て燈明の光にキツト見て「小〜御叔母上にては御座さすや。彼の女頭を上げ 女「御身は小太郎では無いか 小「叔母上であつたか……是れは我が叔父彌六郎殿の妻だ……扱ては宜い所にて彌六郎殿の御家内に面會を致した併し如何致して此處に御出なさる。彌六郎是れへ出て來て大に驚ろき 彌「如何に致して其方は是れに來た。女は涙を流して 女「妾共は豫て御殿を頂戴致し奥州木津連川の在勝巻百姓甚右衛門の許へ趣き隠んで居ります其中に塚原彌六郎を笠間の松街道に於いて磔に爲ると云ふ噂若黨。山口源太夫と共に安谷を開かんと云ふので奥州を出て參る信州諏訪の原中に於て山口源太夫癪を起し苦しむを見兼ね妾が薬を遣りまし

たが仲間間の幸藏が欲心を起し源太夫を殺ろし妾に對し無体の戀慕危き所を獵人が鉄砲で幸藏を殺ろして呉れまして此寺が知已だと云ふので此寺へ連れられて參りました明日よりは

御香を掛へ女一人如何はせんと思案に暮れて居りました不計御面に掛るは神の引合せ。と涙ながらに話す此物語を聞いて四人は不憫な事を爲たのは山口源太夫悪むべき奴は仲間幸藏併し我々が對面致せば最早御安心あれ御同道致して越後春日山に赴き御安泰に計らふであらふ是れから香海の盗り溜めた金を集め此最勝寺へ火を放つて黒金上野之介鬼小島彌太郎塚原小太郎塚原彌六郎并に妻の五人信州諏訪を出で越後の國春日山へ立ち還へる御後席に譲ります

第十 席

一 信州下諏訪の破寺を放れ塚原小太郎黒金上野之介に鬼小島彌太郎伯父の彌六郎等皆一同揃つて越後の國春日山に立戻り謙信の臣平賀志摩頭の元へ當着し彌太郎上野亮南人の謙信公の御前へ出まして御届を致し小太郎伯父甥の始めて謙信公の御機嫌を伺ひました扱平賀志摩守の元に止まつて居りますと日々春日山の若侍士塚原小太郎を褒め賞して 甲「實に腕前と云ひ流石の五萬石の若殿であるに依つて御見事の者だ。見識と云ひ腕前と云ひ行状と云ひ總べて天晴な者だと云ふて寄ると際る如に大勢の若侍が褒め込んで居る 若「御一同我々も彼人と交りを結ぶとわ身に取れ何ん共心欣しいと申す者でわ御座らんか夫れに

引替へ塚原一家の者盡くに欣んで居ります或日の事若侍大勢集つて相も變らず矢張り塚原先生お通な者だと褒めて居る所へ謙信公の姉婿長尾越前守政景の弟長尾次郎重時大手を振り大道を狭しと登城に及ぶ大勢集つて頻に塚原を褒めて居る 長「イヤ各々方相變らず塚原を褒めさしやるな……若「是れわく長尾氏只今御登城に御坐りますか 長「去れば各々方お寄ると障ると塚原を褒めさつしやるが高の知れたる野中の働きすわ戦場の役に立つ者じや無い彼塚原如きの者お褒めて何んの役に立つ者か夫より謙信公の家來を褒めたら宜からう塚原如き者お褒めるに及ばん。大勢聞いて居たが三本松庄造進み出 庄「夫りや長尾次郎氏不可春日山の家來が謙信公の家來を褒めれば他國に知れて越後の家來の味方敵負を致し實に取るに足らん者彼お主人の教育が悪い御主君謙信公が嘲けられる我々お他國の塚原先生を褒める他國の人だから悪いと言ふ成れば夫れも宜ひ褒めべき方だから褒める褒めて悪るいものを褒めやしない褒める人を褒めるだから宜い障りがない尊公は悪く云ふ所もあろうが夫れは御勝手我々も勝手に付いて褒めて居るのだ 長「乃公は塚原小太郎は嫌いだ 庄「長尾何にも尊公が嫌いなれば嫌いで宜い悪く云ふには及んエ……嫌いな物を褒める」と云わんから貶すにも及ん又向ふの塚原先生も尊公を嫌いだから夫れで結構だと話を爲て

居る所へ塚原小太郎下城して来た。塚「是れは〜若武士方。若武「イヤ〜。塚原先生只今御下城で御座いますか。と皆一同に挨拶をする。其儘小太郎は皆々と挨拶を済して往ふと云ふのを長尾次郎。長「是れは〜小太郎貴様は神影流の劍術が出来る由春日山若武士の評判だが我は長尾越前守の一門長尾次郎と申者だが太平のノラクヲ劍術は實は知らない戰場万馬往來に及んで瀾く敵の仲を鎧を捻つて働いた者だ乃公の槍術は太平に學んだ劍術と戦所に學んだ槍と仕合ひを致さう。と言ふのを塚原先生心中に斯んな馬鹿野郎に相手に成つて何んの益の有る者でわ無い俗に唱へる馬鹿に附ける薬りが無いと云ふ事を申しますから下手に往つて。塚「何う致して天下に高名の長尾次郎殿拙者杯の遠く及ぶ所で無い平に御免を蒙りたい。…然らば各々お暇致すで御座らう。長「是れ〜御免蒙るに及ん尋常の勝負をするから平に御免杯とわ。…塚原先生面倒臭ひに依つてツウツト下つて行く跡を見送つて長尾次郎大口開いてカラ〜と笑ひ。長「何うたい各々取るに足らざる塚原小太郎乃公が勝負を仕様と言ふなら青く成つて震へて逃げて往つたが彼様な弱虫輩役に云の者じや無い片腹痛き事じやと誇満をヒョツカして長尾次郎が居ると若侍士は手を叩ひて。若「成る程塚原先生は豪氣者だ長尾は實に恐れ入つた者だ。長「豪氣からう。庄「長尾何も貴様が豪ひ

と云ふのでは無い塚原先生が豪いと云ふのだ。…お年齢は若い馬鹿を相手にした所が仕様が無いと思つて黙つて御下城を成さつたは豪い者だ。…長「何んだと馬鹿を相手に仕た所が役に立たんとは成んだ。…庄「長尾次郎重時は何日馬鹿だと言つたイヤサア。…お前の事を何日己が馬鹿と言つた馬鹿を相手に仕様が無いと言ふたが此庄造は長尾次郎重時を指して馬鹿と言ふたのでは無い。…馬鹿を相手にした所が仕方が無いとは云ふたが貴様は長尾次郎重時と云ふ名が有のだ長尾馬鹿野郎と云ふたのでは無い全體貴様杯は何んど言ふと御一族を鼻に掛け威張るが我々は越前守に面して一目置くのじや。…春日山の同勢は謙信公に目出て一目も二目も置くのだ且又汝長尾の姓を名乗り越前守政景の威公を借りて無二無三に威張り廻る已等の如きヒョロ〜武士戰場萬場往來したとは大言にも程の有る者片腹ら痛い然し戰場萬場を往來した其槍先で勝負が仕度ば塚原先生は汝等如き者を相手にする氣付いは無いに依つて強つて勝負仕度ば斯く申す三本松庄造相手に成らん庭へ出る。…汝等如きのヒョロ〜野郎相手に爲すに刀劍は不用イザ勝負をして遣らんと三本松庄造癪を堅めて力み廻つて居りますと廻りに居た山村右京之介忠久、山吉玄蕃亮皆一同集つて。右「尤も千萬だ三本松我々の一族塚原先生を長尾如きの野郎何んの意恨有つて悪口を

言ふたか不埒の奴グオ〜仕たら攫み殺して仕舞へどワアツ〜と言ふので大勢に扇り附
 けられたる長尾次郎心中に思へらく今此所で争へば大勢の事故と劔のめを食つて其儘座を
 オット立つて謙信公に御伺ひをも爲さずに下城をして仕舞つた若侍士共跡を見送つて 若
 世の中に彼の様な馬鹿野郎と云ふ者は有る譯の者じや無い仕様の無い馬鹿野郎。と言ふと
 夫れが春日山陣中の評判に成る若侍士一撥の評判或朝の事若侍士共打寄りて 甲「お早ふ…
 …乙「是はお早ふ御座います 甲「何ふたい長尾次郎重時の野郎塚原先生に立合ふ杯と云は
 世の中に蛙の頬被り蜻蛉の鉢巻で向ふの見へ無い奴丈怒ろしいなあ 乙「小太郎先生御立合
 ひ有るまいがな 甲「お立合有る者か先生拙者に 仰つたが彼んな者は負かす事は最も容易
 ひが夫では謙信公に對いして申譯無いから格別の慈悲を以其儘に置くのだと云ふ事じや然
 うじや 乙「すると云ふと先生は紫い者だな彼んな者お勝負をして負かすに及んぬ咳をす
 れば久能山の頂さ迄吹き飛ばして仕舞ふと仰つたが何うも大層な者だ〜。と寄ると際る
 と拳螺が七分で實地は三分で長尾次郎の事を悪し様に罵晋しるので長尾次郎重時の耳へガ
 ン〜是が這入るにより 長「悪い奴は塚原小太郎彼面上向つて何んとも言ふ事出来ない故
 に若侍士に悪口を被爲悪い奴出會ひ次第打つて斬つて遣らう。と馬鹿野郎無中に相成りサ

ア来いと言ふので狙つて居た内或一日塚原先生下城してお出被爲て春日山の方に御出に成
 らうとして升方の所へ参りますと仁王の如くに直立ちて 長「ヤア小太郎能くも汝は某の事
 を悪口をしたなあ長尾次郎重時は汝等如きの嘘咳で久能山の頂さに飛ばせる者なら飛ばし
 て見る不埒の奴だと云ふのを塚原先生聞いて心中に驚いて詰ら無い事を焼き付ける者だ丸
 で枯葉に油を注いで火を付ける様な者だ 塚「我等は決して左様な事を申した覺へ無い夫や
 尊公の聞違ひで有らう 長「イヤ〜汝如何に陳するとも用捨は成らん覺悟をしる。と長尾
 次郎大刀を引き抜き右より斬つて掛るからヒラリと左りへ體を交すと又もや切り込んで來
 るのを右へ體を交すと目つた斬りに斬り込んで來るを潜り〜千變萬化天下無双の早業は
 次郎如きの不束者じや無い夫に小太郎は短氣者ですから悪い野郎斬つて仕舞ふのは容易ひ
 が謙信公に對して濟んに依つて胸打ちを呉らして目を廻してユリ〜爲せて遣やうと思ふ
 から 塚「次郎不禮にも法圖が有る其所動くな。と柄に手を掛けキヤリと抜きしは謙信公に
 拜領したる備前兼定の名刀胸を返して長尾次郎の斬り込んで來た一刀を左りへ受流して置
 き乍らヤット云ふて野覆を打つた塚原先生胸を返して頭を叩いて目でも廻わさせる積りが
 向ふに堪へが無いから夫れに刀に七分の目方が有るからエイと討つた奴が何日途中でグル

りと返いつたか流石の小太郎も気が着かずに胸で討つたと思つたのが長尾次郎の脳天から
ザツクリ鼻柱迄割り着けたからアツと塚原先生驚いて「南無三遣り損じた。と言ひ乍ら
血を拭ふて慌しく馳け出した門番見て居たが「長尾次郎が余りと言へば乱棒は何うだ
同役長尾次郎と云ふ人は乱棒だ塚原先生は早業な者だアア蒙ひ者でアア受流した……
ウン。と言ふて感心して居る内に長尾次郎脳天から鼻柱ら迄真二つに成つたから「ヤア
……長尾次郎遣られたぞ。去り乍ら黙つて居ると長尾越前守に跡でお灸を据へられる者で
すから門番は突然り飛び出し「只今長尾次郎を塚原先生が打ち取つた……打ち取つたど
云ふ聲を聞いて過ぐに長尾の屋敷に注進をする者が有ると長尾の一門は刀剣くを
つ取つて追ひ掛け来る小太郎大勢を驚くのでは無いが罪無き者を殺すは益無き事と思ふか
らドンく逃げるすると大勢の者は「大ソソ……逃がすな打ち取つて仕舞へと云ふ小太郎
如何せんと思ふ折りから折り能く通り掛つたのは上杉四天王の一人直江山城守兼繼後らに
此方は出羽の國米澤で卅二萬石を頂戴し上杉の四天王と言はれた人で今年若しと雖も上杉
四老臣の一人直江山城守が威儀嚴然として遣つて来るのを見て「甚だ量外乍ら塚原小
太郎御願ひが御座る只今長尾次郎重時悪口を申せしに依り懲さんと思ひし所誤つて打つ

た斬たので御座る委しい事は跡にて申上げますに依つて暫時の間御同勢の内を拜借したい
山城守乗り物の内から顔を出し「山」是はく塚原先生何に長尾次郎を斬つた……長尾次郎重
時如きの者何んでも御座らん先づく「某の同勢の内に御這入り被爲と言ふて同勢を開かせ
て入れる所へ大勢ドンく乗り込んで来たが山城の同勢の内に這入つたから大音を揚げ一
同「ヤアく夫へ御通行は直江山城殿と御見受け申す。只今我が主人の長尾次郎重時を打ち
取りし塚原が尊公の御同勢の中へ這入つたり何卒是へ御出し被下様に願ふ。と言ふのを山
城守戸を開け顔を出したが「山」義に依つて直江山城兼繼塚原先生を同勢の内に匿つた塚原
を受取り度ば山城の屋敷へ速に受取りに參れ途中參途で受取らうとは無益の事で有る夫れ
やれと云ふので乗物を遣つて仕舞つた「若年の分際で四天王の一人とは言ひながら生意
氣な奴だど大勢の若侍士口々に罵りながら立歸り一統の者越前守に此事を申上ますと長尾
越前守之を聞いてブツく怒り「速かに誰ぞ山城へ對して掛合つて參れと云ふので長
尾越前守の家來殿木大太郎と云ふ者が使者として山城守の屋敷に乗込んで參り玄關へ掛つ
て「頼む……頼む 男「ドレ……是はく「藤氏御苦勞千萬何御用に御座ります「早
速乍ら主人長尾越前守使者として申上げます今日長尾次郎重時を打ち取つたる塚原小太郎

を御主人山城殿義に依て御匿ひなされたる敵夫を御渡し被下様山城殿へ斷判として参つた
と云ふ事を御傳へ被下 男「暫く御待ち被下。と云ふて奥へ這入つて山城守に右の次第を申
上げます。山「何んだ 男「只今長尾越前殿から 藤 大太郎が使者に参りユレユレで塚原先生
を渡して呉れとユウ申しました山城開いてにユレユレと笑みたまひ 山「フーン山城は御氣の
毒だが塚原先生を渡さないと斯う申して追ひ返へせ 男「で御座いますか夫で宜しいのです
か 山「夫れで宜しい是から玄關へ遣つて来て 男「さて藤木氏御待違ふ主人が言ふには越前
守殿の御狀は聞いたフーンと被仰つて御氣の毒だが御渡し申すことは出来ない斯う被仰つ
た 藤「なんと御主人が被仰つた 男「主人が申すにはフーン斯う被仰つて御氣の毒だが御渡
し申すことが出来ない 藤「然らば後刻推参致すと申して越前守の屋敷へ立ち戻り越前守に
此旨を告げる長尾越前之れを聞いて 越「不埒の奴は直江山城……大太郎汝今一度参つて愈
々直江山城が塚原小太郎を渡さんに於ては鎗先を以て請取ると申して参れと云ふので又候
大太郎直江山城守の玄關へ掛り 藤「頼む…… 男「是はユレユレ御苦勞千萬只今立戻つて主人に
申告げし所主人の申すには彌々御渡しなければ武士の意地鎗先を以て受取がどうだ 男「暫
らく御待ちなさつて……飛込んで奥へ参り山城守に告げる之を聞いて 山「イヤユレ我しが

出て申すからと大刀を提げ 山「藤氏熊々御苦勞ユレユレ長尾越前御一門を鼻に懸け塚原先生を
請取ふなどは片腹痛へ如何にも鎗先を以て請取ふと被仰るなれば山城は山城の瘦腕丈に
鎗先を以て御渡し申こと出来んから立歸つて告げしやつしやい其意氣込四方を拂ふ有様藤木
震へ上つて横ッ飛びに越前守の屋敷を指して歸り之を主人に告げると越前守 越「それ乗込
んで山城を撃て……倍て春日山殿中の騒動一方ならざる様子で御座います之れを青鬼黒鬼
の連中が聞いて得物ユレユレを携へて越前の一族を防ぎて呉んと馬に打乗り赤鬼黒鬼は銘々甲
冑に身を堅め直江山城の手を借に及ばんと出て來たるは赤鬼の方は山村左京之介忠久赤坊
師四法印三本松庄三等黒鬼の方は黒金上野之介を始め山吉源蕃の助弟 山吉小次郎等屈竟
の豪傑皆集つて左右に分れ山城守の門前に馬を并べ 赤「イヤ各大きに御苦勞 黒「是はユレ
赤鬼連御苦勞 赤「黒鬼連御苦勞。と銘々待構いて居る 三「時に鬼小島は何うした最う來とう
な者だ 山「然うさなあと云ふ處へ鬼小島彌太郎悠然と馬に打乗り來つて 鬼「各御苦勞河中
島の戦が久敷沙汰休みで腕が呻つて堪らんから斯の如くして長尾主膳を懲しめて我君の御
心を安く参らせるのだサ一來いと云ふので皆一同に山城守の表門の處に集つて居る此を長
尾越前守の方で聞いて奴等に向はれては夫れでは叶はん然しながら今と爲つて人敷を止め

る事も出来ないう戦はなければ成んど云ふてゐる家來も少し霞い上つて到底もこの鬼神連に見付つては堪らんと云ふて居る夫れに引替へ山城の守の勢は去年ら破竹の如くに爲つて左の來いと待つて居る春日山の大騒動一方ならず大層な有様で御座いました此時に此事が謙信の御耳に這入つて御心痛を爲されて居りました片方は四老臣の一人、片方は姉婿に依つて如何せんと爲る折から越後の大軍師宇佐美駿河守貞行は謙信公の御前に出で御許しを得て双方を説諭して一枚の席を巻くが如くに取鏡め塚原先生は武藏へ逃げ延ると云ふ御物語り次回に……

第十一席

儲て申上げます越後の國劍客の大先生宇佐美駿河守貞行此御方は越後武士の大忠臣後に天下に於て三忠臣と云はれ後謙信の姉婿長尾越前守政景主家を横領致さうと云ふ企てしたに依つて駿河守貞行辨天谷野尻の邊りに雪見と名付け船へ長尾越前の守政景を引出し共に水の藻屑に相成り越後の國を安穩に治めたる所の大忠臣然れば國々の者は皆宇佐美駿河の忠義を思はん者はない御舍弟を民部と云ふて此方が後に兄の菩提の爲め高野山に登り剃髮して僧侶となりました然るに眞田左衛門幸村紀伊の九度山に退陣して居りました此時宇佐

美民部と云ふ方は龍圓備へ立の軍法を學び眞田幸村關東陣を破つたのは宇佐美民部より傳達の龍圓の備いを受けたからで御座います御兄弟ながら越後に於て劍客の大先生然れば越後春日山の大騒動長尾越前守と四老臣の一人直江山城守との間は双方へも何うも團扇を上げる譯には不可せんから其の日御前に出て宇佐美駿河守貞行身不肖なれども此事は駿河に御任せ下されば能き様に取計うで御座らうから此處で駿河守馬に打跨つて直江山城守の門前へ参ります。と大勢の者は一同夫れへ集つて居りましたが宇佐美が來るのを見て 若一夫りや軍師が來た宇佐美氏が御出と皆々馬より下つて 武士「是れはく軍師には何用で此れへ御見へに成りましたか 宇「各々方何うも困るじやないか越前守を相手として然う事を好んでは不可んじやないか 鬼「是れは軍師……某等事を好まん事は好んが一族の不禮を致したにより勘辨ならんから我々事を起した譯だ 宇「然し止まつて貰いたいなと申して夫れより山城守に面會致し 宇「儲て直江氏貴殿の御立服は御尤も長尾越前殿の我意我儘行ふ處一ツとして我々を蔑すみ御止め申處では無いが主君謙信公にも事の外御心痛在らせらるゝ事故私に免じて御止まり下さる長尾越前殿の方へ對しては某能き様に取計ふで御座らうから。と云ふので山城守涙を流して 山「誠に軍師辱ないが余りと云へば越前我意に募つ

傍若無人の有様悪むべき者だによつて彼れを打取つて我君の御心を休めんと思ふので此迄は姉御だと思ふて一目も二目も置ば附上つて今日來の有様悪むべき奴故斯くの次第 宇一何事にも構はず某に御任せあれ 直「尊公に御任せ申すに依つて宜敷様に御依頼申すと互に相談が極り先づ黒鬼赤鬼連中を引取らせ長尾越前の守の屋敷へ参りまして越前守に面會して 宇「尊公の御服立は如何にも御尤も然は去りながら只今山城守の方は談判に及びましたに依つて塚原小太郎は首に致して御覽に入れ様程に夫で何うぞ御勘辨を願ひ度い」と言ふのを長尾越前守聞いて 長「何う斯うと申すわけは御座らん誠に軍師には相濟んが斯く計り手敷を掛けた不埒の奴は山城なり然し塚原小太郎を首に致して見せると成れば夫で勘辨を遣す」と申しますから宇佐美は再び山城の屋敷へ歸つて何うしても罪科に行は無ければ成らん囚人を出して首を刎ね此奴の面部の皮を剣いで山城守が家來に持たせ宇佐美が附いて長尾越前の元に乗り返りました跡で山城守は 山「ア……斯様にして面部の所々を反剣ぎにして置く以上は越前守政景は塚原の顔色は知らんから無事に行に違ひ無い」と獨り事を言はれて居ります話替つて宇佐美越前守に首を實験に入れる 宇「御約定通り塚原小太郎が首打つて持参 仕りました 長「誠に宇佐美氏辱しけ無い尊公の御盛力何共御禮の申

様は御座らんと是から越前守首を實験して 越「悪みても尙は餘り有る塚原小太郎能くも我等一門を辱しめたるぞと首びを揚げて其首を脱轉がしましたが先づ是れで浪風無しに騒動も宇佐美の盡力で治まりましたが謙信公は塚原を春日山に置きたいと思召すが他國に出づれば且は敵を打つに辨なるに依つて或夜徹かに御謁見に相成り 謙「扱小太郎其方等伯父甥は手元に長く世話を致す心得成るが此度の騒動に依つて止むを得ぬから其方に暇を借させるに依り一度春日山を發足して呉れ伯父甥六の身の上は謙信確しかに預かり置くから敵さ佐竹彈正を討つ時は必ず伯父甥六の所へ通知をせよ」と言はれましたから小太郎涙を流がして 小「有り難き君命伯父の身の上頼み参らせなば何んを恐る可き事の候はんや是より佐竹彈正の様子を伺ひ速かに父の敵さ佐竹彈正を討つ可き手配りに掛ります永々の間御厚禮有り難ふ存じます」と御厚禮を陳べ。小太郎御前を退がらうとすると謙信公小太郎に百兩の旅費を下し置かれましたが永餘年間の百兩は今の千圓余の使ひ出が有ます……小太郎は旅び仕度をして國界以迄三本松兄弟鬼小島黒金等春日山屈強の者に警護をされ平賀志摩頭に暇を告げ伯父の彌六郎に別れを告げ 小「伯父上決して御心配無く河内其内には佐竹彈正を引取へ討ち端し申すに依つて御氣遣ひ有るなど暗夜にまぎれて越後の國頸城郡春日山を

跡にして國界ひにて大勢に別れる。小「何分皆々此跡共に伯父の身の上をお頼み申す……皆々御無事に御親切辱けな。一同「御氣遣ひ有るな塚原先生……日出度御父の當の敵き佐竹彈正を討ち取つて塚原の家名を立てる様に互に袂を別つて塚原小太郎は夜々の泊りくの日を重ね都を望んで爰に武藏の國豊島郡小石川村の豪家島村九太夫と云ふ者が有つて此島村九太夫が娘め三枝は塚原小太郎の兄の帯刀殿の奥方で其三枝殿は敢へ無くも夫故に城内に火を放つて遂に御最期を爲すつたので然らば塚原先生の兄帯刀の妻三枝の親家の事に依つて武藏の國小石川村を心掛けて御出に相成り段々聞き乍らに小石川村を差して御出に成りました御存知様でも入らつしやいましてよが永祿の年間は今時の東京と違ひ小石川と申しても開けては居りませんで所々に家が有る呉らしいの者で天正十八年八月一日此の武藏の國千代田の城に御入城の頃追ひ迄は四里四方は原野だと云ふので有ます然れば永祿の古へ成るに依つて家何んぞは左様に澤山は有はしませんから小石川村へ乗り込んで参られました尋ねると豪家成れば立派な門構ひで御座います玄關へ係つて案内を乞ひますと下男體の者が出て参りまして「下「何れから御出に御座います。小「我等は常陸の國塚原表より参つた者で島村九太夫殿に御面會申して姓名を申し上げんから宜しく御取次を頼む。下男は怪

訝の面體をして奥へ這入り。下「小旦那御前へ様から見るとハ一然うさな一三つか四ツ上たんべ常陸の塚原から來たらゆんだが侍士いで何んでもハ一面會つてから名前を言ふべらゆんだがらよつくら會つたら宜かんべ。と言ふので夫から九太夫の伴小才治玄關へ出ると塚原小太郎が立つて居る。小才治「コレハ〜何うも塚原先生能く御尋ね被下つた……コレは御洗足を持つて参いれと申しますと是より洗足を持つて参いる小太郎足を洗つて奥へ來たりて母の松枝に面會を致す。塚「三枝殿にも御氣の毒亦塚原の家名斷絶して未だ敵き佐竹彈正を討つべき場合も無く仔細あつて東國を指して参りましたが九太夫殿には相變らず御盛んで御座るやと塚原先生御尋ね被成と松枝殿涙を流して。松「夫九太夫は敢無くも世を去りまして御座います。塚「偕は九太夫殿御病死被成つたか夫は殘念千萬併し何が御病根で。松「病死では御座りません其譯は。と九太夫の妻松枝は塚原に夫の最期の話をした何ふ云ふ譯と申すと島村九太夫と云ふ方は事の外殺生が御好で何んにも外に臘道具は御持ちには成りませずたい弓矢を持つて九塚山へ往つて兎は御座れ狐は御座れ何んでも見當り次第に獵り取られましたりするの夫は何より嬉しいので有ました然るに永祿元年の十一月廿六日小荒井の彌助を連れて九塚山へ出られ兎一匹射つて落し夫を松の木に掛けて。九「彌助や何う

も宜い得物を目付けないが是れから狐の一匹も討ち取つて遣りたい者だ 彌「左様で御座いますすなわと是から腰に提げたる瓢箪を取り出し水香でガブリ／＼飲んで居る竹の皮に包んだる糞染を出し味然うに是をムシヤリ／＼と口に入れて居る途炭に突然に風がドット吹き落して来たつて大分眼の中へ砂を吹き込んで来ると彌助はワツと驚いて大地に打つ倒れる島村九太夫グイと體を引き向つて居ると松の木の間から眼こぎら／＼として身の丈け五六尺計りにして尾の先き二つに別れて居つて眞黒の猫松ヶ枝に吊したる兎へ手を掛けて攫つて往かふとするから島村九太夫南無三寶と身に帯びたる所の大刀を抜くより早く斯段の猫の腦上より眞二ツに成れと切り着ける兎を攫ふと思つて立ち上つたから直ぐ様に斬つて係つたる事故怪猫背骨に斬り込まれたから一聲キヤツと號び乍ら九太夫に向つて来て掻くから九太夫心得たりと體を交はしたる途炭に腹の當りへズアリと突き込ひから怪猫は其所に倒れるすると九太夫は腮から耳の當りを引烈かれたか尙ほも猫の前足を攫へて咽の所を亦一とゑぐりやると九太夫も今迄は氣の張りでも以圖つて居つたけれども何うやら斯うやら討ち取りましたから遣れました者と見へて其所へ九太夫も倒れるから彌助驚くの驚かないのでは有ません 彌「旦那恐いし事を被成鬼を見たいな方たで御座いますすなわ……何

んだか大きな猫じやなわイヤ何うも恐ろしい猫だ……旦那さん汝さん其んな體で歸られは仕ません私が背負て往させせうと夫れから彌助は九太夫を背負つて創口には風の道入らん様に手拭やら衣物杯の袖を引烈きて押へ漸く家へ立ち返へる 彌「ヤア／＼……コレ奥様若旦那大變が持上つたと怒鳴り乍ら玄關へ係る奥にては男が大聲で怒鳴つて這入るから家内の者が飛び出て見ると旦那の怪我我夫れ醫者上薬りと大騒ぎをして看護をいたしましたけれども何分猫の爪の毒が身體に廻はりしました事故敢無くも其夜の九時頃追ひに世を去つて仕舞ひ被成れたので家内中の力落し如何計りで御座いますし然し泣いて見た所が九太夫の此世に返られる者でも有りませんから止を得ず野邊の送りを濟した夫れから日の立つのも早い者で初七日に相成りましたから佛參を仕勿ければ成らんと菩提所澁谷の正光寺へ母の松枝は御子息と老母、年七十二才を厭はり下男諸共四人で正光寺へ參詣して是れから御住寺と四方山の話をして家へ立戻る途中に迄来ると大分急に風が吹いて来れと思つて居ると旋風で一步も進む事が出来ませんに依つて御新造始め四人の者は驚くの驚かないのでは有りません 小才「母上様危ふ御座います。と手を引いて居りますから百性屋へ親子の者は這入りました 母「小才治恐いし旋風だねへ然し御老母様は何う被成つたらうね 小才「母様御

心配には及びませんよ、屹度下男が何所かへ御連れ申して御体み被成つて御出でせうから。とも一風も無い様で御座いますから是から小才治は母親の手を取り百姓に禮を述べ家へ戻りました。女中「オヤ……御歸り遊ばせませう。御勞れで御座いますよ……」母「御隠居様は未だかい。女中「未だ御歸り御座いませんが何うか被成いましたか。母「イヤ……別に何うも仕無いが……チー小才治何う被成つたらう。と話して居る所へ下男も歸つて来て。下男「イヤ……も一酷ひ旋風で御座いましたな。母「御前は何かい……御老母様と御一緒で無いかい……」下男「へエ……私は知ら無いので御座います。が汝様等御一緒でねいかね……何うしたね。母「夫れは大變だ御母様が御歸りが無いが怪我でも有つては成らんから早速迎ひに往か無ければならん。と言つて若衆共頼むやら下を上へと騒ぎ小才治を始め五六人の者が出様とする所へ杖を柱に御老母一人で歸つて来て。老「何うも恐ろしい風だつたね……」母「御怪我は御座いませんか小才治や私も危ひ所を何うやらして百姓家へ逃げ込みまして災難免れを致しましたが汝も御無事で結構で御座います。只今何う被成たかと思つて御迎ひに出様と致しました所で御座います。と家内の者は欣んで其儘に過ぎて居ります所へ塚原小太郎が尋ねて九太夫が最期の話を聞くから是々斯うくと右の次第を述べると

塚原先生も涙を流がして。小「實に御氣の毒様の事で御座いましたな拙者一兩日休息をして早速佛參に詣るで御座らう然し御老母様に御面會に係りたう御座る。と言ふので是から松枝殿が案内にて奥の放れの座敷に居ります老母の元へ連れて参る。母「御母様是は娘三枝の夫帯刀殿の御舍弟塚原小太郎殿で有ますと言ふので老母も挨拶をする塚原先生も兩の腕を着き一通りの挨拶する夫れから頭を上げて老母の顔色をツツと打ち見やつたが塚原心中に思へらく此の老母さんは大變な者じや人間じや無い是れは怪物じや。是れは宜からざる怪物又此者を御存じ無いのかと塚原がウンと勇氣を着けて老母の顔色を見るとウンと言ふ。小太郎の活顔に睨まれたる老母自然と下へ向く扱て老母の室を出て元の室に來り。小「母上に御尋ね申度事御座る九太夫殿の御最后是承知したが別に何か御當家に替つた事は御座いませんか。松「別に變つた事も御座いませんが初七日の佛參の歸る先も旋風が起りました。老母を見失ひまして心配して居ります所へ一人で戻つて参りましたが私はま一能く歸つて來たと思ひました……」小「然らば此節は老母の食物何んぞは如何で御座いますな。私「余程當時は年に似合はず食が進みます。塚「ハアハ……然し御油断は相成りません願はくば某一兩日暇を頂戴して觀世音に參詣に參り祈願を掛けて來ると申すは塚原確かに彼の老母

は猫の怪けたに違ひ無い事に依ると九太夫殿が討つたのが双びで有つて其内社か雄が残つて居つて其獸の一念此島村家の一族を根絶しに仕様と云ふので老母の姿に装ひて居るに違ひ無い其實地を見願すには是より觀世音へ參詣して御籠りして觀世音の御利役を蒙らんと其所で小太郎は往こうとするも小才治も御同道申すと言ふので武藏の國名代の觀世音へ參詣する然今の様な立派な者では有りません茅屋葺に致して甚だ何うも見苦るしい堂で御座いました當今の淺草は實に盛大を極めて居ります彼の觀世音の堂は三代將軍の建立の御堂で其頃追ひは觀世音の内殿に御籠りの出来る時分半疊の一間で小い所が有つて其所で御籠りする所が段々人間が津太くしく成つて權助と下女が御籠り何んぞをする様に成つて來るから八釜敷成つて觀世音の堂の御籠りと云ふ者は廢されましたが此時分は御籠りと言ふ者が出來まするに依つて島村小才治塚原小太郎兩人は觀世音の御養錢箱の前の所で大慈大悲の觀世音菩薩何卒御利役を以老母の本體を顯させ賜へと祈つて居る内にトロく御養錢箱へ寄り掛つて眠みフウツと小太郎目を醒した所が小才治がウツ……ウツ……と低されて居るから塚原小太郎が「是れ小才治……小才治よ。と言はれてフツと小才治目を開き小才「兄上……小「如何致した……小才「夢を見ました小「何んな夢を見た小才「老母の

姿を見様と思ふ成れば澁谷の正光寺へ趣向きて見ると云ふ夢を見ました小「然うで有るか私も其夢を見た。是ぞ正しく觀世音の御利役に相違無い實以辱け無い然らば明晚正光寺へ趣かんと其夜は其所にお籠りして扱夜も全く明けましたから觀世音の堂を出まして小石川村へ戻つて母の松枝に斯様く然々と物語り是より母に一日の假を乞ひ澁谷の正光寺へ進みます事に定めましたが晝間の内は兩人共にグツスリと枕に着き夕景に起き上り風呂へ這入り身體を清めました是から兩人は出て參ります兩人「左様なら往つて參じますと告げて出掛ける小太郎備前兼定の大刀を差し小才治は親の遺見の備前國の住人一文治の刀をば横たへ澁谷正光寺へ乗り込みました夫から玄關へ係つて住職に面會を乞ひ先づ懷中より金を出し夫から四方山の話等をして小「扱て島村一家の事に着き和尚に少々歎願の義が御座るが……和「何事で御座いますか愚僧の身に叶ふ事成れば何成りと小「イヤ……外でも御座らんが實は斯様斯くくの次第でと話をすると和尚は和「フツ……當今は本堂も大破して居ります故惡い風説が有りしますので實は困り居る所然らば此方らへ……是へ這入つて實地を御覽被成い。と言ふので住持椅子を掛けて本堂の合天井の板を一枚剝がして此上に小才治小太郎の兩人を入れて置き直ぐと椅子を以往つて仕舞ふ夫から兩人は本堂を

一目に見渡して居る暗しと雖も眞の大衆傑塚原小太郎の活眼何が見損ふ氣遣ひや有らん頓て大剣の目釘を濕し鯉口を寛め變怪通しと待ち構ひたるのは永録二年の正月春とは雖も餘寒劇しくしてドゥドツと云ふ本堂の夜嵐最と寒く四方は寂々寥々として小耳に響く遠寺の鐘ボーン……ボーン……と打つが最早丑三と云ふ頃追と成りましたから耳を直立て遠寺の鐘を數へて居ると下でガヤ……音がする端で今頃人間が集つて来る筈は無いが見供計りの大勢が集つて来る様子ハテと塚原先生合天井より本堂へ参る者を余所目もせず見て居りますすると何かちよこ……遣つて来るから扱は是れ則ち變怪集つて来るが家來の有様じや然しポツトする譯は無いがと伸び下りまして見ると數十匹の小猫が集まつてがや……遣つて居る 小「ハハア……扱は是怪猫集つたりと思ふ間も無く御老母様御出に成つた御老母様御出に成つたハタ……今迄集つて居りましたる小猫が馳出すると當り輝々く暗夜に朦朧として來たる者有りキツと小太郎勇氣を着け打見れば斯は如何に遑ふ方無き島村九大夫の老母杖に纏つてノソリ……と這入つて來る是を小才治見るより怒り念頭に上り大刀を抜き飛び出さんとするので小太郎確かと抑へて、小「未だ早い……未だ早いと止めて置く 小猫「大層御隠居には遅ふ御座いますなぬ 老猫「去ればさあ私も早く來よう

と思ふが家内中が眠らるので手間が取れた夫れに久しく生魚を食はんが何か味さ魚は有かや…… 小猫「有ますとも……胎み女が死んで今日で四日めで御座いますか如何でしような…… 老猫「結構々々早く持つて來な 小「小才治只今生魚と申したら胎身女と申したなぬ 小才「左様さ夫を食ひますのかなと話しをして居ると胎身女の死骸を持つて來ると老母は余太の猫を相手にムシヤリ……喰へ始めた塚原先生小柄を引き抜き只一討ちとウツと狙つた勇氣自然と老母の體に應へしか老母四方をキヨロ……見廻し 老母「オヤ……人臭ひイヤに人臭く成つた。とギョロリ……見るや其目の凄まじい金齒を磨いたかと思ふ様な顔付で人臭と顔を向けたから塚原小太郎臨兵闘者皆陳烈在前と織を切り乍ら頓てヤツと一喝叫んで討ち込んだる小柄確に老母の眞正面に當りたると見へ。キヤツと一喝叫んでゴロ……く……ド、ドン……と此正光寺の本堂毀れる計りの者音に成るや得たりと塚原島村兩人は合天井より飛び下りてツカ……と進み一刀を被せ掛け目太擲りに切り巻くる夫より住持に面會して斯々の次第と昨夜の始末を物語り小石川村を指して立返る是が塚原先生の怪猫退治と云ふ奇談で御座います先は次回の御物語り一寸一服……

却説辨じ續きましたる塚原の傳記……元來此お話しは他の先生方も皆御演りに成ります
 琴凌の塚原は家代々の十八番でございまして大いに其趣きを異にし或は武骨過る處もござ
 いませう亦六ヶ敷い事も御座いませうが固より斯る武勇傳尾ヒレを付くべきやうもござい
 ません眞實の正傳でござい升るに由り看客諸君御思召して御説分けを願ひます其代り此
 次は何か滑稽澤山色氣澤山の講談を伺ひます扱ても塚原小太郎勝義は永録二年正月七日
 澁谷正光寺の本堂に於て確かに老母の本体を見破りまた小太郎の打たる手裏劍確かに面
 に手答ひを致し其儘行衛を見失ひ夜が明けて住持に厚く禮を述べて寺を立出で小石川村へ
 立戻つて参りますると常より早く門を開き掃除が行届き掃目杯が美麗に付て居る 小「大層
 早く御掃除が届いた事で有る。と小太郎大刀を提げ奥へ通り 小「唯今立戻りました。小才
 治其處へ進み 小才「母上唯今戻りました 母「是れはく大層お早いお戻り 小「エ、今朝は
 大分御目覺が御早いやうにござりますすが 母「御意にござりました昨晩より當家に於てはマ
 ノマリ共致しません 小「ハ、ア何う云ふ次第でマンマリとも被爲らない 母「御老母が昨晩
 大變な怪我を遊ばして其故家内中臥りません 小「成程何う云ふ次第で御怪我を被爲た 母「
 ナニ女中をお起し遊ばせば好いのに家來をかばつてお一人で厠へ御出でに成り手を洗ふと

雨戸を明け足が狂つて庭へお落ちに成り階脱の石で眞眉間を強くお破り遊ばして其れが爲
 に家内中一人も臥りません 小「成程夫れは何うも大切……然し母上に小太郎申上げて置き
 ますが小才治の兩人にて淺草觀世音へ参り御籠りを致し觀世音の御利益にて御當家御老母
 の本体を見顯はさんと思へば菩提所正光寺へ罷り越せと云ふありく爲たる處の觀世音の
 お告げに由て小才治と同道致して正光寺へ罷り越し住持に面會を致し種々物語りを致した
 處正光寺本堂は近頃怪しき物罷り出で難滋致すとの事右に由て吾々合天井の板を剝して其
 中に忍び容子を窺つてあれば昨夜の恰度五三ツ頃をい許多小猫が集つて居る處へ御當家の
 御老母お山でに相成り其顔色常ならづ由て小太郎が手裏劍を打ちましたか確かに手答へ致
 してござる某察する處御當家御主人島村九太夫殿昨年九塚山に狩鞍の折からに兎を捕り喰
 はんと致したるを九太夫殿に打捕られたる其怪猫の番ひ叱か吐かは知らねども一念此土
 に止つて御當家を根絶しに致さうと九太夫殿初七日の佛參に突然旋風を起し御老母のお行
 衛が分らなく相成り是れ小太郎の愚案には怪猫御老母を取喰ひ假に御老母の姿と成り當家
 に入り込みしに相違無い討つべきは今日より外にはござらん美事拙者討取て御目に掛ける
 お身の爲には良人の仇小才治が爲には父の仇何條免す事の得べきや至急御用意遊ばして宜

しからう。松江殿か聞遊ばし。松「是れはく色々と御深切に有難く存じまする成程私の爲には良人の敵如何んぞ免すべき邊のあるべきか速かに用意を致しませう。と是れより親世音の御影を出し香を薫き松江殿甲斐々々敷く身仕度に及び小才治も福岡一文字の大刀の目釘を濕し小太郎に従つて何處迄も討つべき了見。家來の者共には皆夫れく内々にて申渡し逃がさんやうに致せと云ふから島村一家の者手配を致す塚原先生は謙信公より拜領爲たる備前兼定の名刀の目釘を濕し僅々一人老母の離れ家へ進んで來る。唐紙の建合せより密と体を捻つて小太郎が老母の容子如何にと覗くと寢所に老母は居ない向ふの雨戸の處が明いから此處を密と見ると老母起きて鏡台の前に座して頻りに眉間の傷を鏡に向つて療治を爲て居るやうす。小太郎己れの陰の向ふに映らんやうに建合せより首を出し体を捻つて覗いて鏡を見ると這は如何に唯後から見れば老母の姿なれを鏡に映つて居る顔色を見ると其顔の大きいこと醬油樽より大きく眼は二面の鏡を竝べたる如く口は耳まで割けて長く眞つ黒な大きな猫が眉間へ小太郎にの深かに打たれたる小柄の傷。痛むと見へ手の甲をへろく〜舐めては眉間の傷を己れの唾を以て療治を爲て居る見ても身の毛が凄立つ計りの顔色なるに由り。小「扱てこそ丸塚山の化怪御參なれ……と小太郎立戻つて。小「扱てこ

と我家に遊ばざる丸塚山の變化今ぞ討つより外に無く速かに討取れ。と小才治諸共にソツと離れ座敷に忍んで來しが小太郎傍への塙の陰に大刀の柄に手を掛け今や遅しと待て居る小才治は一刀の鞘を拂つて唐紙を蹴碎きながら踊り込み。小才「丸塚山の變化父の敵祖母の敵御參なれ。と大上段に振振り。小才「ヤツ……と計りに切下す老母体をヒラリ左りへ捻つたから刀は外れて鏡の淵へガツチリ斬込んだ。小才「遣り損じたり。と亦も振振る時に老母は立上つて。老「ヤー汝は小才治では無いか老母へ對し無禮を働くと云ふ事があるか狂氣致したるか血迷つたるか無禮者……。小才治カ〜と打笑ひ。小才「心得たり丸塚山の變化……汝父に連添を殺され其遺恨骨髄に徹し當家に忍び込み居る事は最早承知致して居るぞ老母の敵父の敵覺悟を爲る……。と無二無三に切込んで來る奴を。老母は逃げつ括りつ。老「ヤ〜皆の者出合へや折合へや孫の小才治が狂氣を爲たぞ。と云ふを耳にも掛けず切込んで來る内に小才治何んで叩かれたか肩の邊りを腕かにはたかれ踏眼々々とするめへて圓轉倒と倒れる其限に老母は唐紙を開き出でんと爲したる時小太郎。小「丸塚山の變化御參なれ。と備前兼定の一刀を取て飛掛る是れは小才治如きの意氣込みで無い天下の榮傑塚原小太郎勝義。切先を鋭くければ老母遇ひ兼ねたる時に小才治飛起きて是れ亦切て掛る右

と左りに真剣を受けて何條堪るべきか今はハヤ叶はんと思ふ内に今迄空は晴渡り朝日の光り光々と爲て居りましたが假かに天眞ッ暗に成り狂風颯と起つて砂石を飛す計りの光景折しも雨はホッリ〜と落ち來り雷鳴さへも加はつて見る〜益を覆すが如き大雨と成りましたから島村の家内中は戦々恐々れ 甲「ソレ雷だ 乙「雨だ……強い風だ……」と皆座敷の中へ馳込み障子唐紙は宛ら空天に巻上るかと思ふ計りガラ〜〜ヒカーリと云ふ音小太郎大音を揚げ 小「ヤー〜小才治廻れるな是れ眞の雷ならず眞の雨ならず誠の風にあらず彼れ術を持って雨を降らし雷を鳴らすに相違無い彼の術に違ひは無い失策れるな小才治……」と小太郎は臨兵闘者皆陳裂在前の織を切り 小「大慈大悲の觀世音菩薩何卒孝子小才治に仇討を望せ玉ひ。」と小太郎大刀を捻つて無二無三に切込んで來る内に電ば目に焼金を刺す計り其時老母は庭上にヒナリと飛び降り降り來る雨を物ども爲す那方へ逃んど爲す。小「然ふは爲せじ。」と小太郎續いて飛下り胸を延して後より引く雨は宛ら石を打付けらる〜如く物凄く老母は最早小太郎に術を見破られたるに由り着類は老母の着類帯も締て居るが着物の襟より尾の二股に成た奴がアツ下り其丈け六尺計りの眞ッ黒の猫。雨風激しき其内よりガ〜……と云ふ物音と共に雲を捲下して空々遙かにガラ〜〜と行くと爲した

る時に塚原先生伸上つて居たるが 小「弓矢八幡上覽あれ吾れ打漏しなば武門の羞ヤツ……」と一聲叫ぶと見へたるが空天遙かに飛上つたが飛上るのは塚原先生猫より本職で播州の天狗飛切りの術。斯ふ云ふ處へ來ると云ふと役に立つ。飛上つて行く猫の後より進んで行きながら黒雲の中で備前兼定を以て煽り付けた。切人は塚原得物は謙信公より拜領の備前兼定の名刀。何處を打たか確かに手答へが爲たに由り其聲宛ら獅子の吠るが如き悲鳴を揚げるどガラ〜〜とドーン……と庭上へ地響き打て落る響を目的に島村小才治福同一文字の大剣を取るより早く上から突進したるに由り是亦手答へが爲る小太郎飛降りて來る亦一太刀切付けける猫はノメ打廻りて死にました 小「最早家内の老怪物は爲留たり出でや〜。」と呼はる内に一同庭先へ出で來た。時に雨はガラリと止み雲は晴れて朝日の光りは元の如く輝いて居ります家内中は驚いて 甲「何うだマア此りやア何う爲たつて云ふんだ 乙「降て來て俄に上つて仕舞つた。小太郎は血刀を提げて庭上に突立ち 小「驚くなく〜猫が術を以て風を起し雨を降らしたのだ然し是れは余の毛物に出來る業で無い數百年を経た山の化物だ人間の肉を喰ひ夫れにて段々術を得て既に狐は五百歳を経て白狐と成り猿は五百歳を経てヒンと成り自由自在の働きに及ぶ是れは山猫化してカシヤと成る此れは五百歳を経た

山猫の化したのは驚くには及ばん 一同「へー……と唯家内中は呆れて小太郎の顔を見て居る 甲「マアお前様ア能く退じ被爲た今しがた生きて居たやうだがモ一死んでしまつた驚いたもんだ 乙「實に先生には恐れ入る……」と唯一同感に入つて居ります 小「然し小才治必ず小才が實名を申しては成らんぞ早速地頭へ訴へなさい」と是れから小太郎は一間に這入つて仕舞う小才治下男を以て訴へに及ばせまると是れ前代未聞だと云ふので處の代官人数を従へて島村の庭へ来て見ると尾の先が七尺計りで二々股に分れ何處から何處迄眞ッ黒かいで兩の牙は鎌を並べたるかと思ふ計り爪は眞ッ白に致して是亦鎌を五本並べたかと思ふ計り實に凄然と爲る怪物でございます 役「能くも是れを退治致したものは是れにて近傍も穩かに成るであらう……然し尊公か一人の手柄では有るまい 小才「如何にも拙者從兄に當りまする常陸浪人仁科與四郎と云ふ者が助太刀でございまして 役「夫れはお美事だ仁科氏にお目に掛りたい」と仁科與四郎に面會爲て見ると好い人品であるに由て大層仁科與四郎を褒めて斯様なる化物を此處に置ては爲に相成らん早速丸塚山へ持參爲て焼て仕舞へ」と云ふので死骸を釣臺に載せまして丸塚山まで擔いで參りまして麓へ穴を掘て其中へ死骸を入れ薪を入れ火を掛けてコンガリと灰に爲て仕舞ひ是れへ塚を立て永録並びに天正年

間丸塚山の猫塚と云ふ大變評判の立ちましたる塚で塚原の若盛りの時に武藏の國豊島郡小石川村のカシヤ退治と云ふのは此話でございます。扱て此方は島村小才治を連れて小太郎殿觀音様へお禮詣りにお出で遊ばし此小才治を同道致して序でなれば逆隅田堤へ櫻を見物に參りました此島村小才治は後に塚原小太郎より武藝を學んで大變能く出來まして此人に子供があつて友次郎と云ふ此友次郎と云ふのは小才治半途に落命致して義理ある弟の子だから塚原先生友次郎を手許に置き後年塚原飛騨と信濃の國界ひに隠遁を致して此友次郎と云ふ者が十三歳の時に宮本武藏合氣の術を習ひに來た時に塚原先生宮本の膽力を見極めて小才治の二子友次郎を宮本に致して親子に相成た此人が二代目の宮本武藏と相成たるは小才治の二子友次郎でございます惜いことを爲たのは此小才治……此時小才治は十六歳。三國の茶屋へ來て小太郎と兩人景色を眺めて居る昔も今も此隅田堤は景色の好い處で春夏秋冬の眺めの好い處北には遙かに筑羽山を扣へ前には綾瀬を眺め河を越して淺草山谷眞乳山を望む其絶景言はん計りもございせまん頼りに茶を飲んで話しを爲て居ると木母寺の方から身の丈け挨拶に高い男が頼被りを致し奴達の赤を身に纏ひナツリ〜と來る跡から八九人の野臥りが尾て來て 甲「ヤイ新參汝へなんぞは仲間入りを爲やがらねへで乃公達の擱張

りを貫つて歩きやアがつて飛んでも無へ奴だ……仲間入りを爲るに僅か一貫出しやア仲間入りが出来るんだ、一貫で仲間入りが出来るんだに由て仲間入りを爲ると云ふんだ 乙「然ふだく仲間入りを爲る淺草聖天町山の宿花川戸那の邊は小哥等の繩張りだ 丙「亦た下谷の方は阪本三の輸入谷邊は小哥等の繩張りだ其奴を徐々貫つて歩きやアがつて……ヤイ仲間入りを仕ねへか。眞ッ先きの非人は回顧り 非「八釜敷いやい摺子木奴。汝達の仲間入りを仕なくとも乃公は勝手に貫つて歩くんた大きにお世話な事を吐すな 甲「此の野郎大きにお世話とは何んだ商賣盡たから仲間入りを爲ると云ふんだ愈々仲間入りを爲なければ己を捕めて宿無しの法に行なうから覺悟爲る 非「此奴等大勢だと思つて大層も無へことを吐しやアがる汝達が乃公の子分に成て名々貫つて来た内をお頭お冥加に上げますと云やア仲間入りも仕て遣るが唯汝達の仲間入りを仕るやうな乃公じやア無へ。大勢の非人が聞さ 一同「巫山戯たことを吐しやアがる汝等のやうな新參を親分に頼んでお冥加なんぞを出して堪るものか巫山戯やアがるな。と正面から拳固を上げて打て来る 非「何を爲やアがる此奴等ア詰らねへ腕立エ好ひな。と打込んで来た手首を掴んで此方の手で襟首を捕へドンド放ると堤から隅田川の中へゴロ〜〜 乙「ヤー生意氣な養生だ此の野郎……と左りか

ら打て来る奴を体を通しボンと腰ツ骨を蹴られたから此奴もヒョロ〜と轉つて堤から下へゴロ〜 丙「此う野郎坐山戯るな。と後ろから組付て来る腕首を掴んでボンと背負放げを喰すと反面の中へ飛込んで仕舞つた拳固を上げて打て来る奴を當るを幸ひに捕へちやア放り出す實に自由自在の働さ。仕舞ひに残つた二人計り 一「此りや逆も構た處が叶はない恐ろしい強い野郎だ命有つての物種だ。と木母寺の分へ逃げて往く有様に 非「見やアがれ生地も無へ癖に大層も無へ事を云やアがる餘計な暇を取らせやアがつたア、暑く成た……と被つて居た手拭と解て顔を拭きながらフアリ〜と今の松橋の方へ行く其時分に枕橋と云ふものは御坐いませんだつた茶見世から見て居た塚原小太郎島村小才治 小才「何うも兄上強い奴じやアとさいませんか 小「美事に強いな……婆アや此處へ茶代を置たぞ 婆「ハイ大きに有難ふござい升。鼠狐々々に茶代を拂つて兩人は茶見世を出でフアリ〜と非人の跡から尾て参り漸く人が少なく成た處を見て 小「コレ熊吉待て…… 熊「誰だ……乃公の名を呼んだのは誰だ。と回顧り小太郎を見て喫驚爲し遙か跡へ飛退つて兩手を突へ 熊「コレは若殿にて在しか知らぬことゝは云ひ乍ら失禮の段々御容赦下さるやう…… 小「如何致して熊吉其方には昨年十月二十日常陸の國笠間の松原で汝が兄の秋田伴作と共に彌六を

助けんと致し敢無くも汝の兄は討死を致し吾は危きを免れ助かりしが實に其方に對し如何にも氣の毒と存じ拙者罷りある亦其方には昨年八月小原にて難を逃して貫ひ其後下總姉ヶ崎に立戻り亦伊豆の眞鶴へ立歸りしが如何致して斯様な姿で武藏路へは下つて有る……熊吉涙を流し「譬へ兄の伴作は昨年十月二十日討死を致すとも是れ君の爲に討死を致し万分の御恩報じ何條吾々兄弟が捨る命は君ならで外に無し父秋山又兵衛喜ぶとも必ず歎くに違ま御座るまい拙者ことは昨年君にお別れ申し東國筋に仔細あつて下り……然し此處は往來に候得ば拙者は構はねども君の耻辱明日辱宅を尋ね參上仕るでござらう 小一左様か……熊吉當時は小石川村島村九太夫と申する者の家に罷りある是れなるは九太夫殿の御子息小才治と申す者汝の知る如く我兄帶刀殿の妻君三枝殿の賢家で…… 熊一左様でござい升か扱ては島村の若旦那にて在せしか何れ明日改めて御尊家を御尋ね申上げます今日は世間を仰り是れにて熊吉は御暇頂戴致す。と云つて熊吉は一足先へ行く塚原は小才治を連れ話を爲しながら小石川村へ立歸る明日は熊吉が来るで有らうと樂みに致して居り升と小才治は召使ひを呼んで 小才「ユレ」 家來「ナニ御用で…… 小才「ア、明日たな 家「ハエ小才「宿無しが朝次第に由ると遠處の方から来るであらうから其非人が參つたら最と叩

に世話を致し風呂を立て置いて至急風呂へ通し髪杯を取上げて遣はさんければ成らんと其積りで風呂の手當を爲て置け 家「畏まりました。其夜は臥り翌日に成ると朝から風呂の仕度をして居る處へ臺所の腰高をガツリと明け 非人「お早うございます御餘りを戴きとふ存じ升。飯炊が飛んで出で 家「此りやア入つしやいましサツと何卒……湯殿へ御通ん被爲て……と云ひ放して置いて奥へ遣つて來た 家「若旦那々々 小才「何んだ 家「お出でに成りました昨晚お話しした宿無しが 小才「然ふか身の丈け抜群に高い年齢二十四五の色の淺黒い立派な男だらう 家「イ、エ平生來る五十計りの身体の小さいヨボく爲た乞食でございます 小才「白痴奴然んな者を呼べてんじやア無へ今云ふ身の丈けの高いのを世話ア爲ると云ふんだ行届かん奴だ然んな者は用は無追ッ拂つて仕舞へ 家「へい。飯炊き臺所へ出て來やアがつて 家「ヤイ貴様じやア無へや貴様の庇陰で朝から叱られた何んにも遣らねへから出て行け。乞食奴煙に巻かれて出て行く暫く経過と玄關の方に當つて 侍「頼もうく 取次「ドレ。此方の方は亦係りが違うから若侍が出て 若「へ何れから……と見ると黒の衣類に黒の背割羽織。馬乗袴を穿て朱鞘の大小を履めしく帶し立派な侍が立て居る侍「エ、お取次御苦勞でござる拙者は昨日三圍りの土手に於てお目通りを致した秋山熊吉虎

嵐と申す者御當家に塚原先生お出である由願くばお目通りを願ひ出でました 若「暫く……と奥へ這入つて 若「若旦那何うも立派な侍が来ました昨日三國りに於て面會を爲た秋山熊吉 小才「夫れが裏所から来る筈だ 若「何う爲てく黒の衣類にお立派な大小を差てスバチ敷い侍でグスせ。小才治玄關へ立出でる 小才「是れはく宜うこそお尋ね下さいました 熊「イヤ是れは若旦那昨日は途中乍ら御無禮。小才治見れば昨日に變る立派な打拵 小才「サ兄上御待兼ね何卒此方へ 熊「御免……と草履を脱で大刀を右に提げ間毎を隔つて来る 小太郎の次の間へ大小を置いて秋山熊吉双の手を突へ 熊「昨日は三國りにて失禮御宥赦下し置かれ升るやう 小「熊吉昨日に變る汝が打拵然こそと小太郎も察し居る 熊「有難き仕合せ拙者事も常陸の國塚原の城主五万石塚原土佐守譜代の御家來秋山又兵衛一子でござい升君の敵佐竹彈正助國をイヤヤ討んど爲る時に短刀も帶せつ堂夫劍菱の拵にては塚原家に對して此上なき耻辱。去れば素破やと云ふ時の裝束は觀世音拜殿の下へ油紙を以て包みて仕舞ひ置き衆人に見付けられざるやう致し置き常は劍菱の拵にて往來致し居りますすが扱て非人に相成り武藏路にあると云ふのは餘の義でもござらん昨年八月小田原城を破り若殿と共に上總の姉ヶ崎に立退き其後伊豆の真鶴へ立戻りやしたる處父又兵衛の申すには汝我手許に

有つては無益の至り敵佐竹彈正の容子を篤と實否を問料し若殿の御在所を尋ね御注進申すが汝の役。心得たりと父に暇を得て常陸笠間表に罷越し野臥りと成つて種々付視ひしが敵の佐竹彈正の容子城外にては少しも分らず故に拙者種々工風を致し今一度常陸の笠間に趣き願ふことなれば彼れが手許に推參して實地の處をば是定め若殿に御注進致さんと斯く存じます御目通りを致したは何寄りの重疊願くば再び御暇を頂戴致す笠間へ罷越し升から……と小太郎聞て 小「ア、一忠なり熊吉誠に吾れは能き家來を以て仕合せ然らば汝笠間表に趣き呉れ汝が忠義に愛で兄帶刀の遺物を呉れる。と兼て箱へ入れてお置き被爲た兄帶刀が遺物に呉れたる大和の國住人金丸國安の名刀をお取り遊ばして 小「是れを其方に遣はす 熊「ア、一有難き仕合せ。と熊吉有難き心根に徹し拜領致し 熊「然らば至急常陸の笠間に趣き升るに由て左様御思召下さるやう先方に參り運に乗じ敵の手許に住込みなば書狀を以て告奉る 小「熊吉夫れを楽しみに當家に罷在る是れは其方旅費に致せ。と二十兩 小太郎お遣ん被爲た 熊「有難くは候得共嬉みの金は所持致して居ります 小「イヤく其金は夫れと爲て置いて是れを持て參れ 熊「左様なれば御機嫌宜しう何れ吉左右は御知らせ申上げ升。と熊吉は江戸表小石川村を出立を致しまする是れは永の二年正月九日の午前十時

頃夜を日に次で常陸の國笠間を臨んで乘込んで參る常陸の國笠間の城主七万石佐竹彈正重國當時は水戸の城主佐竹左京大夫義重病死の後は佐竹の後見八十三万石中務の家は我物顔の佐竹彈正、七万石の城下に似合ない盡くの賑かさ軒の並べる旅泊屋が皆其處へ迎ひに出で 甲「お泊さまじやア御座いませんか何屋何兵衛は拙者でございませぬ。と遣つて居る熊吉は邊りを見ながら来る 乙「お泊さまじやアございませんか 丙「お泊り様じやアございませんか 庚「エ、お泊り様じやアございませんか柏屋市兵衛は拙者でござい升。熊吉ヨリと見たが 熊「ウ、ウ、何かお前は主人か 主「左様でござい升私 が市兵衛にござい升 熊「性質の面白さうな家だ泊つて遣らう 市「へ、エー有難ふ存じます 熊「お前の家は何處だ 市「へ、此旅泊屋でござい升……ユ、御客様だぞお洗足を取て進げな 男「へ、エーお洗足 熊「ア、イロ。と熊吉足を洗つて 熊「次第に由ると少逗留爲るかも知れないから下座敷の方が好い 二階は上つたり降りたり面倒だ 市「へ、エー有難う存じます……お武家様だ上段の間へお通し申しな。男が上段の間へ通し熊吉刀掛けに大小を直し 熊「若衆や是れは茶代だぞ 若「有難ふ存じ升 熊「大枚百疋あるぞ大枚百疋だぞ大枚…… 若「宜うございませぬ 熊「風呂が能ければ然言つて呉んな夫れからなア若衆膳付で好いから一升付けて呉れ 若「へ、エ宜しうござ

い升……旦那へ…… 市「何んだ 若「アノ上段の間のお武家様が一分お茶代だつて 市「性質の好い侍へだなア何うも…… 市兵衛羽織を引掛けて上段の間へ遣つて来た 市「モン旦那能く御泊り下さいました亦唯今は御茶代を有難ふ存じます。とお茶代丈けを白痴に大きな聲を出して是れは外のお茶代を呉れないお客に面當だ是れは主人が計略なんでござい升熊吉大きな聲に驚いて 熊「大きな聲を爲やアがるなア然んな大きな聲を爲なくつても分つた 市「何うも有難ふ存じ升恰度お風呂が宜しいとうで 熊「然うか。風呂へ這入つて這入たと思つたら直ぐ出て来て酒を飲み飯を喰ひ是れから熊吉逗留を爲て何んにも別に爲ること無い朝一升お晝一升晩に一升毎日三升の酒を飲む 熊「面倒臭いから勘定は凡て立換て置て呉れる。柏屋市兵衛婆ツ氣だから黙つて立換て置くに恰好五日に成りました女房が市兵衛に向つて 女「鳥渡お前さん上段の間のお武家様へ往つて勘定を貰つてお出で、お酒があるから餘計金高が登つたヨ今日で五日だから 市「然ふだなア。書出しを拵へて市兵衛上段の間へ遣つて来ると熊吉横に成て居る 市「へ、旦那様御退窟様…… 熊「市兵衛詰らねへなア笠間と云ふ處は實に下らねへ處だなア 市「奈是でシス 熊「奈是だつて見る處も何んにも無へ是れで七万石の城下かい 市「笠間だつて旦那見る處は少とは有りますお前さん何所

へも出ないじやア有りませんか家に計り居ちやア何所も見へやア爲ません 熊「夫れも然ふ
 だが何うたい家に寝て居て見る工風はあゝめへか 市「然んな結構なことは有りませんや夫
 に就て旦那今日で五日に成ります 熊「乃公も然ふ思つて居らア 市「へエ餘り御勘定が溜り
 升から一寸何卒御勘定を御覽被爲て…… 熊「チ、宜しく。熊吉起上りウン何にか毎日三
 升づゝ酒を飲み色々の立換と旅泊錢一切ガツサイ引包めて二兩一分二朱と八百かい 市「左
 様でございます 熊「安いなア 市「何うも軒を並べて居る旅泊屋でございまして皆精々働い
 て置きますんで 熊「安いや分つたヨ 市「へエ…… 熊「分つたヨ 市「お分りに成りましたか
 熊「分つた 市「お分りに成たら御勘定を頂きたいもので 熊「勘定を呉れと云ふのかい 市「
 左様でござい升 熊「見て呉れと云ふから見れば好いんだと思つて 市「御元談計り被仰ちや
 ア不可ません勘定を頂きたいんで…… 熊「成程敷くと来られちやア少し困るテ 市「奈是で
 げす 熊「實は貴様の家へ泊つた時にもう一分しきやア無かつた其一分を氣前を見せて茶代
 に遣つちまつたんだ跡はもう更に無してんだ 市「へエ……更に無しは昔酷うござい升な
 ア 熊「更に無し 市「何んとか色を付けたら宜うございませう 熊「付けても無し何方にして
 も無へから更に無しと云ふんだ 市「慘酷うござい升なア何う爲る積りで 熊「自分でも何う

する積りだか分らねへ 市「困るじやアございませんか 熊「乃公は實は天下無録の浪人で戦
 さの中へ飛込んで軍用を奪ひ取て工面が好ければアノく遊んで居るんだ 市「貴郎は戦
 場を追劔でござい升な 熊「然ふヨ然るに久しく戦さが無へから小遣にも困つちまつて其所
 でアノく貴様ん所へ来たが貴様ア娑婆ッ氣らしいから此方で撰んで貴様ん所へ泊つて遣
 つたんだ 市「夫りやア何うも迷惑じやアございませんか夫りや私も人の世話することは大
 好で二日や三日喰して一分や二分の小遣を持たして立して遣ることも有り升が…… 熊「實
 に感心だなア何うも主人乃公も其氣象を飲込んだから泊つたのだ何うだ主人其積りでモ一
 五十日唯置かねへか 市「御元談かつしやつちやア不可ませんヨ夫れじやア何うも商賈に成
 りませんからなア 熊「貴様の方も商賈に成るまいが今乃公に出て行けつちろて矢ッ張行く
 所が無いから隣の旅泊屋へでも往て柏屋市兵衛が拂つて呉れると斯ふでも云はなければ
 追付かねへから 市「白痴な事を云つちやア不可ません面白くも無へ何うするんで 熊「イ
 ヤ損は掛けない此刀を賣て拂をうじやア無へか 市「侍が刀を賣るてへのは昔酷いじやアご
 さいませんか 熊「ナニニ亦戦さがあつたら敵の好い刀ア打奪るから構はねへ是れを刀屋へ
 持て往て賣て來な目の利くる刀屋で無きやア不可ねへから直が出来たら一遍歸つて來て呉

んな三笠間にも目の利た刀屋はあるかい 市「夫りやア有り升ども……宜しうございます。市兵衛刀ア摺いで 市「乃公ア鳥渡往て来るからなア 内「お前さん何所へ行くの 市「アノ上段のお武家が金子が無へから刀ア賣て宿泊錢を拂ふと云ふんだ感心な思召だ 内「お前さん持て行くんなら西念寺横町の見倒しの安兵衛さんが目が利てるから那家へ持てお出でなさいヨ 市「乃公も然ふ思つてるんだ彼奴が二分と云つやア二兩位へには傍へ往て賣れる一兩と云やア五兩には賣れるんだから那所へ往て見せて來やう。と市兵衛西念寺横町の見倒の安兵衛方へ遣つて参りました 市「安兵衛さん今日は…… 安「ヤ市兵衛さん何んだい擔いでるのは…… 市「斯ふ云ふ出物が有るが買う氣は無へか 安「何うく……。安兵衛眼鏡を掛けて刀を取上げ拵へを見て鑿目貫絞の工合を見て居たが 安「サムー……。柄へ手を掛けた引抜くと節羽齒巻が金で中身は金王丸國安…… 安「サムン……。市兵衛へへ奴は旅泊屋で何んにも知らねへ奴だ大層も無へ物を持って來やアがつたコレ見倒して買はずんば有るべからずと安兵衛態と沈着顔 安「此りやア市兵衛さん賣るのかい 市「賣るんだが如何程で買う 安「然ふヨ……何うだ市兵衛さん乃公が跋張て五兩に買うが 市「五兩……此見倒しが五兩と云やア他家へ持て行けば十二三兩には賣れるな……五兩じやア不可ねへヨ 安「不可ね

へ少し待ねへヨ十兩なら何うだい 市「十兩……此の野郎五兩一遍に直上げ爲やアがつて不可ねへヨ賣る人が然ふ云つた五十兩下じやア賣れねへつて 安「成程中々賣る奴も目が利てらア何うだい市兵衛さん五十兩じやア。市兵衛驚やアがつて 市「五兩から十兩途々五十兩迄上げやアがつた此奴は大した刀だと思へるな……不可ねへく不可ねへヨ 安「不可ねへ……マア手を出しなさんな惜しいなア何うだい一番五十五兩じやア…… 市「不可ねへヨか前が買へなけりやア北横町の正兵衛さんの所へ持て行くから 安「じやア根ッ切り羽ッ切り是れつ切りモ一十兩買て六十五兩じやア何うだ 市「不可ねへく 安「手を出しなさんなモ一是ッ切り乃公は買へねへがじやアモ一十兩買て七十五兩 市「不可ないヨ……不可ねへモ一是れつ切り買へねへと云ふ正直な所を往て見ねへな 安「一番八十五兩じやア…… 市「不可ねへヨ 安「九十兩じやア 市「無益々々…… 安「詮方が無へなアモ一是ッ切り買はねへヨ 百兩じや何うだい 市「不可ませんヨ 安「然ふかじやア…… 市「待ねへヨ安兵衛さんお前のマア見倒しが五兩なら百兩直にしたんだが儲けは和郎と乃公と二ツ山にして眞實に買へる所を云つて見ねへな一ツ…… 安「此奴はね大名で無きやア差すことは出來ねへ普通めへの者が差すことは出來ねへ節羽齒巻が金で目貫が金で拵へ計り安い金子じやア無へ拵へ計り

が八九十兩のもんだ様頭から目釘から酸から悉皆勘定をすと大したもんだ先づ大名の所へ持て行けば黙つて三百五十兩のお下金は有るだらう 市「ヤイ此の野郎巫山戯やアがるねへ乃公が旅宿屋の主人だと思つて三百五十兩の物を五兩から付けやアがつたじやア無へかだから見倒しの安兵衛く」と云はれるんだ呆れ返つたもんだ儲けは二人で二ツ別けにしやう歸つて一ツお客に相談して見やう 安「一ツ早速頼む。市兵衛ドンく歸つて来やアがつた 内「何うしたい 市「呆れ返つた安兵衛の野郎……三百五十兩に賣れる物を五兩から付けやアがつた……鳥渡嬢ア珠算を貸しな三百五十兩宿錢が溜るには何年掛るだらう 内「詰らない事をして居る早く旦那へ然ふ申上げなさいな 市「旦那へ…… 熊「何うだい 市「マア此刀お返し申ませう……此刀ア三百五十兩迄直が有るんだとどうで…… 熊「イヤ此刀は千兩が二千兩でも賣れねんだ 市「然んなら直錢をさせなくつたつて好いじやアとさいますせんか 熊「イヤ鳥渡直錢をさしたんだ。と胴巻からザクく」と金子を出した 市「大層お前さん持て居ますなア 熊「有るだらう 市「然んなに持て居て無へなんて…… 熊「市兵衛さんお前は太した了見だ夫れに就てお前に少し相談があるマ此三兩は宿治錢 市「此れじやアお釣が参ります 熊「釣は茶代に遣る 市「氣前が好うとささい升なア何うせ戰場で盗賊して呉る

んだから 熊「人間の悪いことを云ひなさんな此れは盗賊した金子じやア無い扱て此所に金子が三十兩ある 市「成程 熊「此三十兩と此刀ア預けるから何所へか奉公に遣つて呉んな仲間奉公……足輕でも何んでも決して身分は好まねへから刀と金子で三百八十兩だな 市「左様で 熊「三百八十兩貴様に預けて乃公が仲間になり方一持逃げても爲たら仲間や足輕なら者の百兩と持逃げは出来めへから主人から掛合が来たら三百八十兩の内から持逃げした丈けの金を拂つて跡は貴様に遣るマ然んな事は無へが安心の爲に刀と金子を預けて置くから貴様身元引受に成て貰ひてんだが何うだい。市兵衛横手を打て 市「成程お年は若くとも感心な御思召だ承知しました夫れじやア私がお世話ア致しませう 熊「辱じけ無い此刀と金子は預かつて置いて呉れ 市「イヤお前さん持てお出でなさい 熊「然ふで無いから。と無理に市兵衛に預けまして此より秋山熊吉柏屋市兵衛の世話で笠間の城内へ仲間奉公に住込む一段……

第十三席

エ、常陸笠間の城下柏屋市兵衛が宿元に成りまして城内に住込む手筈を待て居る俠氣の柏屋市兵衛毎日笠間の御城内へ聞合して居ると或日のこととささい升がドンく立歸つて來

市「扱て旦那御城内に口が有りましたが。熊吉聞て、熊「夫りやア辱け無い誰方……市」
 左様でケス御家老の玄藤吾平次殿で……熊「家老の玄藤吾平次 市「左様でございます。心
 中に熊吉は、熊「吾が御主君塚原土佐守殿を松繩手にて鉄砲に掛けたるは玄藤吾平次コレ屈
 強のことである……。と思ふから、熊「何かノ役は何んた、市「役が少し氣に入らねんですが
 な、熊「何んたい、市「仲間だつて云ふんで……仲間じゃア何うも面白く無へからね九牛一毛
 用人の口でも有るかと思つても無へんです、熊「結構だよ、市「仲間で好うござい升か、市「結
 構た仲間結構だ、市「仲間じゃアお前さんが利かねへからね、熊「ナニが利く利かん然
 んなことば構はん、市「仲間好ければ直ぐでケス、熊「結構だ其所で仲間居てな何か手柄
 を願はし万一百石か二百石に出精爲たら主人斯ふしやうお前が世話をして呉れた世話賃に
 半分宛遣らう二百石に成たら百石遣らう乃公は百石で澤山だ亦四百石に成たらお前に二百
 石遣らう然ふ爲たら夫れで充分暮しが立つたらう、市「餘まり旨過ぎますなア。ヒやアア
 仲間宜ければ早速話をして來ませう、熊「早速遣つて貰をふ、市「承知しました夫りや然
 ふと名は何んと云ひましたつけねへ、熊「粗相つかしい男だなア宿帳に付てるだらう、市「宿
 帳なんぞは番頭任せで私は見たことは有りません、熊「乃公は伊豆の下田の生れで伊豆島三

平てんだ、市「伊豆島三平宜うござい升たがね旦那見ず知らづの者を世話ア爲て奉公に遣る
 てへのも可笑いから小哥のお前さん甥の積りにしませうかね甥が尋ねて來て奉公に行くと
 斯ふ云ふ遺梅にしませう、熊「何うでも好い甥でも從兄でも好いやうにして置きねへ、市「ヒ
 やアア甥と相場ア極めて置きませう、熊「夫れが好い、市「伊豆島三平ですな。市兵衛書て
 是れから玄藤吾平次の許へ來て、市「何分何卒先程申上げたのを願ひ升。玄藤の用人中村源
 兵衛が、源「夫れヒア市兵衛仲間好いか、市「結構でござい升、源「生國は何所だ、市「伊豆の
 下田でケス、源「伊豆の下田と……何んたい、市「私の甥でケス、源「ナ、お前の甥か夫ならが
 せに働くだらうなア、市「何んでケス、源「無暗に働くだらうなア、市「冗談云つちやア不可ま
 せん源兵衛さん和郎さんの様な人物と違うんだ背の高さ六尺力量が五十人力ある、源「へエ
 恐ろしい人間だなア何歳だい……、市「何んでケス、源「何歳だい、市「四十六でケス、源「夫
 つは少し年を取り過ぎて居るなア、市「私の年で……、源「貴様の年を聞くんじやア無い伊豆
 島三平の年齢だ、市「左様でケスか二十四か五でござい升、源「四なら四。五なら五と云はな
 きやう不可ない、市「ヒやア一ツも若い方が好いから二十四に爲て置きませう、源「全くかい
 市「全くでケスヨ今連れて來ますから。是れから證文をして歸つて來た、市「今歸つて來ま

した熊「御苦勞、何う爲たい市用人の中村源兵衛が開ましたから斯ふく云つといね年を聞かれて弱つたが旦那何歳でヌ熊二十四だ市旨へな二十四と違つて置きました熊「夫りやア蒙敵だ。シヤア……和郎に此長い奴と金子を預けて行くから市持てお出でなさい熊「ナニ仲間が斯んな物を持って往ちやア不可ない短つけへ方は用心に持て行くからなア市「然ふですか。風呂敷を出して大刀を包みて。シヤアお金子と刀を御預り申しましたヨ。是れから同道をして玄藤吾平次用人中村源兵衛の許へ行くと源兵衛も悦んで源大層な立派な者だ……と褒めて是れから玄藤の屋敷へ仲間に住込み此所を一生懸命だから朝も人より早く起きて水を汲み玄關を掃除をする外の仲間が追巻られて三人前の働きをする大層中村源兵衛感心をして好い奉公人を置當てたと主人の吾平次に云ふ吾平次も大層な奉公人を置いた斯んなのは金太敷で探しても無い結構だ」と己れの首の飛ぶのも知らないで悦んで使つて居る其内に熊吉が仲間奉公に住込み十日計り経過と笠間の主人佐竹彈正重國常陸の笠間領を狩鞍をしやうと云ふので二月八日九日十日三日が狩鞍の當日城下の者は皆狩鞍の當日は腰辨當で見物に行うと云ふ彈正重國家原彌太郎は更に驚く所は無いが原小太郎は天下の大薬徒だに由て新九に抱へたる諸國の浪人伎倆の秀でて居る尾州名古屋

の住人唐崎武者九郎力量七十五人に對し槍劍の先生。安藤典膳此人も力量五十人に對し其他柏木一角。野田三左衛門弟の三四郎同く三十郎。山隅五郎太屈強の家來二十四人を前後左右に従ひ寝るにも起るにも此二十四人が唐紙の外に守り何時塚原が城内へ切込んで來まいものでも無い來たらば巻打に討ちと云ふ手配がして有る位。馬上優かに跨つて佐竹彈正八方に眼を配つて狩鞍の馬所へ來り南の方に棧敷が設けて有る此方へ彈正邊り美々敷き姿にて扣へて居る名々思ひに嚴重なる身構ひに及び扱て狩鞍當日四ツ頃をいから貝役が螺貝を取り根太に吹き込んで掛り太敷を打つ追者は割竹を以て木の根岩角を暴しハツくく許多の獸物をば追出して來る諸々の毛物は人勢に當つて何かは堪るべきや化る通を失ひ散々に逃出して來る奴を弓に矢を番へてロローンツ、と切て放つ者もあれば鐵砲で打つ者もあり薙刀長巻槍を捻つて乗込み山兎。或は猿鹿小猪杯は山間から逃出して來る小猪くば尋ね來て見よ和泉なると洒落る所ではございませせん一散に馳けて來る奴をロロと矢を番へて放す小猪がハツツ倒れる見物はワイくくく獸物を倒す度びに褒め稱して居る然る所恰好正午と覺し頃遙か山間より土砂を卷て乗出して來たのは馬より一方小さい眞ッ白な狼年間を経たか口は耳まで割け荒れに荒れて追者を空天に馳け立て馳倒

し乗込んで来る光景は最と物凄く比沙門天の暴れたる如く許多の追者を東西南北に馳立て空天に馳け立て件んの白狼益々猛りくして彈正の棧敷前を臨んで荒れ込んで来る許多の見物手を叩き 甲「ア、一恐ろしい者が出た途方も無へ奴が出やアがつた 乙「何んと云ふ毛物だらう。と唯驚く計り彈正棧敷より是れを見て 彈「ヤ、美事なる動物なり討て捕れ〜。と呼はる 一同「心得たり。と刀を以てヤツと云ふてへと大刀が折れた薙刀で突くてへと薙刀は折れる其内に馬の足に喰ひ付く馬は騎馬武者と云に倒れる。何爲る背中へ松やにを塗つて砂へ轉がり天日で干固め亦松やにを塗つては砂地へ轉り天日で乾固めた身體だから刀だらうが槍だらうが通りつて無しと云ふ數百年を経た白狼暴れに荒れて乗込んで来る益々佐竹彈正の棧敷を目掛けて暴込んで来る手負即死は幾何か數ふる過もござりません此時一人陣笠を被り海老羅網の半具足を着けたる者其處へ出て飛び込み来る白狼の前へ大手を廣げてスツクと突立ち 男「サア来い。と手唾を付けて待て居る大勢の見物は是れを見て居たが 甲「ヤ、危ねいぞ〜 一同「那の雜兵が累卵いは。と聲を掛けるも耳へも入れず待て居る白狼は草駄天の如くに飛來つて那の雜兵を無理に馳け立てやうと来る奴をヒヨリと体を右へ飛違ひさせ向ふへ一足踐出さうと云ふ白狼の土手ッ腹を左りの足を揚げる。男「ヤツ...

...と一聲叫んで駈付けけるをさしもの大力に白狼三間計り向ふへ飛ぶ...處を得たりと飛込み來つて鐵槍の如き拳を揚げ面の中央をばボカーリ打つと何んぞ堪らん白狼の面は微塵に碎け血潮は流れて泉々と進り目は飛出して行方知れず馳て那の雜兵咽喉へ足を掛けるどモク〜と咽喉の骨を踐潰し大手を揚げて突立つたるは宛ら仁王の暴れたる計り。許多の見物手を叩き 一同「ワ、ワ、ワ、ワ...。と鬨の聲を揚げて褒め稱やす 甲「何んてへ仲間だらう 乙「恐ろしい強い野郎だなア何うも...。と褒め切て居る處へ使ひ番馬を以て乗込み來り 使番「ヨ、ヨ、ヨ、ヨ...。其方は何者の臣だ何んと云ふ姓名だ 熊「拙者は御家老玄藤吾平次殿の仲間伊豆島三平と云ふ者だ。其聲はガ、ガ、ガ、ガ〜耳に響く柏屋市兵衛木の上に乗つて見て居たが 市「ヤ、三平さん...何うも皆んな驚いたらう 丙「市兵衛さんお前知つてるのけへ市「知つてるの知らねへのつたつて那の伊豆島三平と云ふのは乃公の甥だ乃公が世話ア爲て仲間だ遣つたんだ 乙「ヘ、ヘ、ヘ、ヘ...市兵衛さん和郎さんの甥かい 市「乃公の甥...僅た一人の甥だ 乙「市兵衛さん和郎さんも私も同じ此の笠間で生れ小供の内から友達仲間だつたが兄弟も親戚も何んにも無へ和郎じやア無へか和郎僅た一人の人間じやア無いか何時甥が出来たんだい 市「ナ、其何んなんだ...乃公の甥だ確かに甥だ... 乙「お前さんの甥な

ら阿父さんの兄さんの子だとか阿父さんの弟の子だとか叔母さんの子だとか云ふのが
 甥だ和郎何んにも無へヒやア無へか 市「今は無へのよ乃公の親父の其親父の從弟の亦……
 從弟なんだ……其なんだ件なんだ 乙「何を云つてるんだ當ん成らねんだ市兵衛さん何んで
 も構はねへや好い者を世話ア被爲た 市「乃公が世話ア爲たんだ 丙「何しろ豪氣じやア無へ
 か恐ろしい強い人だ 市「強いたつて強くなへたつて日本一の豪傑なんだ 丙「何んだつて仲
 間なんぞに入れたんだモット好い者に爲たら宜からう 市「ナニ當人の好みだ實詮義の爲に
 家老の玄藤吾平次様の家へ住込んだのだえれへ者だせ夫りやア…… 丙「お前褒めると途方
 も無へ事を云ふから不可ねへ……と見物は唯呆れ返つて居る。使ひ番は引返して佐竹彈
 正へ御家老玄藤吾平次殿召抱への仲間伊豆島三平と云ふことを申上げる佐竹彈正聞て 彈
 吾平次其方の家來であるか 吾「御意にござり升 彈「善き者を家來に致して何うじや其方に
 は予が二百石の加増を遣はする由て伊豆島三平と申する者を予に呉れい。吾平次考へた 吾
 借いければとも二百石に成るなら主人に遣つても好い主人は首が果卵いから豪傑と見ると抱
 へて置くんた……エ、委細承知致しました 彈「此りや〜三平に目通り申付けける。其處で
 使ひが乗出して來て 使「三平とやら 三「ハイ 使「御主君がお目通り申付けける此處へ參るお

好い 三「有難ふござい升。と早速御棧敷へ上つて來る立派な人品でござい升 彈「其方が三
 平と申するか 三「御意にござり升 彈「盃を遣はすぞ 三「有難い仕合せ 彈「生國は何方だ
 三「伊豆の下田でございまして 彈「何うじや唯今予が所望致したが其方に二百石遣はすに
 由て今日より改めて予の近臣になれ 三「誠に何うも有難き仕合せ願ふても無き幸ひ御見捨
 無くば汗馬の勞を盡すでございませう有難き仕合せにござい升る。と御受に及び爰で佐竹
 彈正三日の狩鞍を濟せて笠間へ立戻り二百石の墨付を呉れる遂々三平二百石で佐竹彈正の
 近臣と相成りましたが斯ふ成ると大小が入用だに由て衣服を拜領致し立派やかなる侍と成
 り柏屋市兵衛へ遣つて來た 三「市兵衛さん 市「イヤー何うも……三平さん御上がんねへ。
 三平が來たのを見て近所合壁の者が門口へ集つて來た大勢の見物が立て居るから 市「三平
 マア此方へお上んな 三「何うも叔父さん御無沙汰致しました 市「三平何うも頃日は大した
 働きたつたノー 三「叔父さん見て居りましたかい 市「見て居る見て居ないので無い美事
 だつた 三「其奴ア有難へ。表に立て居た見物が 早「成程々々聞だせ……市兵衛さんが三平
 々々と云ふと叔父さん〜と云つてるから 乙「成程……市兵衛さんも素晴らしい興を持た
 もんだ……世話好だから何處からか拾つて來たんだらう 甲「結構な甥を拾つたもんだ 市「

サア見物乃公の甥は見世者じやア無へからモ一見せねへ。三平を奥へ連れて来て 市「杯付けませう 三」一杯御馳走に成らう身祝ひに…… 市「大變好い身拵を爲て居るじやアございませんか 三」此りやア貰つたんだお前と約束を爲た通り遂々二百石に成つた 市「何うだいマア眞實に陳候は違つたもんだなア其着物は貰つたんですかい 三」ア……其處で約束通り百石遣るせ乃公は百石有れば澤山だ 市「有難へなア夫れで今度狩鞍が有るたらう亦白狼を打殺して四百石に成る私が二百石貴郎が二百石……其處で亦狩鞍が有るたらう此度ア六百石……お前さんが三百石私が三百石 三」然ふ 市「今度亦狩鞍が有るたらうそらお前さんが四百石私が四百石……亦狩鞍が有ると一貫に成る 三」一貫と云ふ奴があるものか千石だ 市「千石に成るだらう私が五百石お前さんが五百石 三」然んなに狩鞍があるもんか 市「有難へな結構だ 三」其處で大刀を貰つて行くんだ金子は預つて置いて呉んな使うことは無いから 市「宜うござい升。と是れから大刀を申受けて屋敷へ歸り佐竹彈正の傍に出で年は若い根が苦勞を爲て居る熊吉だに由り佐竹彈正の氣に入るやう氣に入るやうと奉公を爲るから彈正は亦無き家來と思召し三平々々と肩を入れる是れを佐竹彈正の運の極め三平で無ければ夜も日も明けないと云ふ光景に相成りました處で佐竹彈正天運の盡たと云ふの

は吾一子八十九に妻を娶らせやうと云ふので世話爲る者があつて奥州白石の城主片倉小十郎の娘を八十九に配遇せやうと云ふ事に相成りました此彈正の一子八十九と云ふのは古今の美男……其處で片倉小十郎の娘を八十九に配遇るに就て何う爲ても彈正奥州白石の楯で乗込まなければ成らん事に成ましたと云ふは天運の循環 又人力の及ぶ處で無い時は何時ぞ永録二年三月二十七日佐竹彈正白石城へ乗込み萬事婚儀を整へたる歸るさ據龍明神へ參詣の途中塚原小太郎叔父彌六郎其他の者の爲に遂に此處に命を落すと云ふ迄の手續は次回に委しく言上を致し升島渡一ト息……

第 十 四 席

此片倉小十郎と云ふ方は片倉備中殿の御子息で此方の御子が有名の片倉小十郎日本の三家老と云はれたる人で伊達家で片倉小十郎毛利の家來の吉川監物阿波徳島の家來稻田九郎兵衛……稻田九郎兵衛は阿波の須本の城主で蜂須賀から二万石大公儀から一万石併せて三万石を貰つた天下高名の稻田九郎兵衛此三人を天下三家老と云う尤も親不孝の奴が極月の末方に白地の單物一枚で親を震へさして置く是れを寒からうくと云う片倉は伊達照宗の家老で有ります伊達照宗の子が伊達正宗。此正宗と云う方は御幻名を梵天丸と申上げて十四

歳としの時に御父伊達照宗おんちち二本松左京之介ほんまつさきやうのすけと戦たたかつて何なにう爲なても二本松が伊達いただに叶かなはない由よしで二本松左京之介ほんまつさきやうのすけの和陸わりくを構かまへて床机しやうきと床机しやうきと近寄ちかより和陸わりくを爲なやうと云いう内に大力無双たからむすぶの二本松伊達照宗ほんまついただてあきむねを突然とつぜんに小脇こわきに搦か込み己おのれが陣中じんちゆうに引取ひきとらうと爲なる御家來おんけらいは驚おどろいて薙刀なげだを以もつて跡あとを慕たうて行いく此時照宗このときあきむねの御子おんこ梵天丸ぼんてんまる須す早く鐵砲てつぱうを持もつより早く腰こし締めめに取とつて僅たた一發いっぱつの許もとに二本松左京之介ほんまつさきやうのすけの背せから胸むねへ掛かけて打貫うらつらき御父照宗おんちちあきむね諸共もろどもに討取うちとつて仕舞しまひ倒たれる處ところへ切込きりこんで二本松を切殺きりころし照宗あきむねを擔かいで陣中じんちゆうに立歸たちかへりました親おやを打殺うちころしても身體からだを敵たに渡わたさないと云いふ衆人しゆじん擧あつて梵天丸ぼんてんまるを褒稱ほめし十五じふごの時伊達正宗このときいただてあきむねと御成おんなり被爲なつて其後そのち小崎こさきを取とり小崎こさきの少將しょうしやう正宗あきむねと云いはれ是こゝより次第しだい々々くに切從きりしたがへて來きて奥州おくしゆう四十八しじゅうはち幡たてと云いふ一門いっもんを拵こへて仙台青葉山せんたいあはばやまに居城きやじやうを出來きて奥州おくしゆうの旗頭はたがしら伊達前中納言正宗いただてまなぶちゆうあきむねと成なり天下高名てんかかうめいの御方おんかた其正宗そのあきむね四十八しじゅうはち幡たての隨まに成ならうと云いふ片倉家かたくらがなんです然しかし未いまだ此時分このときぶんには永録年間えいりくねんかんでござい升まから片倉かたくらも小録せうりくで居ゐりました去されば佐竹彈正さたけだんぢゆうの方が此時分このときぶんは身分みぶんも上うなり録りも上うなり佐竹彈正さたけだんぢゆうは出家しゆが佐竹の家さたけのいへを横領やうりやう致いたして其勢そのいきほひ破竹やぶたけの如ごとくに由よしり片倉殿かたくらどのへ面會めんかいを爲なして一子いっしよの縁談えんだんを取極とりて來きやうと云いふので如何いかなる悪人あくじんも子故こごに迷まよつて奥州白石迄おくしゆうしやくぢ出向いでむかやうと云いふ夫おとこれに就つては磐龍いんりゆう明神めいじんへ參詣さんぎ致いたし松島等まつしまらうをも見物けんぶつ爲なつて來きやうと云いふので前後ぜんごの行列ぎやうれつ三百五十さんびゃくごじゆう人にん途と

中塚原小太郎なかつかづらこたろうを豫防よぼう爲なつて白石しやくしやくへ出向いでむかかうと云いふ扱あつて伊豆島三平いづしまさんぺいは城下じやうげの柏屋市兵衛かしやべいの處ところへ出でて來きて 三さん扱あつて市兵衛しべいさん至急ししゆきお前に頼たのみがあるがね 市いち何なにんです 三さん和郎江戶わらうえどの淺草あさくさの觀音くわんおん様さまへ參詣さんぎを爲なたいと云いつて居ゐなすつたが何なにうだ一いっつ觀音くわんおん様さまへ往いつて來きねへか路銀ろぎんは乃公おのこうが出ですが 市いちナニ路銀ろぎんは入りやア爲なない 三さんイヤ夫おとこれに就つて和郎わらうに頼たのみがある觀音くわんおん様さまは跡あとでも好いいが此處こゝから行道ぎやうだうを大急おほいそぎで駕籠かごへ乘のつても好いいから急いそいで往いつて貰もらいたい江戸えどの小石川こいしははと云いふ處ところへ往いつて貰もらいたいんだ 市いち成程なほほど宜よろうござい升ま 三さん其小石川村そのこいしははむらと云いふ處ところに島村九大夫しまむらくぢゆうだいふと云いふ者が有ある 市いち成程なほほど 三さん其島村小大夫そのしまむらこたふと云いふ人の内うちに斯かう云いふ人が有あるから其人そのひとに此手紙このてがはを渡わたして呉くれれないか 市いち承知しやうちしたヨ常陸浪人ひたちなみのうらじん仁科與四郎にせのよとてへ人ひとだね宜よろしい此人このひとに届とけるのか 三さんウム 市いち宜よろしい承知しやうちした 三さん此こりやア誠まことに失禮しつれいだが何なにんだ往いきの旅費のりばいだ 市いち五兩ごりゆうある斯かんなには要いらねへやな三平さんぺいさんマ扱あつて置おきなへ 三さんマアく持もつて行いつて急いそいで往いつてお呉くれれ 市いち承知しやうち爲なつた今いまから立たつから 三さん氣きの毒どくだなア 市いちナニ氣きの毒どくなことがあるものか。と深切しんせつなり氣きの短たんかい男おとこで御座おんざい升まから直なぐに仕度したどして柏屋市兵衛かしやべい笠間かさまを立てドンく馬うまへ乘のり駕籠かごへ乘のり武藏むさしの國くにへと乗込のりこんで來きて 市いち那なれ程ほど三平さんぺいさんが頼たのんだのだから觀音くわんおん様さまは跡あとにしやう。と豊島郡とよしまぐん小石川村こいしははむらと尋たずねて來きて 市いち少々せうさう

伺ひますが此御近邊に島村九太夫さんと云ふ郷士が有りませうか 甲「ア、モ一、二町計り往つて門構への立派な家です 市「有難うござい升。来て見ると立派な門構への家で島本小才次と云ふ表札が打て有る玄關へ掛つて 市「お頼申し升 取次「ドレ……何方から御出で被爲た 市「私は常陸の笠間から來ましたが御當家に斯う云ふ人が居り升か。取次が手紙を取て見ると常陸浪人仁科與四郎 取「エ、入つしやいます 市「何うか御進げ被爲て……差置さて宜しいんですからへい左様なら 取「ア、お茶をお一ツ 市「御茶などは要りません。とドソソ出て來た取次奥へ參つて 取「エ、塚原先生 小「何んじや 取「今一人旅人が參りました。此手紙を先生へ進げて呉れるとの事返事は要らんとお茶も飲まづに歸つて行きました。見ると伊豆島三平として有る 小「偕ては熊吉の書面……と封押開き讀下して小太郎満面に笑を含み 小「ア、熊吉の丹精甲斐あつて辱け無い……偕て小才次至急使脚を一人頼んで呉れ 小才「兄上畏まりました。机に向つて書面を認め使脚が來たに由り至急越後の國頭郡春日山へ委細を認めて持たして遣りました 小「偕て小才次是れより俺は奥州へ乗込まなければ成らん年來尾崎つたる處の敵佐竹彈正重國奥州白石へ乗込む由途中を待て切て出で太刀は目釘の續く限り臂は骨のあらん限り當の敵を切て放ち父の仇を取る了見永々の間御

厄介に成り辱け無い 小才「憐れ願はくば小生も何卒御供仰せ付けられるやうに若年ではござり升が拙者の爲にも姉三つ枝の敵佐竹彈正……。是れは塚原先生も無理に止せと云ふ事も出来ない現在の姉の敵を打ちたいと云ふのは道理千万其處で小才次の母に面會を致しまして 小「偕て母上年來尾崎ひし佐竹彈正大願成就しまするや但し當の敵は三百五十人と承はる衆寡敵せず小太郎が返り打に成りますれば夫れ迄……是れ迄永々の間御厚情辱け無く又小才次も同道致すと申し升るに由り供に連れて參ります 松「ア、小太郎有難く御座い升妾の爲には娘の敵彼れが爲には姉の敵響へ返り討に成らうとも武門の譽れ御同道の程を願はしうござる有難い仕合せ 小「然らば出立致すと其夜は臥り翌朝赤の飯を炊きまして松江殿塚原と一子小才次の首途を祝しまして遂に小石川村を出立に及ぶ何方が先へ往ても遠藤明神の拜殿に待合せると云ふ事が書面に書て有るから塚原は小才次を連れて遠藤明神と志す此方は使脚が宙を飛んで越後の國春日山へ乗込んで上杉入道謙信の御家來白賀志摩守屋敷へ趣きまして塚原の書面を叔父の彌六郎殿へ渡しましたるに由り塚原彌六郎書面を披き天へも登る心地致し偕て白賀志摩守に面會致し 彌「今般甥の小太郎より斯る書面到來致し兄の敵佐竹彈正奥州松島見物此時より外に討つべき處無し永々の間御厚情辱け

無い謙信公へ御願ひを致すでござらう。志摩守盡く悦び彌六郎を同道致して謙信公の御前へ罷り出でる上杉公右の話しを御聞遊ばし膝を打て。謙「ア、彌六郎永年の間望みし事將に成就爲んと爲て満足の至り定めし小太郎が一世一代の働きを致すで有らうが謙信儘なれば奥州松島へ同道致し天下に稀なる塚原小太郎が一世一代の働きを見物致したきもの残念なるかな見物に罷り越す事が出来ん」と我朝の項羽と呼ばれた越後の謙信實に本意無く思召した何故行けんと云ふのに永年信玄と川中島で戦ひ其合戦最中に足利十三代の將軍義照公より御頼みを受け謙信はモ一上洛爲なければ成らん京都へ乗込んで三好松永の悪政を取控ぐ謙信ならでは京都へ乗込んで来る者が無い故に上洛が近寄て居るに由り何う爲ても奥州へ出向く事が出来ん如何にも謙信本意無く思召て御傍らに扣へて居る鬼小島勝忠黒金上野之介を御招きに成り。謙「其方共兩人松島へ乗込み當の敵は三百五十人小太郎は案ずるに及ばねど彌六郎に對し危き處なれば助太刀に及べ兩人に暇を遣はす。鬼小島黒金雀躍り爲て。二人「ハ、ア此度の仇討助太刀は身に取て有難く盲龜の浮木優發華の花待ち得たる吾々有難く御殿頂戴致す。其時御殿に居たる人々。一同「塚原一族の者共實に何うも羨まし黒金と鬼小島儘なれば共に一族の敵打に行きたいが君命なければ止むを得ん。と爰に「

同旅行の用意に及んで塚原を伴つて鬼小島彌太郎黒金上野春日山を立て奥州盃盃明神へと乗込んで参る越後の春日山より盃盃明神へ来る方が小石川村から乗込んで来るから見ると近い先へ着たに由て宿を取り毎日盃盃明神へ参詣を爲て居る處へ塚原先生小才次と乗込んで参る扱て先づ一ツ旅宿へ泊り鬼小島彌太郎黒金上野にも厚く禮を述べて小才次父上の處を何分にも宜しく御頼み申す……小才次汝も萬事鬼小島黒金の二氏に従つて働かつしやい決して輕忽を爲ては成らん。と戒め扱て佐竹彈正が奥州へ乗込んで来るのを待構へて居る此方は佐竹彈正日を撰んで常陸笠間を發足に及び途中用心に用心を加へて白石へ乗込み片倉に面會致し願はくば御息女を伴八十九に賜りたい。如何にも差上げやうと云ふので約定を済し白石の城内へ一兩日逗留を致し是から日本三景の松島を遊覽爲し盃盃明神へ参詣を致さんと乗込んで参る鉄砲が三十挺弓が三十挺皆袋を掛け案内者が尾を追々進んで参り松島へと来る此松島は八百八島其八百八島の内に別景が三十六島有る此松島の觀音へ参詣を爲やうと云ふので皆々行列を立てまして第一が家老の玄藤吾平次第二番が柏木一角第三番が野田三左衛門第四番が野田三郎備へを七段迄に取て奥州松島時の觀音を臨んで進み 供方「ユーイ……ユーイ……寄れ」 甲「同役何も居ないじやア無いか 供「居なく